第2表　円形土壙測定値一覧表

土　壙　名	開口部(cm)	壙底部(cm)	深さ(cm)	形態 平面	形態 断面	遺　物	重　復	図・図版
1号（BP 1）	90×100	70× 75	6	ほぼ円形	皿状	縄文土器片	なし	2 2
2号（BP 2）	120×118	88× 84	30	円形	皿状	なし	なし	2 2
3号（BP 3）	110×120	95×111	18	ほぼ円形	皿状	なし	なし	2 2
4号（DP 2）	90× 84	80× 72	11	ほぼ円形	皿状	なし	なし	2
5号（DP 3）	93× 96	77× 81	9	不整円形	皿状	なし	なし	2
6号（DP 4）	83× 89	75× 75	17	円形	皿状	なし	なし	2 2
7号（DP 5）	85× 87	76× 75	14	円形	皿状	なし	なし	2 2
8号（DP 6）	112× 90	90× 78	14	不整楕円形	皿状	なし	なし	2 2
9号（DP 13）	62× 64	52× 54	6	円形	皿状	なし	なし	2
10号（DP 7）	80× 90	65× 75	15	不整円形	皿状	なし	なし	3
11号（EP 1）	75× 70	37× 56	11	不整円形	皿状	なし	なし	3
12号（DP 8）	95× 84	90× 70	6	ほぼ円形	皿状	なし	なし	3
13号（DP 9）	116×110	80× 96	22	ほぼ円形	皿状	なし	なし	3 2
14号（DP 10）	95× 87	75× 79	11	不整円形	皿状	なし	なし	3 2
15号（EP 2）	92× 80	74× 62	11	ほぼ円形	皿状	なし	なし	3 2
16号（DP 1）	81× 76	52× 54	11	不整円形	皿状	なし	なし	3
17号（DP 11）	136×164	94×134	15	ダルマ状円形	皿状	なし	なし	3 2
18号（DP 12）	73× 76	44× 46	9	ほぼ円形	皿状	なし	なし	3

2　窯

調査区の西北端で検出された。検出面は地山火山灰土であるが、上面はかなり削られていた。窯は1号、2号の2基であるが、共通の灰原をもち、いずれも地下に掘りこんでいるが上部構造については不明である。埋土と遺存状況から1号窯がより早く廃棄されたと推察されるが、時間的差ほどのもので同時期の窯と考えられる。なお、遺構の北および西側は既に削られておったが調査範囲においては付属する施設は検出されなかった。

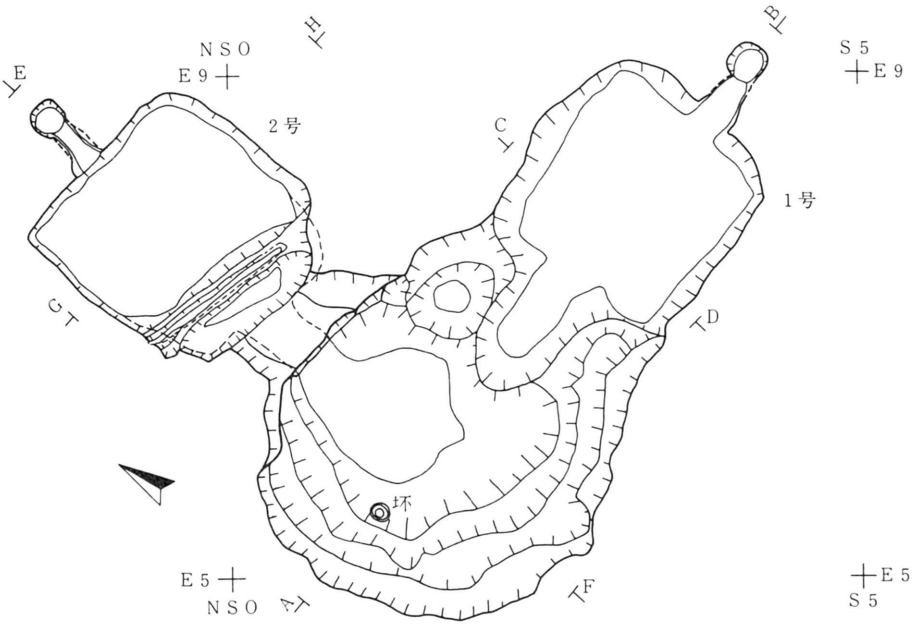
1号窯（第4図　図版3）

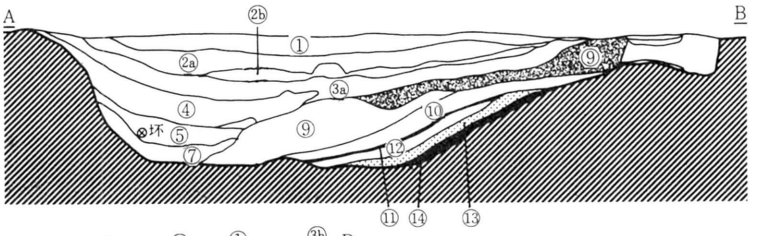
機能的には窯本体と灰原に大別される。更に本体は燃焼部・焼成部・煙道煙出し部になり、煙道煙出し方向は真北に対し約102°東を向き、本体から灰原までの全長約5.1mを測る。

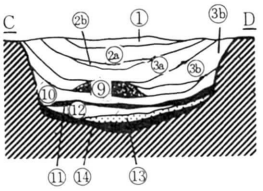
〔窯本体〕　**燃焼部**　灰原から焼成部に向って長さ約1m、幅約0.7mで10cm内外の落ちこみ部分で、後述の2号窯の例から、本来地山をくりぬいたものと推察される。

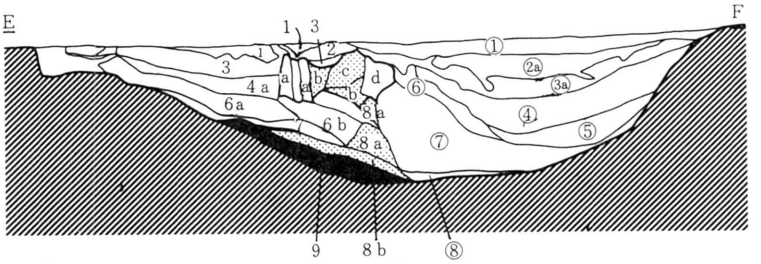
焼成部　平面は隅丸方形を呈し、東西約1.6m、南北約1.75m、検出面からの深さは西辺中央で約95cm、東辺中央で約34cmを測る。すなわち、底面は燃焼部から煙道に向って上がり、その角度は約30°で無段であり、また、南北断面は船底状を呈し、底は中央部にやや低くなり、壁は直に近く立ちやや外傾する程度である。底面、壁面とも強い火熱で瓦礫状を呈する。

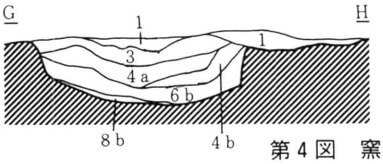
煙道煙出し部　焼成部の東壁ほぼ中央から東に、長さ約45cm、幅約20cm、高さ約12cmのくり

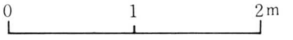












① 7.5YR 3/2 黒褐色土
②a 7.5YR 3/1 黒褐色土
②b 7.5YR 3/1 黒褐色土 若干炭化物を含む
③a 7.5YR 4/3 褐色土
③b 7.5YR 4/3 褐色土 aより炭化物多く焼土あり
④ 7.5YR 3/3 暗褐色
⑤ 10YR 4/4 褐色土
⑥ 7.5YR 5/8 明褐色土
⑦ 混合層(黒色土・明褐色土・赤褐色焼土)
⑧ 5YR 2/1 黒褐色土
⑨ 7.5YR 3/4 褐色土
炭化物多量の部分
⑩ 混合層(明褐色火山灰・赤褐色レンガ状焼土・炭化物
⑪ 炭化層
⑫ 7.5YR 5/6 明褐色土
⑬ 2.5YR 4/8 赤褐色焼土
⑭ 炭化層
1 ①と同じ
2 7.5YR 4/4 褐色土
3 7.5YR 4/3 褐色土
4a 7.5YR 3/3 暗褐色土
4b 7.5YR 3/3 暗褐色土 焼土を含む
5 7.5YR 3/3 暗褐色土
6a 7.5YR 5/6 明褐色土
6b 7.5YR 5/6 明褐色土 aより焼土が多い
7 7.5YR 4/4 褐色土
8a 2.5YR 4/8 赤褐色焼土
8b 2.5YR 4/8 赤褐色焼土 炭を含む
9 炭化層

a 暗褐色土 ―― 隔壁構築土
b 赤褐色焼土 ┐
c 赤褐色焼土 ├ 燃焼部天井
d 黄褐色火山灰土 ┘

第4図 窯1・2号実測図

ぬきで、コルタール状を呈した壁面をもつ煙道がのび、この先に径25cm×30cmの円形で、検出面から約30cmの深さをもつ煙出しがある。

〔灰原〕 窯本体の西側前面に径約2.6mの円形で、検出面からの深さ約1.17mの施設である。

〔埋土〕 ①・②a・②b層は、しまり弱く粘性の乏しい黒褐色土で類似点があり、②b層に炭化物を若干みる。③a・③b層の褐色土も、しまり弱く粘性に乏く、③b層でより炭化物が多く焼土を若干含む。以上の層は窯本体部分から灰原までに共通する埋土で黒褐色土ないし褐色土でしまりが弱く以下の層に比べ炭化物と焼土が少なく、レンズ状で自然堆積の様相を呈する。

④層は暗褐色土で、しまり弱く明褐色の火山灰土若干と炭化物を含み、⑤・⑥層は、それぞれ褐色土、明褐色土で、しまり弱く粘性あって焼土が斑点状に混在する。⑦層は、黒色土、明褐色土、赤褐色焼土の混合土で炭化物を多量に含むとともに、焼土がブロック状に混在し、非常にやわらかい。④～⑦層は2号窯の廃棄後に堆積したものと推察でき、1号窯本体にまでは及んでいなく、④～⑥層は自然堆積とみられるが、⑦層は2号窯本体方向から、人為的に一気に埋められたものと推察される。⑧層は黒褐色のやわらかいもので灰ともみられ、細い炭化物を多量に含み、2号窯使用時の堆積と考えられる。

⑨層以下は1号窯廃棄後で2号窯廃棄以前の埋土と堆積される。⑨層の褐色土はブロック状の焼土と多量の炭化物が混り、埋土各層の中では特に固く2号窯使用中に踏みこまれた人為的埋土の可能性がある。なお、⑨層中に図示した炭化物の多量な部分については、褐色土中に混ることから同一層に含めた。⑩層は明褐色火山灰土と瓦礫状の焼土、炭化物の混土層、⑪層は炭化物層、⑫層に明褐色で粒子の粗い砂質土、⑬層は瓦礫状で炭化物混りの赤褐色焼土、⑭層に比較的大きな炭による炭化物層がある。

以上の埋土状況で、⑩層以下はくりかえしの様相を呈するとともに、⑫層はあまり混りのない砂質土であり人為的に敷いた可能性もあることから、⑩層以下の層は窯の使用時に形成されたと推察でき、したがって使用は何回かに及んだものと考えられる。

〔遺物〕 共伴する遺物は全くない。

〔炭化物の材質〕 ⑨層中の炭化物は楢を主体に材質不明の雑木があり、⑭層中の炭化物もほとんどが楢で若干ケヤキがある。[註(1)]

2号窯（第4図 図版3）

1号窯と同様な形態および構造をもち、ほぼ同規模である。煙道煙出し方向は真北に対し約14°東を向き、1号窯との角はほぼ直角に近い。本体から灰原までの全長は約5.4mある。

〔窯本体〕 **燃焼部** 灰原から焼成部に向って長さ約70cm、幅約50cm、焚口での高さ約50cmの規模で、地山をトンネル状にくりぬいて構築したものである。断面E－Fのbは瓦礫状を呈する赤褐色焼土、cは赤褐色焼土で瓦礫化はしていないもので、dは黄褐色火山灰土で火熱によ

る赤変を認める。b・cはdが強い火熱によって焼土化したものであって、b・c・dは燃焼部の天井に相当する。

隔壁 燃焼部と焼成部を隔する壁の痕跡が、長さ約1.35m、幅約7cm、深さ35cm大の溝状に確認された。溝には炭化物混りの黒色土がみられ、板材を芯に用い、断面E－Fのaのように両側を火山灰土で固めて構築したものと推察される。

焼成部 平面は隅丸方形を呈し、南北約1.5m、東西約1.75m、検出面からの深さは南辺中央部で約80cm、北辺中央部で約30cmを測り、底面は煙道方向に約23°の角度で上がり無段である。東西断面は船底状で底は中央に低くなり、壁は直に近く立つ。底面および壁面とも火熱によって瓦礫状を呈する。

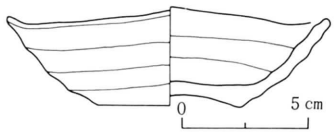
煙道煙出し部 焼成部の北壁のほぼ中央から北へ、長さ約40cm、幅約18cm、高さ約13cmのくりぬきの煙道があり、壁はコルタール状を呈する。先端の煙出しは径25cm×25cmの円形で、検出面からの深さは約24cmを測る。

〔灰原〕 窯本体の南側前面にあって、1号窯と共通する施設である。

〔埋土〕 灰原の埋土については1号窯埋土の項で述べたので、ここでは窯本体の埋土について記述する。1層は黒褐色土で①層と同じであり、2・3層は褐色土で、炭化物が2層では若干、3層では全般に斑点状で含み、ともにしまりが弱い。4a・b層および5層は暗褐色土で、いずれもしまりが弱く、4a層では炭化物をブロック状に、4b層では火山灰土、焼土、炭化物を斑点状に、5層ではボロボロした焼土塊を多量に含んでいる。6a・b層ではしまりの弱い明褐色土で炭と焼土を含み、6b層で焼土が6a層より多い。7層はもろい褐色土で焼土が斑点状に混在する。8a・b層は赤褐色焼土で、8a層は火山灰土が焼けたもので固い。8b層は炭化物を全般に含む、9層は炭化物層で、径4cm、長さ5cm大内外の炭が多量に認められた。

以上の埋土の状況で8b層と9層のあり方は、1号窯の⑬層と⑭層に類似し2号窯も何回かの使用があったものと推察されるが、1号窯にみられるような焼土層と炭化物層セットのくりかえしがないことから、1号窯より使用回数は少なかったと思われる。また、8a層は火山灰土が焼土化し焚口全般に及んでいたことから、焚口の密閉土かと推察される。

〔遺物〕 灰原埋土⑦層上面から坏（第5図 図版3）1個体が出土した。出土地点から2号窯廃棄時または直後に現位置に所在したもので、削平部分は別として調査区内では同様遺物を出す遺構はもちろん1片の遺物も検出されないことから、他方からの流れ込みとは考えられず、窯使用者と直接関係する遺物と推察される。



第5図 灰原出土坏

坏はロクロ使用のほぼ完形のもので、口縁径12.7cm、底部径5.8cm、器高3.9cmあり、体は若

干丸味をもって立ち口縁に変化なく、全体にゆがんでいて、底部切り離しは回転糸切り無調整である。内外面とも橙色を呈した酸化焔焼成の土器で、口縁内外の一部に黒斑状の部分を認めるが、火焔等による二次的なものの可能性もあり、胎土に石英、砂粒等を含み焼成は普通である。

〔炭化物の材質〕　6a層中の炭化物および9層の炭化物は楢である。[註(2)]

〔炭化物のC^{14}測定結果〕　9層の炭化物をC^{14}年代測定した結果、1950年から1060±80YB・Pとなった。[註(3)]

註(1)(2)　岩手県木炭協会　製炭経営指導員・早坂松次郎氏による。
(3)　㈳　日本アイソトープ協会による測定

II まとめ

1 土 壙

(1) 溝状土壙

いわゆる「溝状遺構」・「V字状溝」・「陥し穴状遺構」・「T（トラップ）ピット」等々の呼ばれ方をする土壙である。

〔分類〕　5基の検出であるが、規模的にみると1～3号土壙は、開口部長軸で240cm～270cm、短軸は65cm～80cmの範囲に入り、深さは82cm～120cmとやや幅があるものの、全体的に近似する規模である。形態的にも、平面長方形状で、短軸断面は「Y」字状を呈するが壙底部でも比較的幅広く、長軸の両端壁はやや外に開く等の類似点をもつ。これらをI類とする。

一方、4・5号土壙は、それぞれ開口部長軸で384cmと320cmあり、短軸は58cm、50cm、深さは134cm、104cmあって、平面形は挾長な楕円状を呈し、短軸断面は「Y」字状であるが全体的に幅挾であり、長軸の両端壁は奥に袋状に快りこまれる。これらをII類とする。

〔配列・機能〕　（第7図遺構配置図）遺跡の立地する台地（遺跡地形図7ページ）は西南から北東へ低くなり、直線にして約500m間でおよそ7mの高低差をもつが、等高線は大筋で北西から南東へほぼ等間隔に走り、景観上は平坦である。

I類の1～3号土壙の長軸方向は、真北に対し51°～56°西に偏する。すなわち、ほぼ同方向であり等高線に沿う状況で、しかも、3基は並列して位置して、その間隔は1・2号土壙間で24m、2・3号土壙間で26mと近似である。以上の状況は規則性があり、他遺跡でも類例をみることから、3基の土壙はセットで意図的に同時に構築配列された可能性もある。[註(1)]

II類の土壙では、真北に対する長軸方向は4号土壙で24°東へ、5号土壙で60°西へ偏する。すなわち、5号土壙は1～3号土壙と近似する向きであり等高線沿いで、4号土壙は交差する状況になり、両土壙間は55mある。以上からは相関は不明である。

しかし、類は異なるが、1～5号土壙を通して位置関係をみると、1号土壙の南東27mに5号土壙、3号土壙の南東25.7mに4号土壙が位置し、前述した各土壙間隔を整理し1・3・4・5号土壙を結ぶと、2号土壙は長辺の中間に位置することになる。

以上は偶然とする余地をもちながらも、土壙間隔や方向に意図性を仮定することができるならば、1～5号土壙は同時存在の可能性もあり、各土壙は相関しながら個別に機能したものか、形態、方向による機能分野があったものか、配列のあり方も地形条件等から更に検討を要する。

一方、土壙の形態によって時期差があると仮定すると、少なくともⅠ類とⅡ類は時期を異にすることになり、前述の平行四辺形状の配列は意図性のないものとなるが、いずれにしても今後に残される課題であり、ここでは事実の記述にとどめる。

本調査区においても言えるが、この種遺構は住居跡等の所在しない場所で検出される例[註(2)]や、他種遺構と重複所在しても同時存在ではなく[註(3)]、遺構種別としては存在時期に極めて単独性が強く集落地と隔している。この様相も推定根拠の一端となろうが、狩猟の「陥し穴」説[註(4)]が有力になっている。その理由は割愛するが「陥し穴状遺構」の呼称[註(5)]はそこに寄るものである。

〔年代〕　年代決定の資料はもちろん遺物は全く共伴しない。しかし、この種遺構については縄文時代に比定される報告例が多く[註(6)]、本調査区の遺構もその範ちゅうに入るものとして大過なく、更に本調査区から約200～300mの地点に第Ⅳ区・第Ⅶ区の調査区が所在し、縄文中期前葉から中葉の集落がみられる。本遺構との関係は不明であるが参考に記す。

（2）　円形土壙

円形を基調とする平面形をもつことから「円形土壙」と仮称したもので18基を検出した。

〔規模と基本形態〕　第2表の測定値をグラフ化すると第6図のようになる。以下だるま状の平面形を呈する17号土壙を例外として、平均値は長径94cm、短径87cm、深さは13cmであり、この数値に近似する径80cm～100cm、深さ10cm～15cmの幅に入る土壙が最も多く。更に径70cm～120cm、深さ20cm以下にほとんど入り、削平等を考慮すると多少の変動はあるにしても、この類土壙の規模は径70cm～120cm内外、深さ20cm内外が基本になるものと推察される[註(7)]。

長径と短径差の大・小によって、円形もしくは楕円形により近い平面形を想定できるが、8号土壙の22cm差が最大で他は10cm内外以下であり、楕円形より円形に近い平面形を基調とするものが多く、壁は外傾し底面は平坦で皿状の断面を呈する[註(8)]。

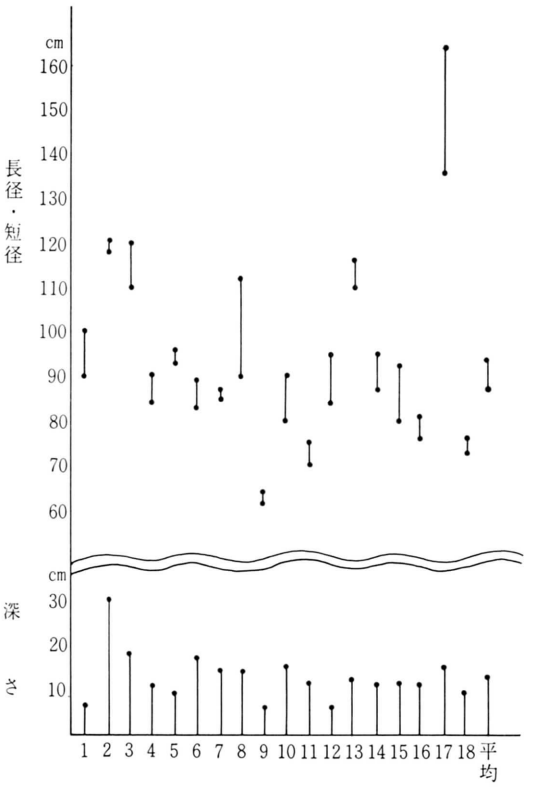
〔分布状況〕　第7図でも示されるように、土壙は小群をなした分布である。幾通りか小群が想定されるが、Ⅰは3基が単位で、aの三角形状、bの直線的に配されるもの、Ⅱは2基が単位となるもの等である。すなわち、Ⅰaは1～3号土壙が基本であり、これをふまえると4～6号土壙・7～9号土壙でも言える。しかし4－9号土壙ではⅡの小群も考えられる。Ⅰbは12～14号土壙、Ⅱは10・11号土壙である。他に単独を想定されるものもある。

小群が集合し、更に群を構成する、Ⅰa の2小群の集合が4～9号土壙で、これにⅡの10・11号土壙が入り1群を、Ⅰa の12～14号土壙に15号の土壙が加わって1群を構成する可能性もある。以上は群として東西方向に走るのも興味ある。

以上は、図上作業で感じたことの一部を述べた。決定的根拠はもたないが、基本的には群をなす分布と言える。

〔性格・機能〕　不明である。

〔年代〕　1号土壙から磨滅した縄文土器2片が出土したのみで、詳細を欠き年代不明であるが、縄文時代に比定できるかとの仮定もある。[註(9)]



（土　　壙）

第6図　円形土壙測定値グラフ

註(1)　高柳遺跡「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書」－1－岩手県教育委員会　1979　栗田Ⅲ遺跡「埋蔵文化財発掘調査略報」岩手県教育委員会　1979　その他にも並列する例はあるが、本調査区のように土壙間隔の長いものは少ない。

(2)　前掲(1)報告書所収の大久保遺跡・大緩遺跡、高柳遺跡、その他あり

(3)　湯沢遺跡「岩手県埋文センター文化財調査報告書第2集」㈶岩手県埋蔵文化財センター

(4)　今村哲爾縄文時代の陥穴と民族誌上の事例の比較「物質文化」27　前掲(3)他

(5)　前掲(3)

(6)　前掲(1)(3)他

(7)(8)(9)　本書所収第Ⅴ区の項

2　窯

〔1・2号の関連〕　1・2号とも、同形態、同規模、共通する灰原施設を有していることは、同時期の施設と断定でき、遺存状況から1号が先行したとも推察できるが、季節による風向の関係等で使い分けをした時期もあったことも可能性として考え得る。

しかし、季節による使い分けがあったとしても、遺存状況と埋土から、ある時期に1号が2号に先だって破棄されたものであろう。

〔性格・機能〕　かなり強い火力が作用しており、製品の焼成窯であることは言える。しかしその製品は不明である。

形態としては、半地下式で焼成部と燃焼部があり、隔壁をもち、埋土⑦層のあり方と2号窯8a層にみられる焚口の密閉土の遺存から、焼成部の製品は天井部を除しとり出したと推察さ

れ、焼成部底面の傾斜と、火道がないことを除くと、坂詰秀一氏の言う[註(1)] 土器焼成の平窯に共通する点もある。

しかし、土器焼成の窯とするとき、窯本体では一点の土器片すら出土なく、灰原出土の坏1個体も、状況からみて本遺構での製品と考えられず、その他の遺物も全く認められなく、土器焼成窯とは肯定し難い。と、するならば、このような本格的な窯で、しかも蒸す状況での生産製品は何か、仮定として考えられるのは木炭である。

窯の年代予察は後述するが、10世紀代かと考えられる。木炭生産は古代においてすでに竈を築いておこなわれていた[註(2)]とされ、その様式や技術は中世に入っても明らかでない[註(3)]と言われている。

そのような中で、中世以前の炭窯として、栃木県佐野市の北山1号～4号炭窯の報告例がある[註(4)]。それによると、1・2号は登窯的構造（1類）、3・4号は床面ほぼ平らな平窯的構造（2類）としている。4号に例をとると幅約60cm、深さ約60cm、現存長約13mで、焚口の前面に3.5×2.5mのほぼ方形の浅い凹みがある。以上からして、本調査区の1・2号窯とは形態上差異がある。しかし、岩手県東盤井郡室根村所在の明治初期の炭窯は三角形、明治中期の炭窯は丸形であったとされ[註(5)]、明治期においても必ずしも一定平面をしていない。したがって、北山窯と本調査区窯の形態に相異があっても大きな予盾はない。

さて、1・2号窯とも比較的大きな炭を多量に遺存し、その樹種は楢を主体にした雑木であることに特色がある。炭が検出されたときの状況は観察がなく不明であるが、窯埋土記録には「現在の炭と同じような炭」とある。同様の炭は灰原では検出されていない。この多量の炭の遺存は燃料としてよりも製品そのものと考えることは無理だろうか。同時に灰原に同様炭の遺存がなく、天井部を除し製品をとり出した状況と一致する。このような状況は現在の製炭技術からみると黒炭の製炭方法に類似する。ただ、2号窯の炭遺存が燃焼部に厚くあることに問題はある。

性格、機能を明確にし得る根拠に欠け、非常に恣意的になるが、現在の資料と推察できる範囲で敢て言うならば、一つの可能性として考えられるのは炭窯である。

〔年代〕 年代を知る手がかりは、灰原埋土⑦層上面出土の坏と C^{14}年代測定結果である。坏についての詳細は遺構の項で述べたので割愛するが、酸化焔焼成で内外面とも橙色を呈し、回転糸切り無調整のもので、いわゆる内黒土師器坏、須恵器坏とは異なる。形態や技法等からみて10世紀に推察するが、単独出土であり特定できない。

一方、2号窯9層の炭を試料に C^{14}年代測定の結果、1060±80YB・P で、西歴1950年をさかのぼると890年が算出される。±80年の巾では810年～970年となり9世紀初頭から10世紀後半となる。

推察した出土土器の年代観とC^{14}年代測定結果は10世紀の巾の中でほぼ合致できる。すなわち、現在の資料からは、10世紀代の年代観が得られる。

〔まとめ〕　炭の発達過程からみると、自然発生的な伏焼き法[註(6)]による金属加工用の製炭が優先したといわれ、伏焼炭は良質でなかったため、炭が暖房、炊事に用いられるようになると、良質な炭が要求され、窯による製炭が出現したとされる。

奈良、平安時代は、窯による炭をアラ炭と言い、主に朝廷、貴族、豪族階級が用い、金属加工用の炭は伏焼きのニコ炭と言われるものであったとされる。

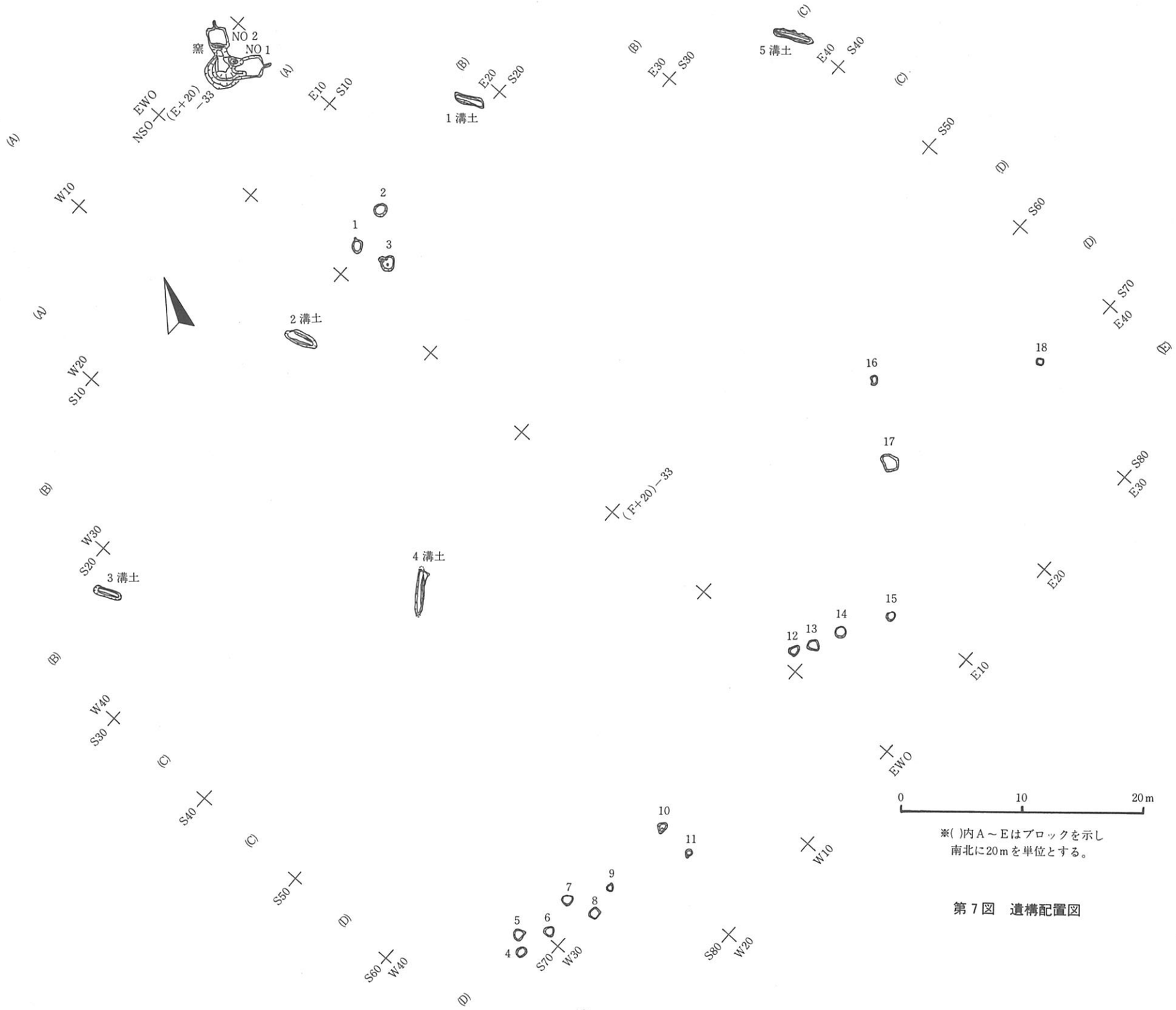
このような炭の発達過程と製炭法の別による使用目途のちがいからすると、1・2号窯が10世紀代の炭窯との前提にたって、この窯の生産品を需要する場はどこに求められるか、前述のようにアラ炭が特定の階級の需要に供されたとするなら、当地方にもその需要先が特定される場があったのか課題である。

〔付記〕脱稿後、青森県「古館遺跡[(7)]」、福岡県「大野城跡[(8)]」に炭窯の報告例を知見した、前者は、地山ローム層を掘り下げて構築し、円形で全長3.0mで焚口と煙道をもつ、11世紀頃の年代観を与えている。後者は、長径2.30m短径2.10m深さ70cmの楕円形の竪穴で、底面は焚口を低く、奥に高くし、角度は10°程であり、最奥部に煙突をもつ、窯本体の断面は、本調査区1号・2号窯に似る。なお、年代は特定せず、引き続いて検討を加えたいとしている。

註(1)　坂詰秀一　平窯についての予察「歴史考古学研究第一」　ニュー・サイエンス社　昭和44年
(2)(3)日本木炭史編纂委員会　古代の木炭生産・中世の木炭生産「日本木炭史」　㈳全国燃料会館　昭和35年
(4)　大川清　北山窯跡付炭窯「下野の古代窯業遺跡」(本文編Ⅰ)　栃木県教育委員会　昭和51年
(5)　岩手大学吉田栄一氏から実際に調査されたことにもとづき教示をうけた。
(6)　製炭法の一種で木材を横に積み重ね、火をつけ、土をかけて蒸しやきにする方法
(7)「碇ヶ関村　古館遺跡」　青森県教育委員会　昭和54年度
(8)「特別史跡　大野城跡Ⅳ」　福岡県教育委員会　1980

参考、引用文献

岸本　宅吉　著　「炭」　丸ノ内出版　昭和51年



※( )内A～Eはブロックを示し
南北に20mを単位とする。

第7図　遺構配置図

第 Ⅳ 地 区

第 IV 地 区

I 検出された遺構と遺物

現況は杉林であったが、土取り作業中の遺跡確認であったため、既に重機による抜根攪乱と地山の一部削平があり、遺構の遺存状況は極めて悪かった。検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡及び埋設土器、柱穴状ピット、土壙と平安時代の竪穴住居跡、土壙、中世の墓壙等である。

1 縄文時代の遺構と遺物

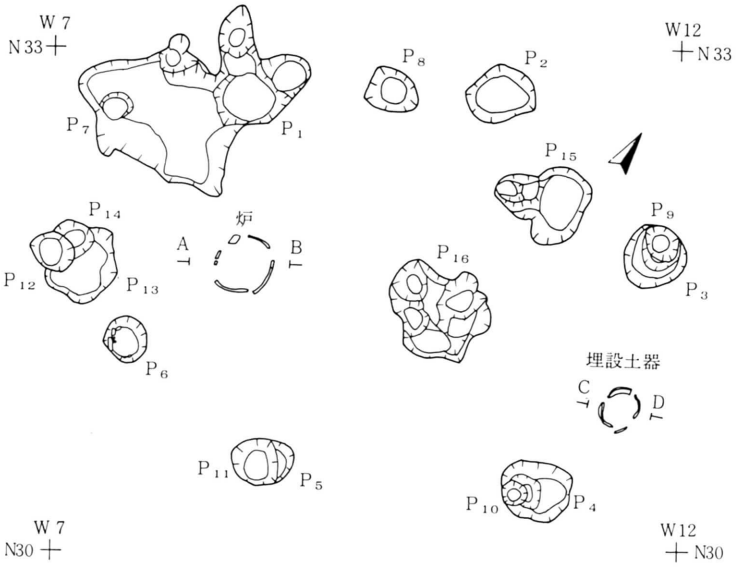
(1) 竪穴住居跡と出土遺物

1号（Ab10）竪穴住居跡（第1図　図版1）

Ab10区南端に位置し(第2図)、粘質火山灰地山に炉に使用したとみられる埋設土器と柱穴状ピットの存在で住居跡と推察したが、平面形、規模、堆積土、壁、周溝等は不明である。

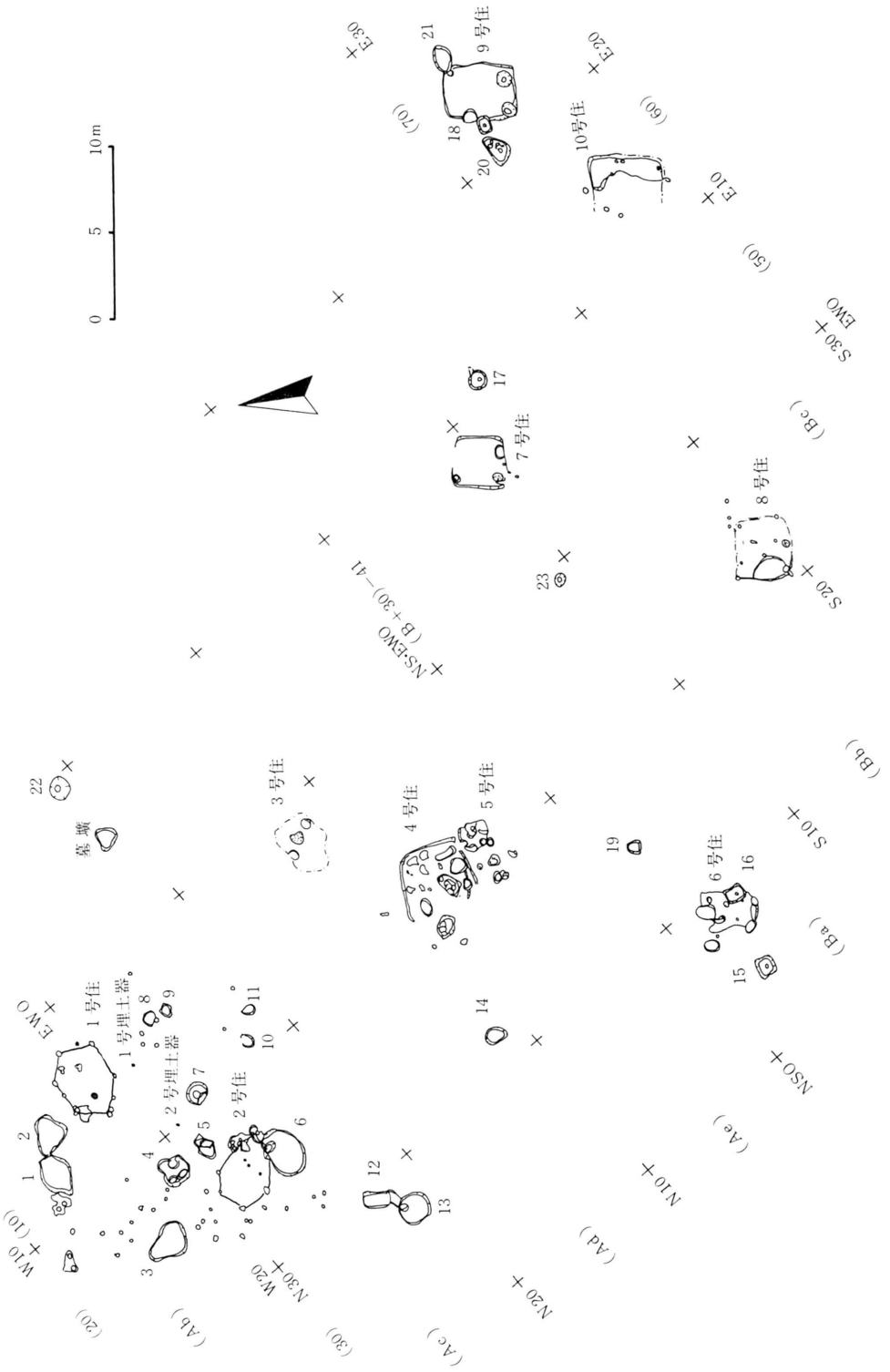
〔重複〕　柱穴 P_1～P_6 とする古住居跡と柱穴 P_7～P_{12} とする新住居跡との重複、増改築が推察される。

〔床面〕　削平された部分があり確証できないが、炉埋設土器口縁の残存からして明褐色火山灰地山面を利用したものとみられる。



第1図　1号竪穴住居跡

第２図　遺構配置図


0
5
10m
1号住
1号埋土器
2号埋土器
2号住
3号住
4号住
5号住
6号住
7号住
8号住
9号住
10号住
墓壙
EWO
W10
W20
N30
N20
N10
NSO
S10
S20
S30
EWO
E10
E20
E30
NS·EWO
(B+30)−41
(Ae)
(Ad)
(Ac)
(Ab)
(Aa)
(Bb)
(Bc)
(10)
(20)
(30)
(50)
(60)
(70)

〔柱穴〕 P_1～P_{12} が柱穴と推定されるが、配置と柱穴間隔及び重複からみて、P_1～P_6の柱穴は古期、P_7～P_{12} の柱穴は新期の住居跡のものと考えられる。

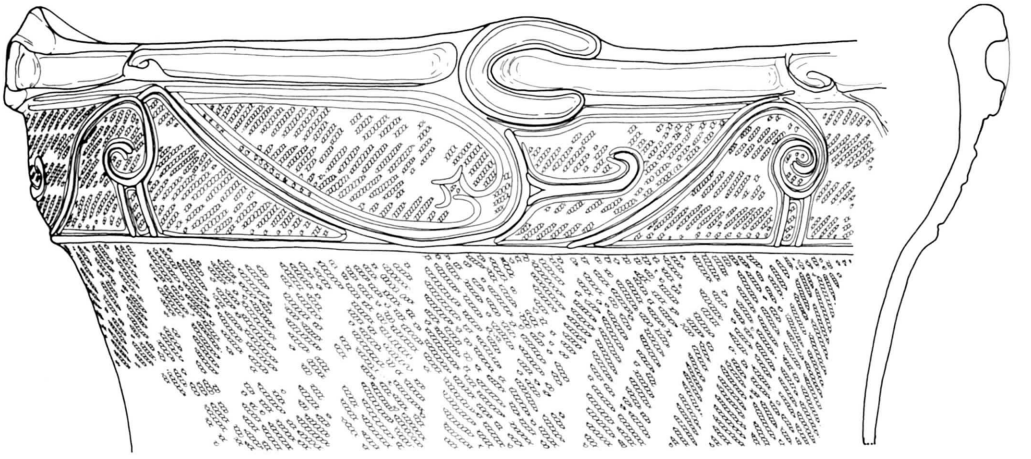
P_1～P_6 は円形もしくは楕円の平面形で、平均径が48cm、深さ26.5cmあり、各柱穴間隔は、P_1—P_2 へと順次に 2 m・1.8m・2.1m・2.2m・1.5m・2.2mとなる。

いっぽう P_7～P_{12} は円形平面で平均径は33cm、深さが33cmあり、各柱穴間隔は P_7～P_8 へと順次に2.2m・2.5m・2.3m・2.0m・2.2m・1.3mとなる。

P_1～P_{12} の柱穴を古・新期住居跡の相関でみると、P_3・P_9、P_4・P_{10}、P_5・P_{11} がほぼ同位置にあり、いずれも後者が前者を切っておるものとみられ、 P_3・P_4・P_{10} に対し P_9・P_{10}・P_{11} が新しいものと考えられる。

〔炉〕 P_{16} は不整形な平面であるが、径は約90cm×70cm、深さ15cmの掘り込みで、埋土は上層に炭化物、焼土、火山灰を含む固い黒色土があり、下層から汚れた火山灰の褐色土とになる。上層の黒色土に炭化物、焼土を認めることと、位置的に古期住居跡の中央付近に所在することから、古期住居跡に伴なう炉跡かとも考えられるが明確ではない。

位置と遺存状況から新期住居跡に伴なうものと推察されるのが土器埋設炉である。新期住居跡の西半中央付近に所在し、使用土器は(第 3 図)、キャリパー形深鉢の胴部を切断し正位に埋設したもので、口径が約50cm、残存する器高は約23cmあり、土器内の埋土は（第 4 図）上から黒褐色土、褐色土、明褐色土でいずれも炭化物と焼土が少量混入しており、土器口縁内側器面の一部に、火焔による赤色変化が認められるが強い火熱を受けた様相ではない。



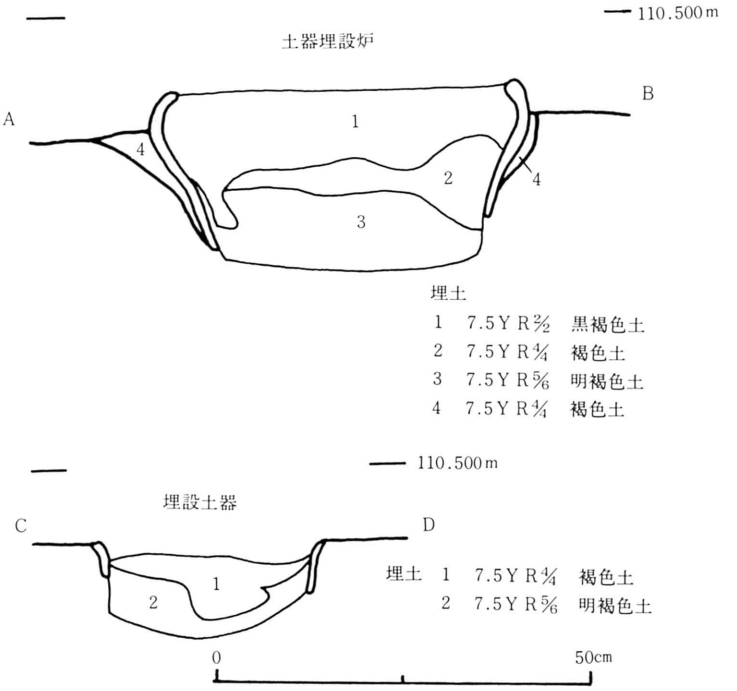
第 3 図　炉埋設土器実測図

0　5　10m

〔その他の施設〕

土壙と考えられるものが P_{15} である。径約45cm×65cmの楕円形で深さが約15cmで埋土は上から黒色土と明褐色火山灰土の2層からなる。

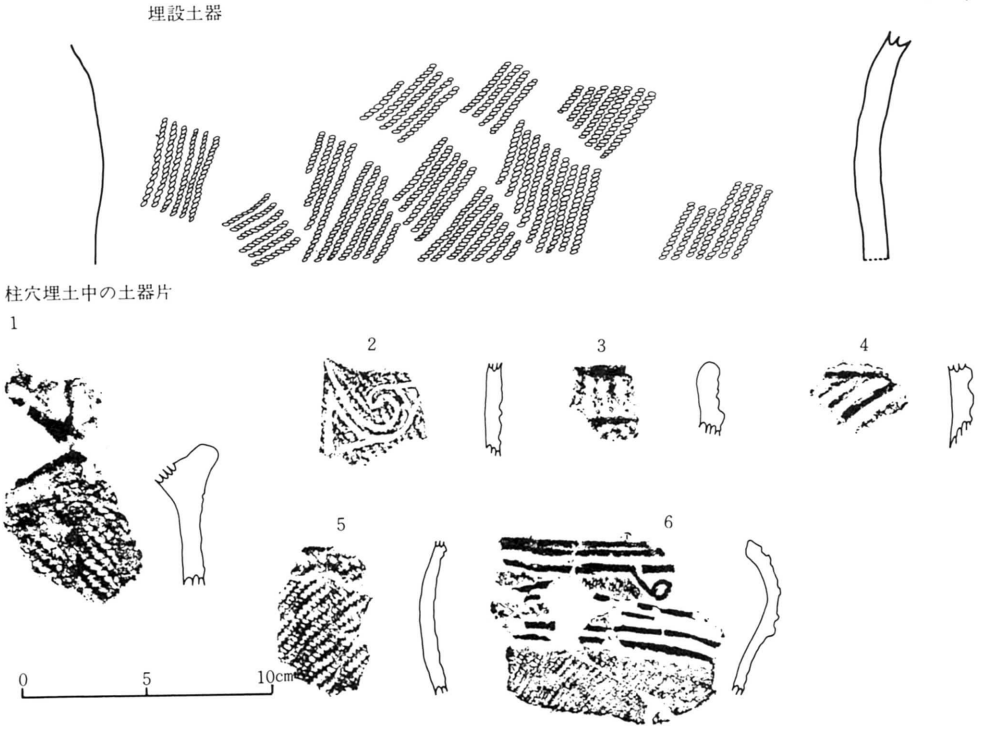
埋設土器（第4・5図）、住居跡東端に埋設されたもので、深鉢の胴部を切断しその上半を正位に埋設使用したものとみられるが、口縁はブルドーザーによって削平されている。埋土は上から褐色土、明褐色土であるが、プラン検出時に上部にかすかに焼土がみられ、弱い火を受けている可能性がある。ただ本住居跡に伴なうものとしての積極的根拠に乏しい点がある。



第4図 土器埋設炉・埋設土器断面

〔出土遺物〕 縄文土器片22点（口縁5、胴部13、底部4）、復元可能土器1点でいずれも柱穴状ピットの埋土中や埋設土器である。分類できたものには4類a、5類d、e、9類等が見られる。第5図6は、細い平行隆起線の区画文や渦巻文を施したキャリパー形の中型浅鉢で、5類eに分類される。既述の第3図の炉の埋設土器は、キャリパー形の大型深鉢で胴部底部を欠損している。口縁部は隆沈線の区画文、渦巻文が施され、口縁上端には、隆帯にはさまれた幅広の沈線帯をもち、4箇所の大型「C」の字状突起と小型の渦巻状突起を配している。地文は単節斜行縄文L－Rを口縁部は横回転、胴部は縦回転で施文している。胎土に砂粒、雲母を含み焼成は普通で、内面は灰黄褐色、外面はにぶい褐色を呈する。5類dに分類される。

その他使用痕のある剝片（第28図11）が出土している。



1・2……P_8　　1－9類
3～5……P_3 or P_9　3－4類a　4－5類d　5－不明
6　……P_5 or P_{11}　　5類e

第5図　1号住土器実測図・拓影図

2号（Ac20）竪穴住居跡（第6図）

Ac20区北半に位置し(第2図)、粘質火山灰地山に炉に使用したとみられる埋設土器を中心に所在する P_1～P_5 の柱穴状ピットから住居跡と推察した。平面形、規模、堆積土、壁、周溝等は不明である。

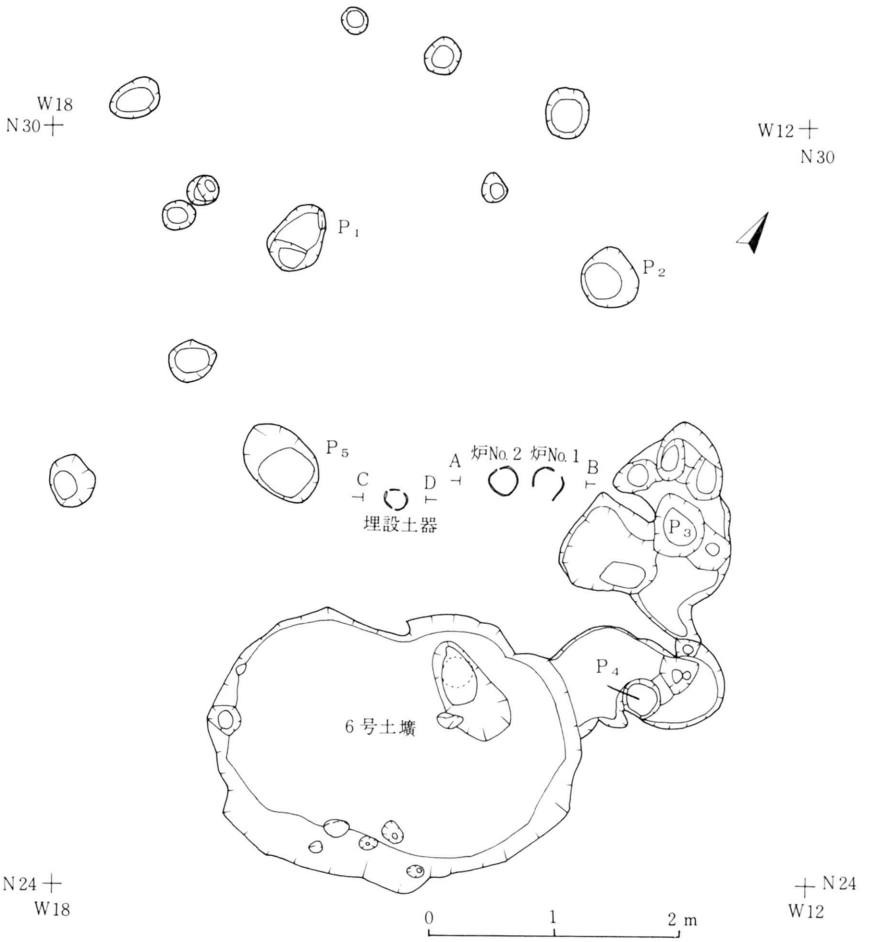
〔重複〕　6号（Ac20No12）土壙と重複し、本住居跡が古いものと考えられる。

〔床面〕　住居跡内の炉埋設土器の上部はいずれも削平されており、床面も本来の面が留められていないものと考えられるが、明褐色火山灰地山面をそのまま利用したものと推察される。

〔柱穴〕　P_1～P_5 がこの住居跡を構成する柱穴と考えられ、円形もしくは楕円形の平面で平均径が約53cmあり総じて大きく、平均深さは約40cmある。

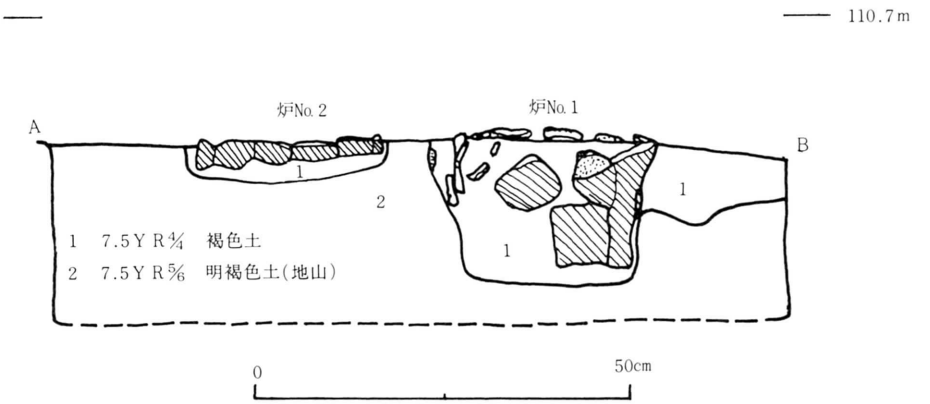
各柱穴間隔は、P_1—P_2 と順次に2.4m・2.0m・1.4m・3.3m・1.9mとなるが、P_4—P_5 間は3.3mと大きく開いており間に一本あったであろうとみられ、配置からすると6号土壙内北端の落ちこみ付近が推定される。

〔炉〕　（図版2）土器埋設炉で、No1・No2が隣接しほぼ中央に位置するが時期的相関は不明である。



第6図　2号竪穴住居跡

第7図　土器埋設炉断面

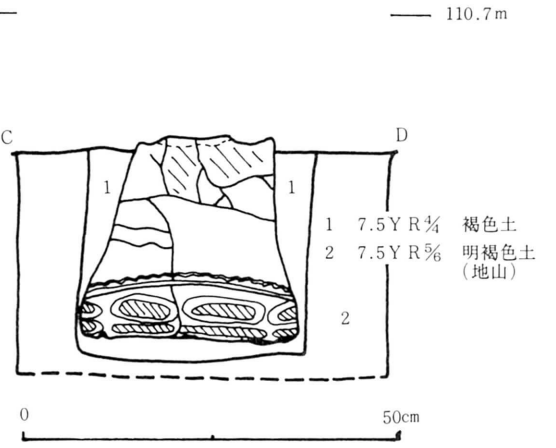


No 1 炉（第 7・9 図）は、深鉢の胴部を切断し正位に埋設し使用したもので、土器の口縁は損失しているが径は約25cm、残存する器高は約16cmであり、土器内の埋土は黒色土と地山火山灰土が半々に混合した褐色土で焼土と炭化物が上面に観察された。

No 2 炉（第 7・9 図）は、No 1 と同様に深鉢の胴部を切断し正位に埋設し使用したものである。土器上部は削平のため損失しているが、残存部の径は約20cm、器高約3.5cmあって内部の埋土は汚れた火山灰土が僅かに残り、上部に焼土と炭化物が若干みられた。

〔その他の施設〕　No 2 炉の南西約90cmに埋設土器（第 8・10図　図版 2）がある。本住居跡に伴なうものとする確証に欠けるが、住居跡範囲に位置するものとしてあげておく。口径約30cm、残存する器高は約25cmの深鉢であり、底部を欠くが、削平のため欠けたものか、元来意図的に接断したのか不明である。

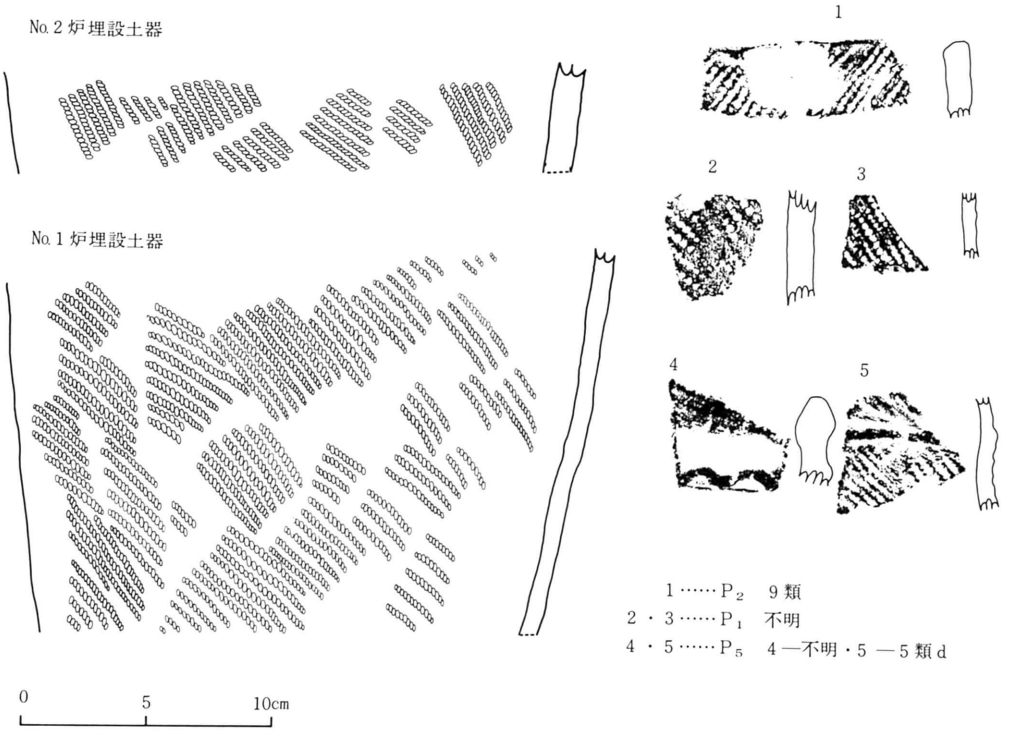
土器は、地山火山灰土を円筒状に掘り込み、その中に反位に埋設したもので、土器中の土は黒色土に若干の焼土が混入したものである。



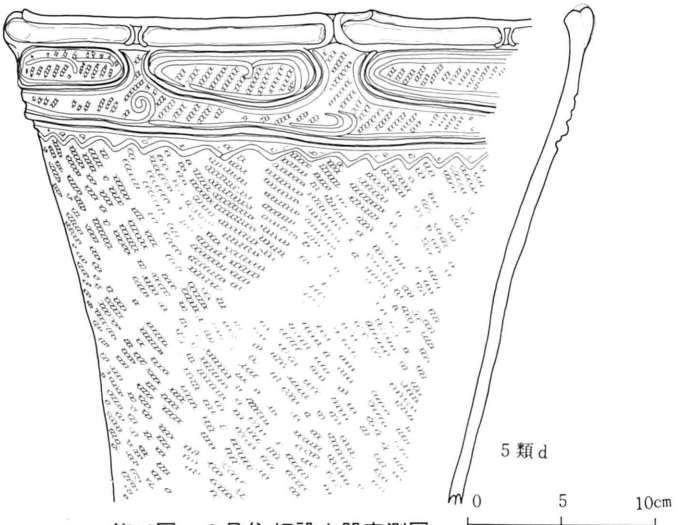
第 8 図　埋設土器断面

〔出土遺物〕　縄文土器片は13点（口縁 2 、胴部10、底部 1 ）、復元可能は埋設土器の 1 点だけである。分類できた破片には 5 類 d ・ 9 類などが見られる。第10図の埋設土器は、口縁やや内湾ぎみの、植木鉢状の中型深鉢である。口縁部は隆沈線の長楕円区画文や渦巻文を施し、口縁上端にも隆起線の長楕円の区画文をもち、頸部には沈線の連弧文がめぐる。地文は単節斜行縄文 L－R で、口縁部は横回転、胴部縦回転で施文する。胎土に砂粒、金雲母多量に含み焼成不良で明赤褐色を呈していて、 5 類 d に分類される。住居跡の時期設定には出土数が少なく無理もあるが、ほぼ大木7 b ～ 8 a と見られる。

箆状石器（第29図14）が柱穴 P_2 から出土している。



第9図　2号住土器実測図・拓影図



第10図　2号住 埋設土器実測図

(2) 柱穴状ピット

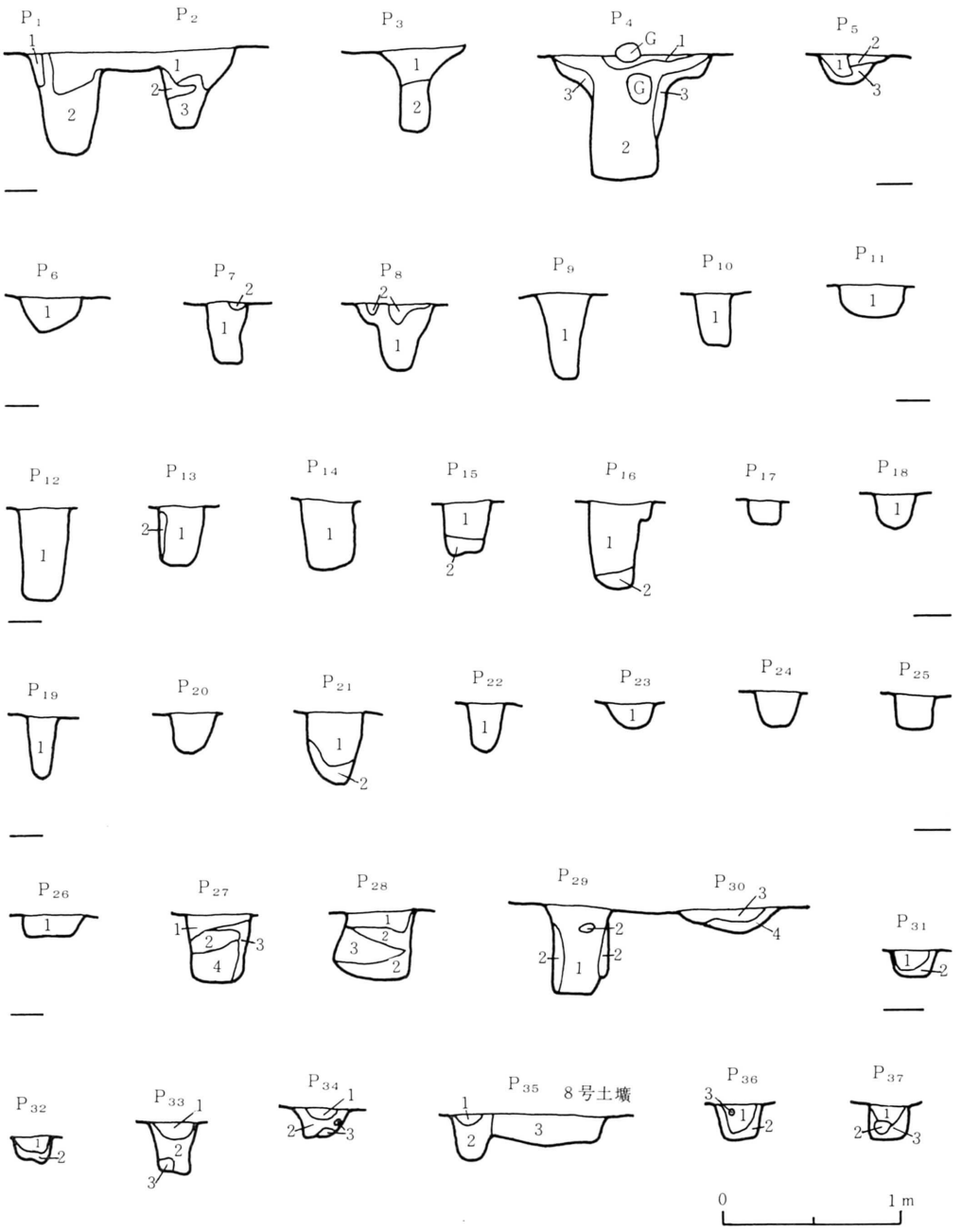
Ab10・Ab20・Ac10・Ac20区に集中して検出され、1号及び2号住居跡関連の柱穴と推察されるものを除きその数は37であり、それぞれの所在は第12図に示す如くである。

これらのピットの詳細は第1表にまとめたが、その概要は径20cmから50cm内外の円又は楕円の平面形を呈し、深さも20cmから50cm内外のものが多く、埋土中に縄文土器片を有するものを9例数えるが、第19図にみられるように4類と5類eに分類される破片が多い。

本遺構検出地区においては、縄文時代以外の遺物、遺構の検出はみられず、しかも、本調査区では最も縄文土器が集中していること、本遺構そのものが埋土中に縄文土器片を有する例からみて、これら柱穴状ピットを一応縄文時代の遺構としたが、なお積極的根拠に欠けることは否定できず、またピット群は本調査区の西側にも連続したものと推測されるが、既に土取りによって破壊されており、ピット間の相関を位置づけ得なかった。以上からみて種々検討の要を残している。

第1表 柱穴状ピット一覧表

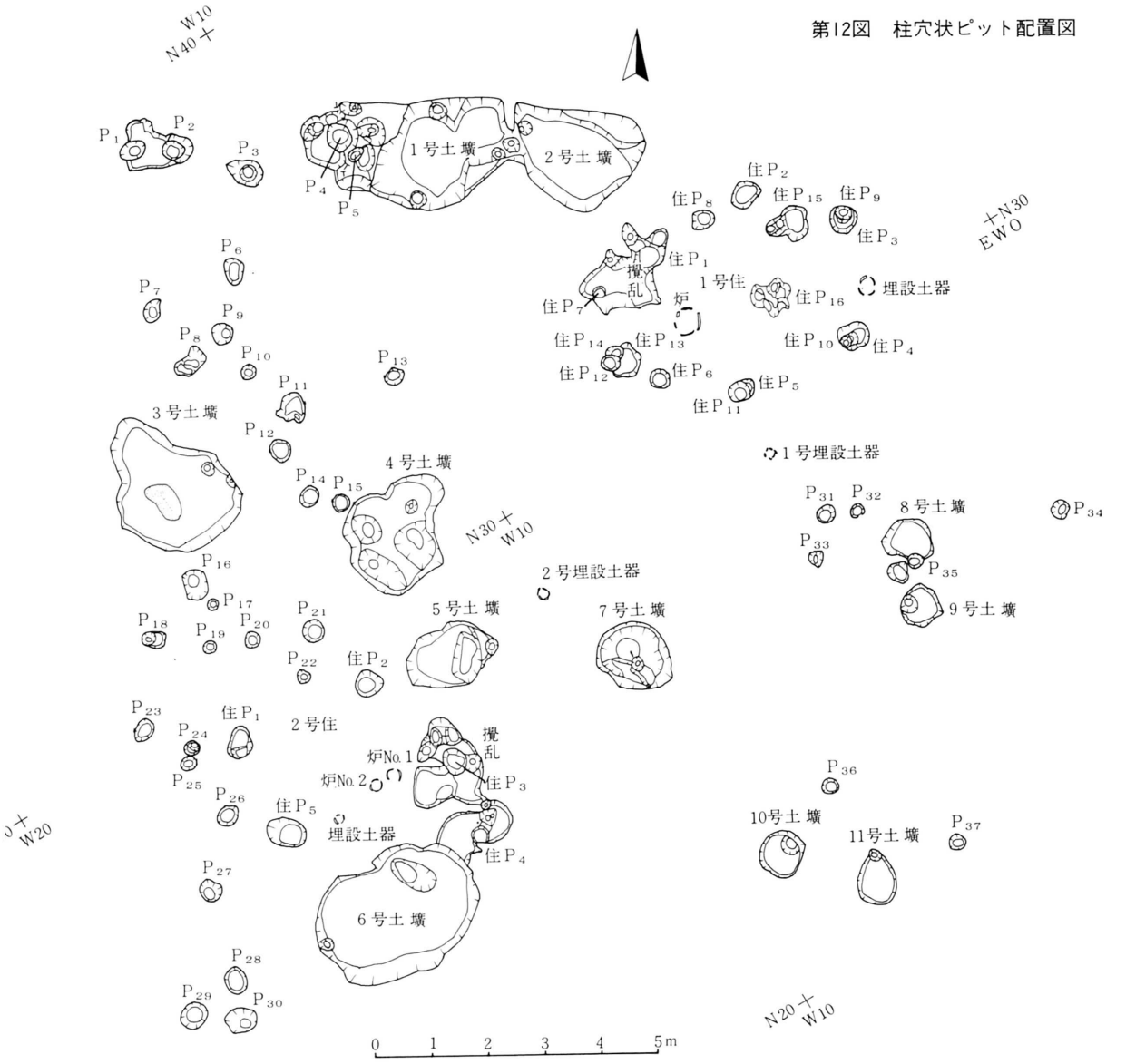
ピットNo.	規模(cm)		形状	埋土 1	埋土 2	埋土 3	埋土 4	遺物
1	45×35	56	円形	7.5YR3/2黒褐色土	7.5YR3/4褐色土	7.5YR1/7黒色土		
2	36×36	45	円形	7.5YR3/2黒褐色土	7.5YR3/4褐色土	7.5YR1/7黒色土		
3	48×56	45	楕円形	7.5YR3/2黒褐色土	7.5YR3/4褐色土			縄文片 4
4	44×54	67	円形	7.5YR3/2黒褐色土	7.5YR3/3暗褐色土	7.5YR3/6褐色土		縄文片 4
5	41×21	16	楕円形	7.5YR3/2黒褐色土	7.5YR3/3褐色土	7.5YR5/6明褐色土		
6	35×50	21	楕円形	7.5YR3/3暗褐色土				
7	30×31	35	不整円形	7.5YR3/2黒褐色土	7.5YR3/4褐色土			
8	56×29	37	不整円形	7.5YR3/4褐色土	7.5YR3/3暗褐色土			
9	35×40	48	円形	7.5YR3/3暗褐色土				石匕 1
10	26×26	28	円形	7.5YR3/3暗褐色土				
11	55×55	18	不整円形	7.5YR3/3暗褐色土				縄文片13
12	36×44	52	円形	7.5YR3/4褐色土				
13	35×31	34	円形	7.5YR3/2黒褐色土	7.5YR3/4暗褐色土			
14	39×31	38	円形	7.5YR3/2黒褐色土				縄文片17
15	30×34	28	円形	7.5YR3/2黒褐色土	7.5YR3/2黒褐色土			
16	42×53	48	不整円形	7.5YR3/3暗褐色土	7.5YR3/4暗褐色土			
17	19×21	14	円形	7.5YR3/2黒褐色土				縄文片 2
18	39×34	19	不整円形	7.5YR3/3暗褐色土				
19	23×23	34	円形	7.5YR3/3黒褐色土				
20	30×32	22	円形	7.5YR3/2黒褐色土				
21	36×42	40	円形	7.5YR3/2黒褐色土	7.5YR3/3褐色土			縄文片15
22	20×24	27	円形	7.5YR3/4暗褐色土				
23	40×35	13	円形	7.5YR3/3暗褐色土				
24	27×26	20	円形	7.5YR3/2黒褐色土				縄文片 2
25	29×24	18	円形	7.5YR3/2黒褐色土				縄文片 2
26	38×35	10	円形	7.5YR3/4暗褐色土				
27	36×43	39	円形	7.5YR3/4暗褐色土	5YRにぶい赤褐色土	7.5YR5/6明褐色土	7.5YR3/4 極暗褐色土	
28	37×46	38	円形	7.5YR3/3暗褐色土	7.5YR5/6明褐色土	7.5YR3/3暗褐色土		縄文片 1
29	52×43	50	円形	7.5YR3/4暗褐色土	7.5YR3/6褐色土	7.5YR3/3暗褐色土	7.5YR5/6明褐色土	
30	50×48	15	円形	7.5YR3/4暗褐色土	7.5YR3/6褐色土	7.5YR3/3暗褐色土	7.5YR5/6明褐色土	
31	35×29	15	円形	7.5YR3/3暗褐色土	7.5YR3/6褐色土			
32	25×23	14	円形	7.5YR3/3暗褐色土	7.5YR3/6褐色土			
33	25×32	28	不整円形	7.5YR3/2黒褐色土	7.5YR5/6明褐色土			
34	33×36	17	不整円形	7.5YR3/2黒褐色土	7.5YR3/4暗褐色土	7.5YR3/4褐色土		
35	36×40	25	不整円形	7.5YR3/4褐色土	7.5YR3/3暗褐色土	7.5YR4/3明褐色土		
36	26×28	21	円形	7.5YR3/3暗褐色土	7.5YR3/6褐色土	7.5YR5/6明褐色土		
37	29×29	19	円形	7.5YR3/3暗褐色土	7.5YR3/2黒褐色土	7.5YR5/6明褐色土		



第11図　柱穴状ピット断面図

S L=111.000m

第12図 柱穴状ピット配置図



(3) 埋設土器

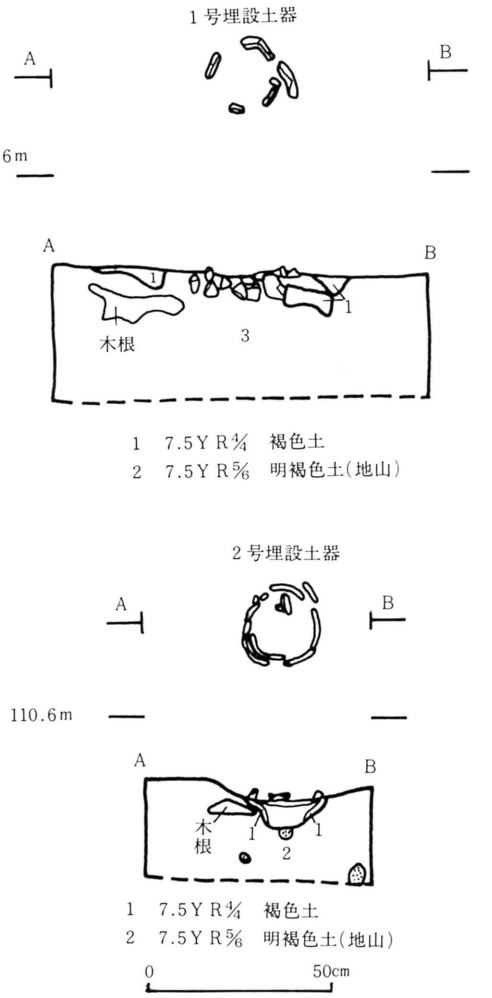
1・2号竪穴住居跡の項で述べた埋設土器以外に2基の埋設土器が検出された。

1号（Ac10）埋設土器（第13・14図　図版7）

Ac10区内北寄り中央、1号竪穴住居跡 P_{11} の約1.2m南に位置する。

明褐色の地山火山灰を掘りこんで正位に埋設したものであるが、削平によって土器上部は損失し、潰れた状況で検出された。土器内埋土は上から黒色土と火山灰土が混合した褐色土、汚れた明褐色火山灰土である。

埋設されていた土器は、深鉢の胴部を切断したもので口縁部は損失している。残存部分の器高は8.7cm、胴部径は23.6cmあり、外面はにぶい橙色を呈し地文は横方向回転のR－L単節縄文で頸部付近と推察される部位に一条の沈線が横にめぐる。内面はにぶい黄橙色で横ミガキが観察される。



第13図　1・2号埋設土器

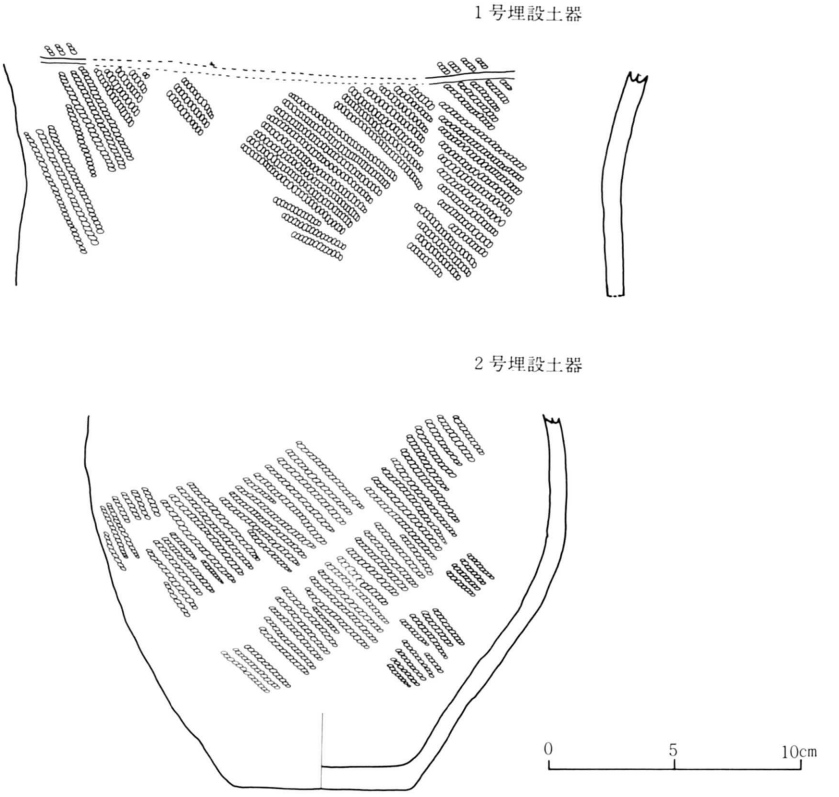
2号（Ac20）埋設土器（第13・14図　図版8）

Ac20区内北隅近くの Ac10区境界に接する位置で検出された。

明褐色の地山火山灰を掘りこんで正位に埋設されている。

土器内埋土は上から焼土と黒色土が混った褐色土、汚れた明褐色火山灰土となる。

埋設されていた土器は鉢で、削平のため口縁を損失するが底部を残す。現存する器高は14.8cm胴部最大径が19cm、底部径7.2cmあり、外面は浅黄橙色でR－L単節縄文の横方向回転の地文のみであって、上半の一部に煤が付着している。内面はにぶい黄褐色を呈し、上半では横ミガキ、下半で不定方向のミガキとなる。底部は無文でナデ調整がみられる。



第14図　1・2号埋設土器実測図

(4) **土壙と出土遺物**

縄文時代に属すると考えられる土壙は比較的 Ab10・20区と Ac10・20区に集中しており、平面円形・楕円形・不整形・方形等があり、深さは21～24号土壙を除き比較的浅く、規模も大小あって形態的に多様で幾つかに細分できるが、一括して遺構番号順にその概要を述べる。なお計測値は第2表の通りである。

1号（Ac10No11）土壙（第15図　図版2）

Ab 区で検出され2号土壙に隣接する、不整円形で中が瓢箪状にくびれていて、壁は外傾し断面は皿状を呈する。埋土1層から3層は火山灰土と黒褐色土の混合土で後の攪乱による可能性があり、4層は暗褐色土に焼土と炭化物を若干含む、5層は火山灰土に黒色土が混入し埋土の主体をなす層である。

出土遺物は埋土４・５層及び底面からのものがあり、縄文土器片73点（口縁８、胴部64、底部１）、復元可能土器１点があって５類ｅと４類ｃに分類されるものである（第19図20、第20図21～26、第24図１　図版９・10）。復元可能土器は口縁部と底部を欠くが、口縁内湾のキャリパー形中型深鉢と思われる。細い隆起線の区画文と懸垂文を施し、地文はＲ－Ｌ－Ｒの複節斜行縄文縦回転、内外面に煤の付着がある。胎土に小円礫を含み焼成普通で、にぶい橙色を呈する。５類ｅに分類され、中期大木８ａ式に比定される。

２号（Ab10No10）土壙（第15図　図版２）

１号炉土壙の東側に隣接しており、不整円形で、壁は若干外傾し皿状の断面を呈する。埋土１層は暗褐色土、２層は火山灰土を主体とするが、１号土壙１～３層と同様に後の攪乱の可能性がある。３層は火山灰土と黒色土の混土に炭化物を含み、４層は火山灰土に黒色土が混入している。

遺物は埋土各層に含まれ、縄文土器片21点（口縁３、胴部17、底部１）、復元可能土器１点と石匙（第28図４　図版11）１点がある。土器は５類ｅと６類に分類されるもので（第20図27～30第20図２　図版10）であり、復元可能土器は口径13.6cm、胴部最大径16.2cm、口縁やや外反し胴部に張りをもつ小型の深鉢である。口縁文様帯は３本の平行隆起線、胴部に波状の懸垂文を施し、地文は単節Ｌ－Ｒ縦回転で胴部に煤が付着する。胎土に砂粒を含み焼成やや不良でにぶい橙色を呈する。６類に分類され大木8a式に比定される。

３号（Ab20No９）土壙（第15図　図版２）

Ab20区の中央付近にあり不整円形、壁は外傾し皿状の断面を呈する。埋土１層は黒色土と火山灰土の混土に焼土と炭化物が少量入る。２層は火山灰土を主体とし黒色土が混入し極少の焼土を含む、底面に36cm×77cmの長楕円状の範囲に薄い焼土の広がりをみるが現地性のものか否か不明である。

遺物は埋土と底面から縄文土器片11点（口縁４、胴部５、底部２）の出土で、器形や文様の判明するものは、いずれも５類ｅでキャリパー形の大型深鉢の口縁部片で隆起線や隆帯文をめぐらし、橋状把手もみられる（第21図31・32　図版10）。大木8a式に比定されるものである。

４号（Ab20No１）土壙（第16図）

Ab20区南東隅にあり、不整形で壁は外傾し皿状の断面形を呈する。底面に３ヶ所の落ちこみをみるが、木根等による後の攪乱による可能性もある。埋土１層は黒色土に火山灰土を若干含み後の攪乱とみられ、２層の暗褐色土は木根による攪乱、３層は火山灰土に黒色土の混入、４層には火山灰土と黒色土の混土に極少の炭化物を含み、５層に汚れた火山灰土をもつ。

遺物は埋土と底面から縄文土器片27点（口縁６、胴部20、底部１）、復元可能土器２点と石斧（第29図18　図版11）１点がある。土器は５類ｅを主体に７類、８類、９類のものを含む（第

21図33～37　第24図３～５　図版８・９・10)、復元可能土器（第24図３　図版８）は口径17.8cmの中型深鉢で、口縁にすぼまり胴部が大きく張り出す末広がりの壺形に近い器形と思われる。全面無文で太い隆帯が頸部に巾広い沈線帯及び橋状把手をなしてめぐる。把手は４個である。特異な器形から８類に分類した。いま一つの復元可能土器（第24図４　図版８）は、口径10.4cmの平縁小型深鉢で単節斜縄文Ｒ－Ｌのみの施文である。いずれもほぼ大木8a式に比定されるものと考えられる。

５号（Ac20No10）土壙（第16図　図版２）

４号土壙の南東約２ｍで Ac20区の南東隅近くにある。不整楕円形で壁は外傾し逆台形に近い断面を呈する。底面東半で５cmほどの落ちこみをみる。埋土は１層のみで、若干の火山灰土と少量の炭化物を含む黒褐色土である。

埋土及び底面からの出土遺物は、縄文土器片20点（口縁３、胴部16、底部１）であり、分類できたものは５類ｄであって（第21図38･39　図版９）、38は隆沈線の区画文をもつキャリパー型鉢の口縁部で、大木7b～8b式に比定できる。

６号（Ac20No12）土壙（第16図　図版３）

Ac20区のほぼ中央にあって、楕円形で壁は北側で直に近い立ちあがりをするが、全般に大きく外傾し皿状の断面を呈する。底面は平坦であるが北側にゆるく下がる。北端にある落ち込みは埋土の状況から後の攪乱による可能性もある。なお、２号住居跡と重複し、より新しいものと推察される。埋土１層は黒褐色土に火山灰土が若干混り、２層も黒色土で極少の焼土を含む、１・２層は後の攪乱ともみられる。３・４層は火山灰土が主体で黒色土を混入するが、３層がより多い。

遺物は埋土全般と底面から、縄文土器片217点(口縁28、胴部174、底部15)、復元可能土器１点と石斧基部片１点（第29図19　図版11)、円盤状石器１点（第29図20　図版11）を出土した。土器は５類ｄ、５類ｅを主体に１類、６類も若干含む（第22図40～61　第24図６　図版８・９・10)。復元可能土器（第24図６　図版８）は、口径14.2cm、底径6.2cm、器高18.6cmの中型深鉢である。口縁がやや外反し、ゆるやかな大波状口縁をなす。口縁文様帯には３本の平行隆起線がめぐる。地文は複節斜行縄文Ｒ－Ｌ－Ｒで縦及び斜め回転、胴部に少量の煤が付着する。胎土は砂粒を含み焼成不良で明褐色を呈し、６類に分類される。第18図でみられるように分類できる量は比較的多く大木7b式から大木8a式の新しい部分まで含まれ幅をもつ。

７号（Ac10No18）土壙（第16図）

Ac10区北半で Ac20区との境界に接する位置にあり、円形に近く壁は外に大きく開き浅皿状の断面を呈する。底面南半の凹凸は後の攪乱の可能性もある。埋土は２層からなり、１層は火山灰土と黒色土の混土に極少の炭化物と焼土を含み、２層の汚れた火山灰土の層となる。遺物

は出土しない。

8号（Ac10No10）土壙（第16図）

Ac10区のほぼ中央にあり、不整円形で壁はやや外傾し皿状の断面を呈する。南縁を P_{35} に切られている。埋土は1層のみで、腐植土に極少の火山灰土が混り、径1㎝～2㎝の小円礫を全般に含んでいる。埋土中から箆状石器（第29図16）1点が出土した。

9号（Ac10No 9）土壙（第17図）

Ac10区のほぼ中央、8号土壙の南約50㎝に隣接する。不整円形でやや外傾し皿状の断面を呈して、西縁沿いに後の攪乱穴がある。埋土1層は黒褐色土に若干の火山灰と炭、植物根があり後の攪乱のようである。2層は暗褐色土中に極少の火山灰と炭を含み、3層は汚れた火山灰土である。出土遺物はない。

10号（Ac10No 6）土壙（第17図）

Ac10区南西隅近くで11号土壙の北西約1mにある。ほぼ円形で壁はやや外傾し皿状の断面であり北東縁に小さな落ち込みがある。埋土は黒色土と火山灰土の半々の混土で炭化物を若干含む、出土遺物はない。

11号（Ac10No 6）土壙（第17図）

Ac10区南西隅近くで10号土壙の南東約1mにある。楕円形に近く壁は外傾し皿状の断面を呈する。埋土は黒褐色土に若干の焼土と炭化物を含む1層、汚れた火山灰土の2層とからなり、出土遺物はない。

12号（Ac30No 1）土壙（第17図　図版3）

Ac30区の南東隅に13号土壙と隣接して位置する。隅丸方形に近く、底面はほぼ平坦であるが西側沿いに若干のくぼみがあり、壁は外傾し皿状の断面を呈する。埋土1層は若干の火山灰を含んだ黒褐色土に炭化物、焼土、縄文土器片が混入、2層は汚れた火山灰である。

出土遺物は埋土及び底面から縄文土器片15点（口縁7、胴部7、底部1）があり、4類a、4類c、5類d、9類に分類され（第23図62～65　図版9・10）、ほぼ大木7a～8a式に比定される。

13号（Ac30No 2）土壙（第17図　図版3）

12号土壙に隣接して位置し、ほぼ円形で壁は外傾し皿状の断面を呈する、北縁とそれに沿う底面は後の攪乱をうけている。埋土1層は黒褐色土に若干の火山灰土を混入、極少の炭化物と焼土を含む。2層は火山灰土に黒褐色土を含んだ攪乱層である。

遺物は埋土及び底面から、縄文土器片33点（口縁10、胴部21、底部2）、復元可能土器1点と石匙、箆状石器（第28図1　第29図15　図版11）各1点が出土した。土器は5類b、5類dが多く（第23図66～74　図版9）復元可能土器（第25図7　図版8）は口径21㎝、底径5.6㎝、器

高10.4cmの中型浅鉢である。口縁部は強く内湾し平縁とみられ、口縁部の隆起線は長楕円形の区画文で境目は渦巻状に突起をなす。長楕円区画内には櫛歯状の沈線列をもち、胴部上半は隆起線の曲線文、渦巻文、波状懸垂文を施す。地文は無節斜行縄文 l ― r 横及び斜め回転で、底部付近に煤が付着し、胎土に砂粒を含み焼成普通で橙色を呈する。7類に分類される。出土土器はほぼ大木7a～8a式に比定できる。

14号（Ad20No 1）土壙（第17図　図版 3）

Ad20区南西隅に位置し、ほぼ円形で壁はやや外傾し皿状の断面を呈する。埋土は 1 層のみで、黒褐色土に火山灰土がまだら状で全般に入り、若干の焼土と大豆大の小礫を含む。

埋土中から縄文土器片 4 点（口縁 1 、胴部 3 ）が出土、分類し得るのは 5 類 c の 1 点（第23図76　図版 9 ）のみで、大木7b式に比定される。

15号（Ba30No 1）土壙（第18図　図版 3）

Ba30区北半中の中央付近に位置する。 隅丸方形で壁は直に近く立ちビーカー状の断面を呈し、底面ほぼ中央に円形の小穴をもち、径17cm×23cm、深さ34cmを測る。

埋土は土性と推察される埋没過程から 4 大別できる。黒褐色土に極少の炭化物と焼土を含む 1 ・ 2 層、黒・黒褐色土に米粒大の火山灰土を全般に混在し炭化物と焼土を含む 3 ・ 5 層、火山灰土、黒色土混りの暗褐色土に少量の炭化物を含む 6 層、汚れた火山灰土の 7・8 層となり、自然堆積と推察される。出土遺物は全くない。

16号（Ba30No 2）土壙（第18図　図版 3）

15号土壙の約 4 m東に位置し、平安時代に属する 6 号竪穴住居跡と重複するが、本土壙がより古い。隅丸長方形で壁は直に立ちビーカー状の断面を呈し、底面ほぼ中央に円形の小穴をもち、径34cm×34cm、深さ47cmを測る。

埋土は 4 大別で、黒色土に火山灰土が散在し、焼土と炭を少量含む 1 層、黒褐色土に少量の炭と焼土、 1 cmほどの小礫を含む 2 ・ 3 層、黒色土に火山灰土が混り、焼土と炭を少量含むやわらかな 4 層、明褐色火山灰土を主体とする 5 ・ 6 ・ 7 層となり、自然堆積と推察される。出土遺物は全くない。

17号（Bb60No 5）土壙（第18図　図版 4）

Bb60区の北西隅近くに位置する。平面形は上端でほぼ円形に近いが、下端では隅丸方形の様相を呈してくる。壁は直に近くビーカー状の断面で、底面中心のやや外に径24cm×36cm、深さ55cmの小穴をもつ。

埋土は 5 層からなり、黒褐色土に大豆大の礫が混入し、極小の火山灰土を含む 1 層、黒褐色土と若干の火山灰土、炭化物を極少含む 2 層、崩落土ともみられる褐色土の 3 層、極少の火山灰土を含む黒褐色土の 4 層、火山灰土を主体に小礫を含んだ褐色土の 5 層となるが、 2 ・ 4 層

はやわらかく土性的に類似点がある。自然堆積の埋土と推察される。出土遺物はない。

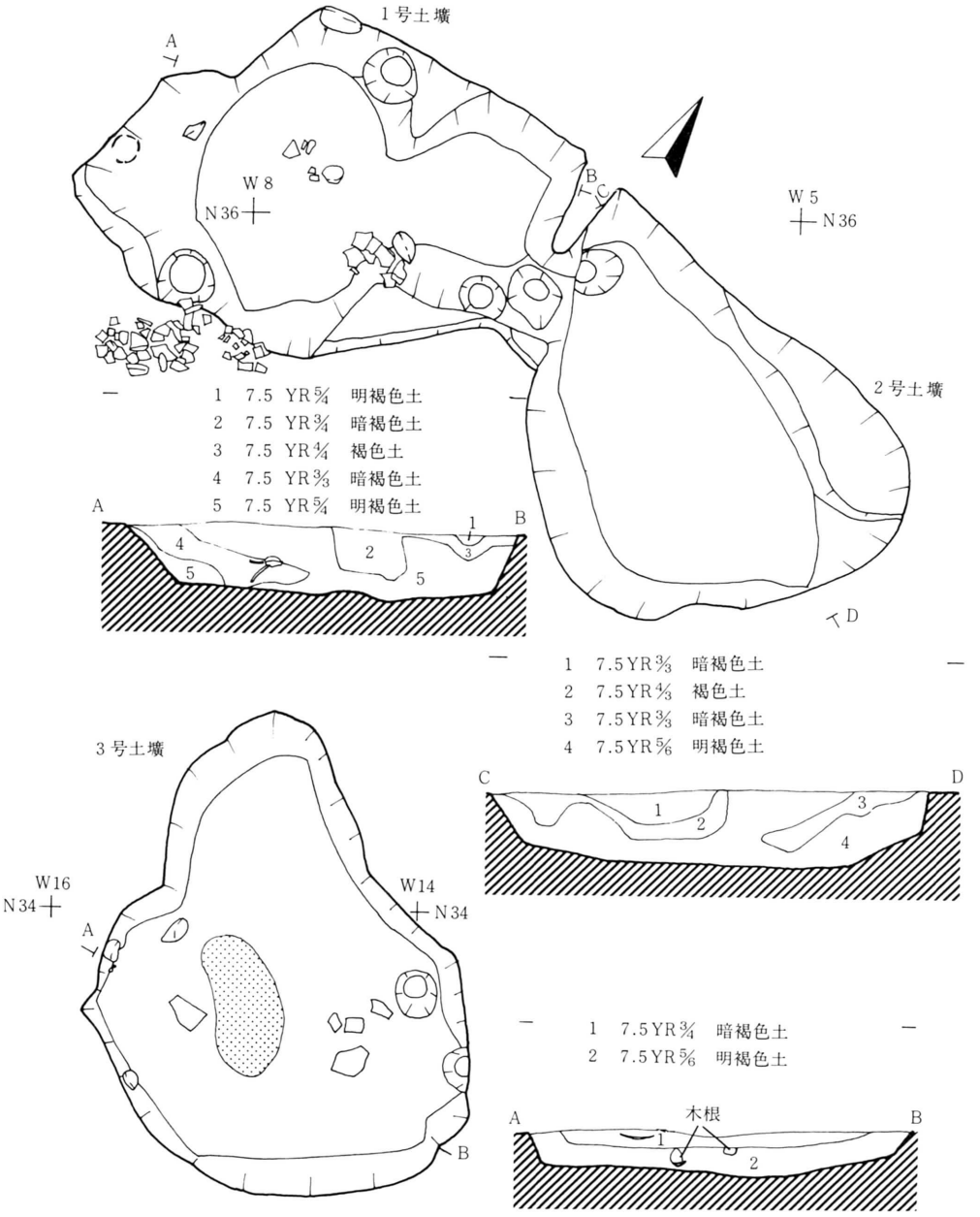
18号（Bc70No 7）土壙（第18図　図版 4）

Bc70区の北西隅近くに位置し、平安時代に属する 9 号竪穴住居跡西壁側と本土壙の東壁側と重複するが、本土壙がより古い。隅丸方形で壁の立ち上がりは、北壁を除きやや外傾する。北壁は上半で大きく外傾し、下半は奥へ抉りこまれた様相を呈するが、本来的には内傾する壁であったものが上半の崩落によって現状になった可能性もあり、とすれば崩落土は土性からみて10層中と推察される。したがって、南北断面はゆがんだ長方形、東西ではビーカー状に近くなる。底面ほぼ中央に小穴があり、径22cm×26cm、深さ44cmを測る。

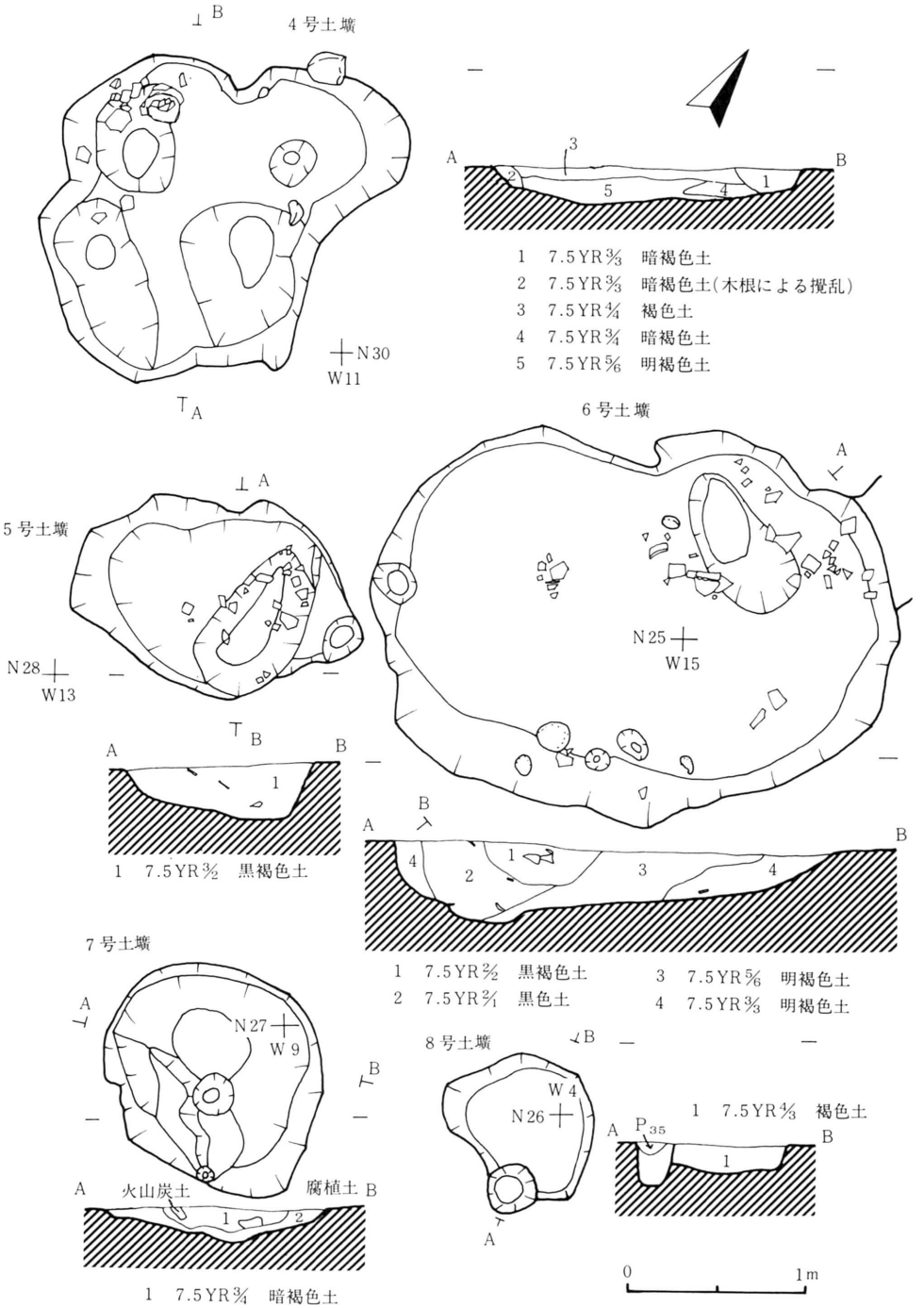
埋土は 4 大別ほどに考えられ、黒色土の 1 層、暗褐色土及び黒色土で若干の火山灰を含む 2・3 層、黒褐色土及び黒色土で小豆大の礫を含み、やわらかい 4 ・ 5 層、火山灰土に黒色土が混入した褐色土の 6 層となり、自然堆積と推察する。出土遺物はない。

第 2 表　土壙一覧表

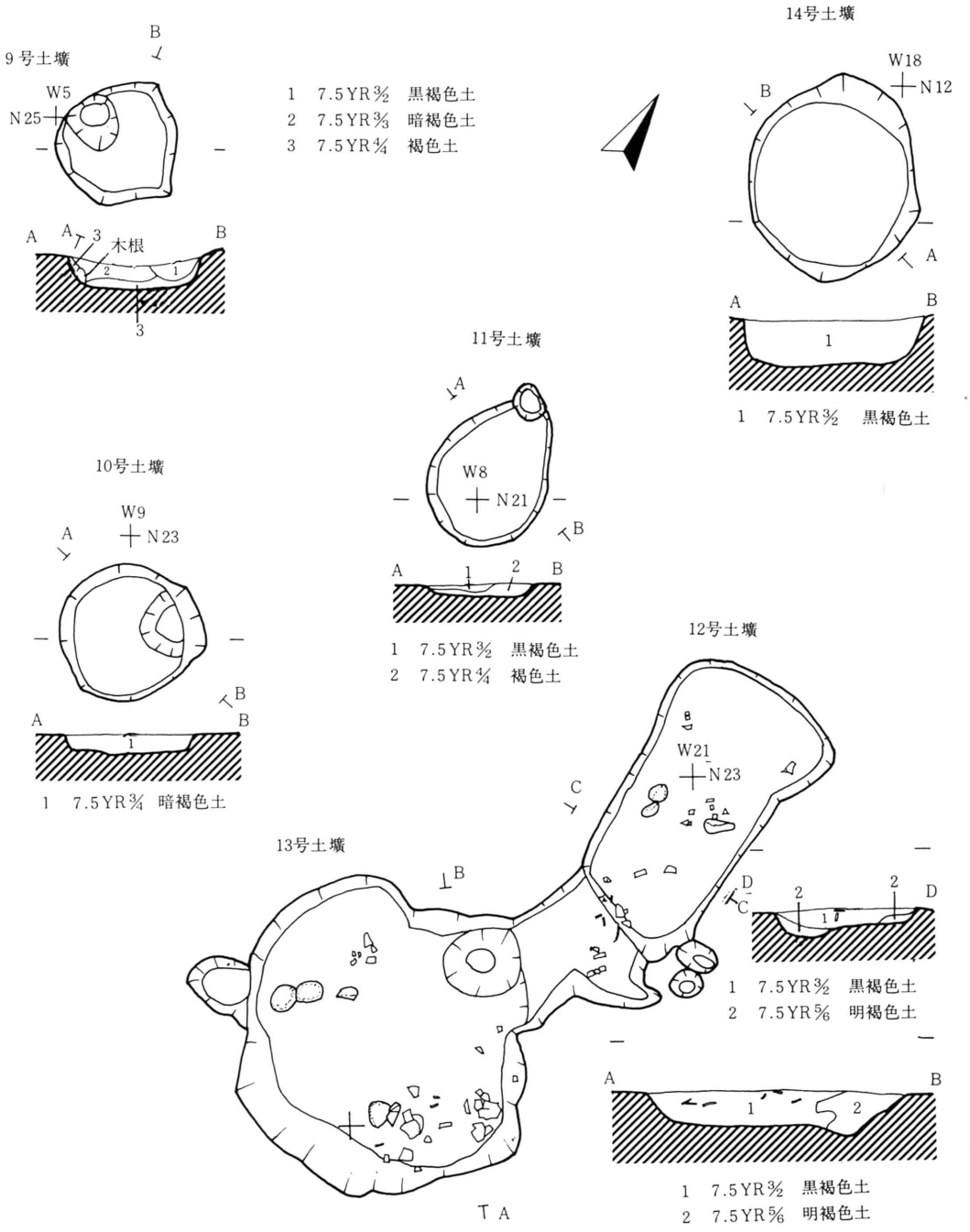
土壙名	開壙部	壙底部	深さ	形態		土壙分類	遺物			重複	図・図版
				平面	断面		点数	土器分類			
1号（Ab10No11）	275×189	192×129	37	不整円形	皿状	A	復元可 1 土器片73	5類e 4類c	大木8a		15・ 2
2号（Ab10No10）	206×226	118×168	43	不整円形	皿状	A	復元可 1 土器 片21石匕 1	6類 5類e	大木8a		15・ 2
3号（Ab20No 9）	210×263	189×218	23	不整円形	皿状	A	土器片11	5類e	大木 8a		15・ 2
4号（Ab20No 1）	194×181	150×167	21	不整形	皿状	A	復元可1 土器 片27石斧1	7・8・9類 5類e主体	大木8a		16・
5号（Ac20No10）	158×104	130× 99	31	不整円形	逆台形	A	土器片20	5類d	大木7b ～8a		16・ 2
6号（Ac20No12）	292×208	265×178	45	楕円形	皿状	A	復元可1 土器 片217石斧1 円盤状石器1	1・6類 5類e主体	大木7b ～8a		16・ 3
7号（Ac10No18）	122×126	106×116	19	ほぼ円形	浅皿状	B					16・
8号（Ac10No10）	85× 89	66× 70	25	不整円形	皿状	B	篦状石器1			柱穴状 P35より古	16・
9号（Ac10No 9）	70× 70	60× 57	14	不整円形	皿状	B					17・
10号（Ac10No 5）	85× 80	63× 69	11	ほぼ円形	皿状	B					17・
11号（Ac10No 6）	70× 90	60× 70	8	ほぼ楕円形	皿状	B					17・
12号（Ac30No 1）	83×165	73×157	10	隅丸方形	皿状	A	土器片15	4類c 5類d 9類	大木7b ～8a		17・ 3
13号（Ac30No 2）	163×182	156×156	20	円形	皿状	A	復元可1 土器 片33石匕1.篦 状石器1	7類 5類b 5類d	大木7b ～8a		17・ 3
14号（Ad20No 1）	95×111	88× 93	24	ほぼ円形	皿状	B	土器片4	5類c	大木7b		17・ 3
15号（Ba30No 1）	110×110	69× 74	90	隅丸方形	ビーカー状 小穴深さ34cm	C					18・ 3
16号（Ba30No 2）	94×128	77× 92	79	隅丸長方形	ビーカー状 小穴深さ47cm	C				6号住 （平安） より古	18・ 3
17号（Bb60No 5）	100×105	85× 79	81	上端で円形 下端で隅方形	ビーカー状 小穴深さ55cm	C					18・ 4
18号（Bc70No 7）	95× 89	77× 65	71	隅丸方形	南北平行四辺形 東西ビーカー状	C				9号住 （平安） より古	18・ 4


1号土壙
A
B
C
W 8
N 36
W 5
N 36
2号土壙
D
1 7.5 YR 5/4 明褐色土
2 7.5 YR 3/4 暗褐色土
3 7.5 YR 4/4 褐色土
4 7.5 YR 3/3 暗褐色土
5 7.5 YR 5/4 明褐色土
1 7.5YR 3/3 暗褐色土
2 7.5YR 4/3 褐色土
3 7.5YR 3/3 暗褐色土
4 7.5YR 5/6 明褐色土
3号土壙
W16
N 34
W14
N 34
1 7.5YR 3/4 暗褐色土
2 7.5YR 5/6 明褐色土
木根
0
1m

第15図 土壙実測図

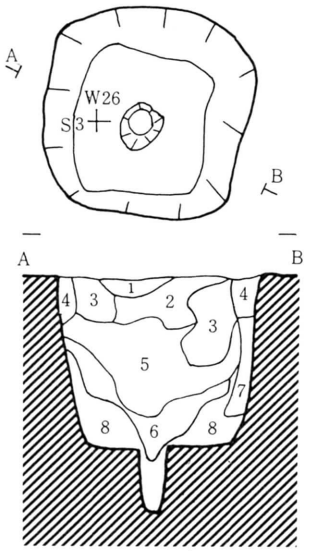

4 号土壙
N 30
W11
1 7.5YR 3/3 暗褐色土
2 7.5YR 3/3 暗褐色土(木根による攪乱)
3 7.5YR 4/4 褐色土
4 7.5YR 3/4 暗褐色土
5 7.5YR 5/6 明褐色土
5 号土壙
N 28
W13
1 7.5YR 3/2 黒褐色土
6 号土壙
N 25
W15
1 7.5YR 2/2 黒褐色土
2 7.5YR 2/1 黒色土
3 7.5YR 5/6 明褐色土
4 7.5YR 3/3 明褐色土
7 号土壙
N 27
W 9
火山炭土
腐植土
1 7.5YR 3/4 暗褐色土
2 7.5YR 5/6 明褐色土
8 号土壙
W 4
N 26
P 35
1 7.5YR 3/3 褐色土
0
1m

第16図 土壙実測図


9号土壙
W5
N25
木根
1 7.5YR3/2 黒褐色土
2 7.5YR3/3 暗褐色土
3 7.5YR4/4 褐色土
14号土壙
W18
N12
1 7.5YR3/2 黒褐色土
11号土壙
W8
N21
1 7.5YR3/2 黒褐色土
2 7.5YR4/4 褐色土
10号土壙
W9
N23
1 7.5YR3/4 暗褐色土
12号土壙
W21
N23
1 7.5YR3/2 黒褐色土
2 7.5YR5/6 明褐色土
13号土壙
1 7.5YR3/2 黒褐色土
2 7.5YR5/6 明褐色土
0
1m

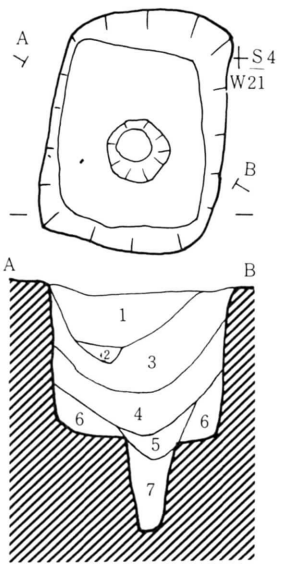
第17図 土壙実測図

15号土壙



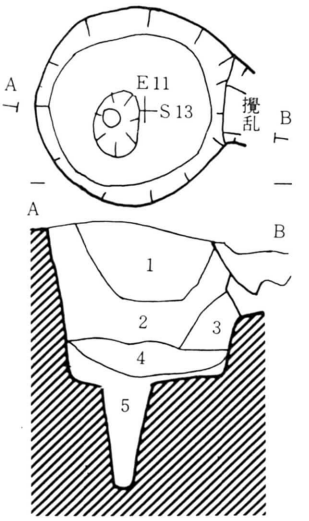
1 7.5YR 2/1 黒色土
2 7.5YR 3/1 黒褐色土
3 7.5YR 3/2 黒褐色土
4 10YR 3/3 暗褐色土
5 7.5YR 2/1 黒色土
6 10YR 3/4 暗褐色土
7 7.5YR 5/8 明褐色土
8 7.5YR 5/6 明褐色土

16号土壙



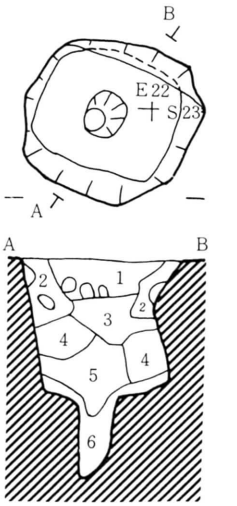
1 10YR 2/2 黒色土
2 7.5YR 3/3 暗褐色土
3 7.5YR 3/2 黒褐色土
4 10YR 5/1 黒色土
5 7.5YR 5/6 明褐色土
6 7.5YR 3/4 暗褐色土
7 7.5YR 5/6 明褐色土
6層とほぼ同じであるが粘性に乏しい

17号土壙



1 7.5YR 2/2 黒褐色土
2 7.5YR 3/2 黒褐色土
3 7.5YR 4/3 褐色土
4 7.5YR 2/2 黒褐色土
5 7.5YR 3/4 褐色土

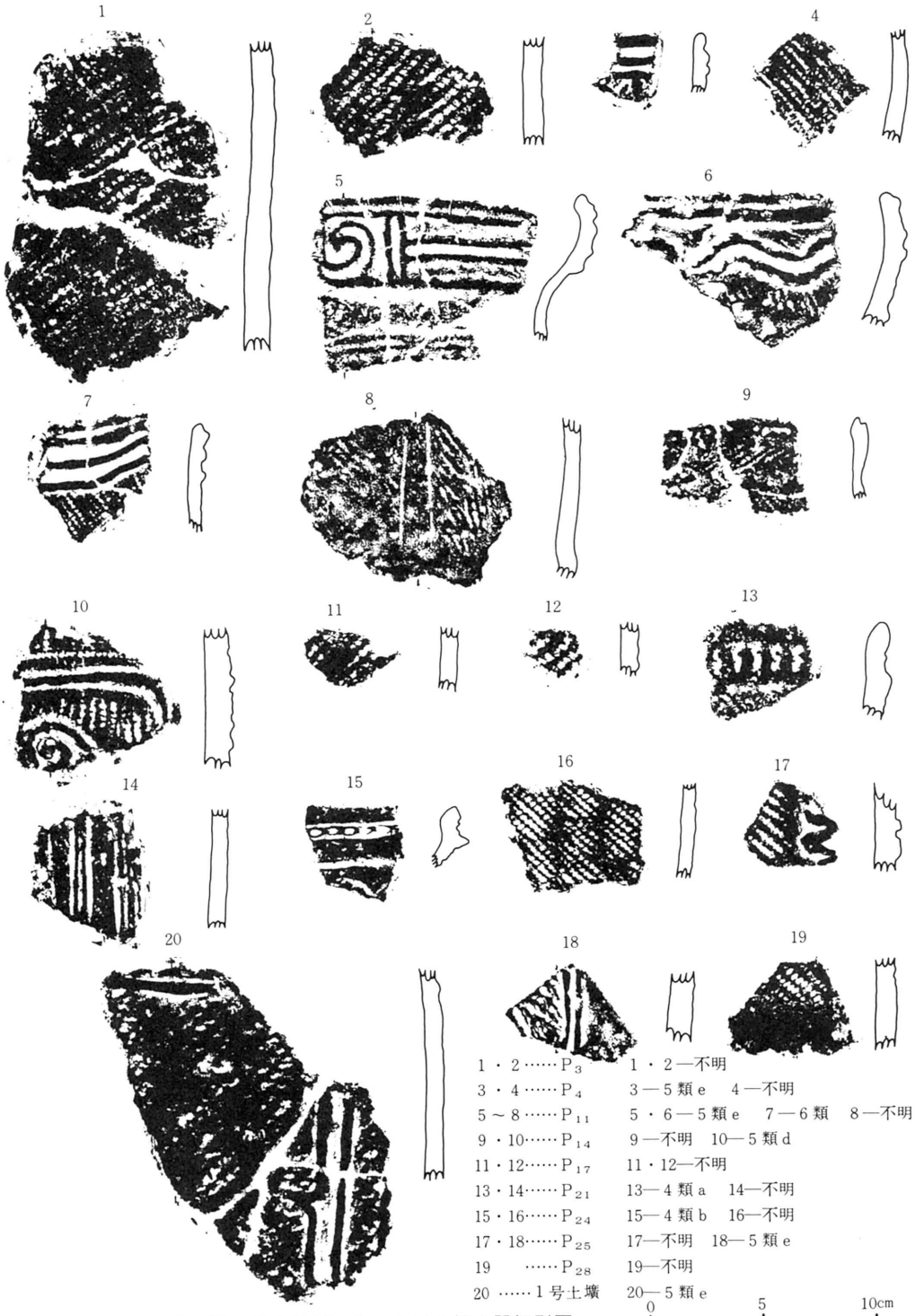
18号土壙



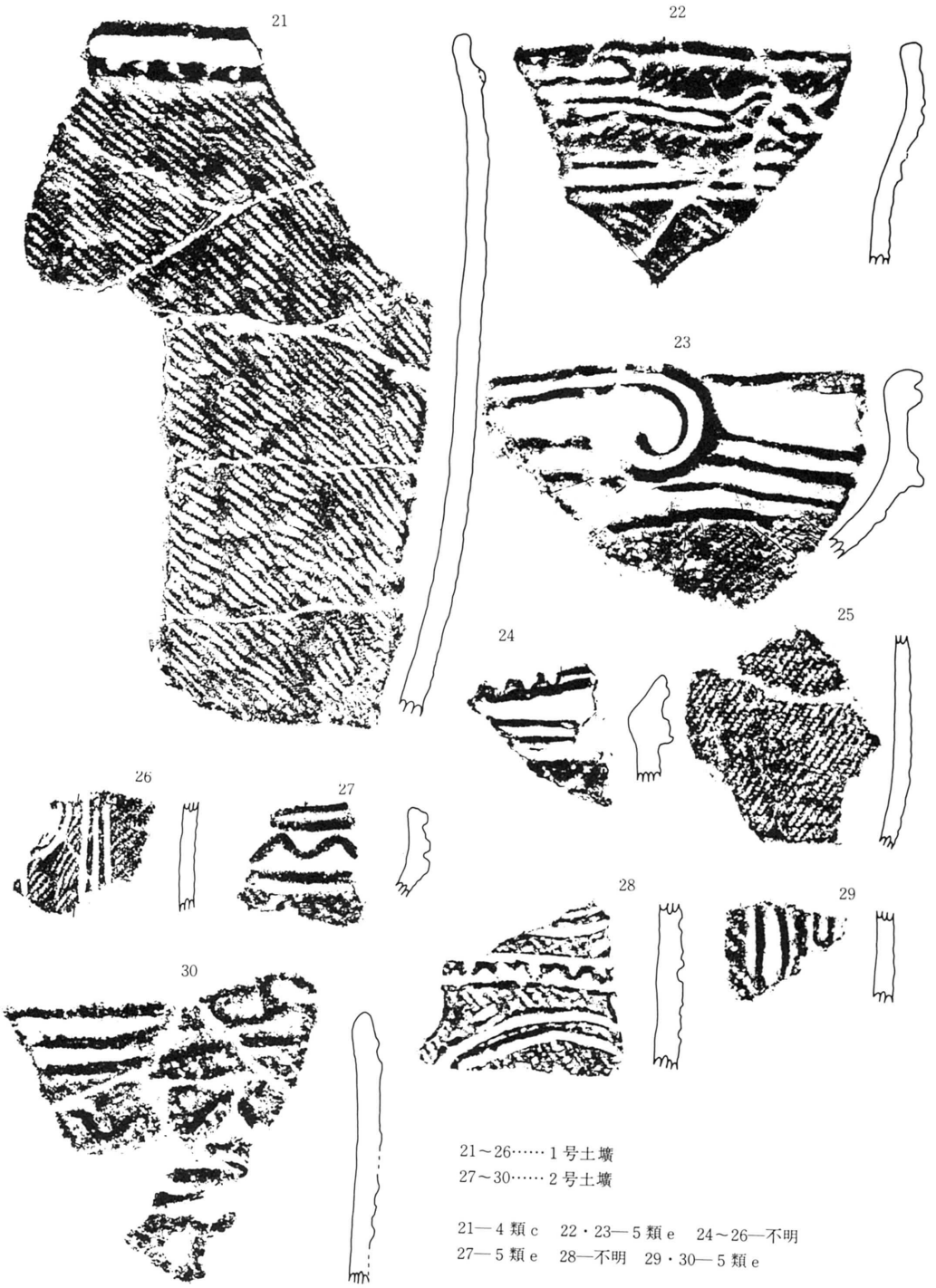
1 7.5YR 2/1 黒色土
2 7.5YR 3/3 暗褐色土
3 7.5YR 5/1 黒色土
4 7.5YR 2/2 黒褐色土
5 7.5YR 2/1 黒色土
6 7.5YR 4/3 褐色土

第18図 土壙実測図

0 1m



第19図　柱穴状ピット・1号土壙土器拓影図



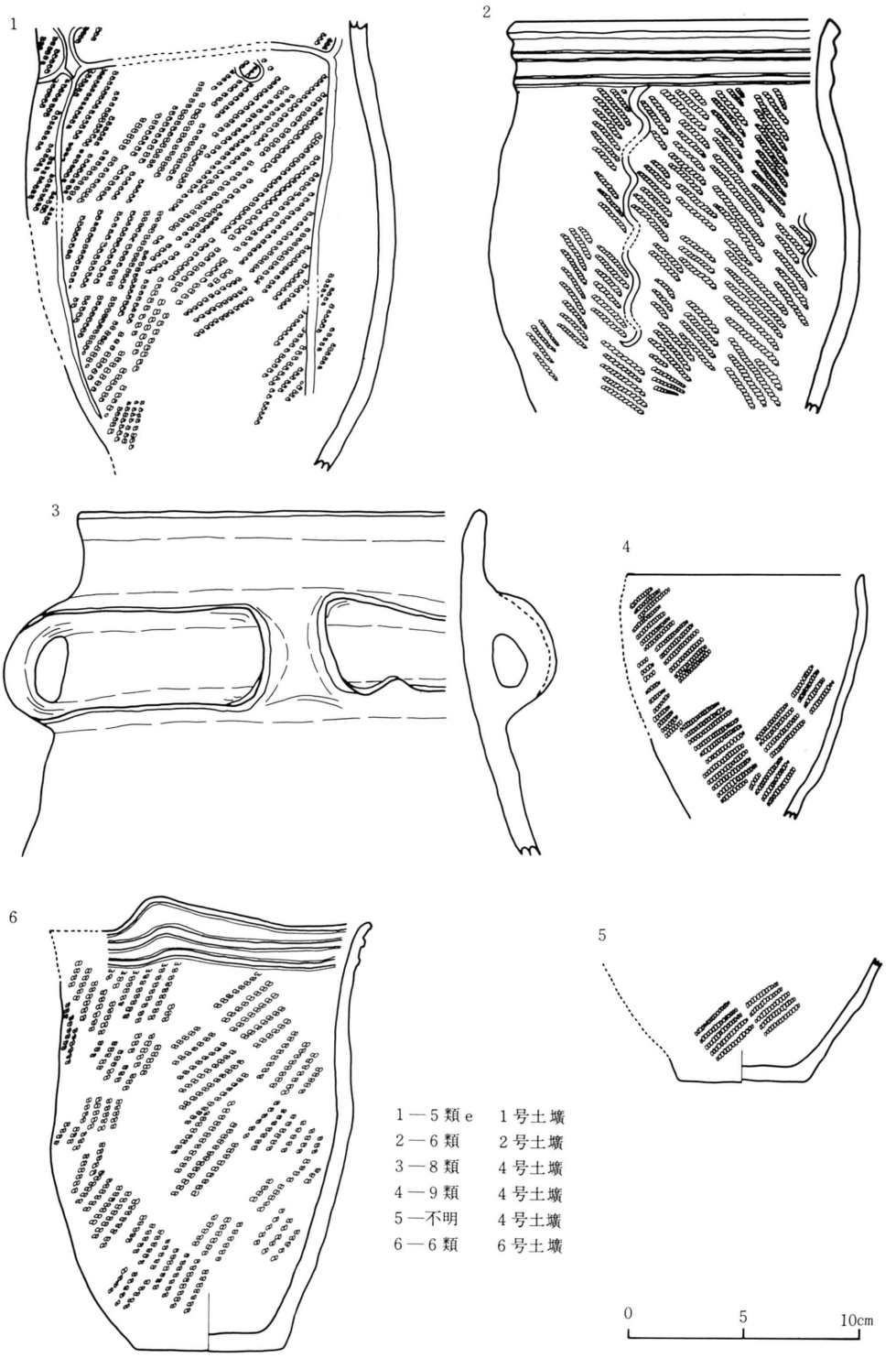
第20図　1・2号土壙土器拓影図

0　5　10cm

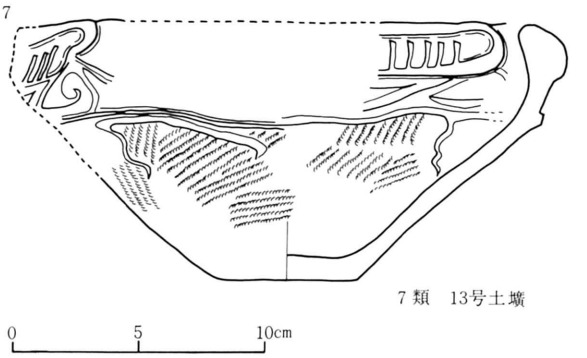
第21図　3～5号土壙土器拓影図

第22図　6号土壙 土器拓影図

第23図 12～14号土壙土器拓影図



第24図　土壙出土土器実測図



第25図 土壙出土土器実測図

2 縄文時代のまとめ

(1) 遺物について

土器について

遺構出土土器については各項でも記述して来たが、ここでは遺構外出土土器(第26・27図 図版9・10) も含めながら、本調査区出土の縄文土器について概括する。総出土点数は約5000点、復元可能土器は7点である。すべて縄文時代中期大木7b～大木8a に比定されるものであり、第Ⅶ地区の遺物包含層出土の第Ⅱ群土器と類似する。分類にあたっては第Ⅶ地区の土器分類に準じて行なった。各土器群の諸特徴については第Ⅶ地区の分類記述と照合すればより明確になるはずである。以下本調査区出土土器の分類について述べる。

1類土器 (第22図45 第26図1・2 図版9)

口縁部に撚糸圧痕文の直線文を施しているものである。口縁やや内湾するもの3点だけの出土で器形は不明である。焼成は良好で胎土に細砂含む。大木7b式に比定される。

2類土器 (第26図3～8 図版9)

口縁部に沈線の直線文や連弧文、刺突文などを施しているものである。口縁直上形の深鉢や内湾する浅鉢形である。第26図6は上下交互刺突を施して五領ヶ台式に類似した破片である。焼成は良好で胎土に細砂含み、色調はバラエティーに富む。器厚6㎜前後の小型のものばかりである。大木7b式の古い方に位置づけられる。出土数8点。

3類土器 (第26図13～15 図版9)

口縁部に一本の隆起線の貼付を施したものである。器形は口縁やや内湾ぎみにすぼまる直上形に近い深鉢である。隆起線の太さは5㎜～9㎜、直線だけでなく第26図15のように小波状をなすものも含めた。焼成やや不良で胎土に砂粒含む。器厚7㎜前後の中型のものである。大木7b～8a に比定される。出土数5点。

4類土器（第5図3　第19図13・15　第20図21　第23図63・72　第26図9～12・6～23　図版9）

口縁上端に隆起線による長楕円の細長い区画文をもつものである。隆帯をめぐらしたその間を無文にミガキ調整しているものも含めた。長楕円の区画文内に撚糸圧痕列のあるものを**4類a**、沈線や刺突列のあるもの**4類b**、無文でミガキ調整の見られるもの**4類c**と細分した。4類a・bは胎土、焼成が共通し、ともに焼成やや不良で胎土に細砂含む。細片ばかりで器形は明確でないが深鉢、浅鉢両方あるらしい。4類cは口縁の隆帯にそってミガキ調整が著しく、焼成は良好であるし、器厚8㎜～1㎝と大型の器形が主である。4類cの器形は口縁やや内湾ぎみにすぼまる直上形深鉢と思われ、3類土器と似ている。4類a・bは大木7b式に、4類cは大木7b～8aにわたると考えられる。出土数は4類a 3点、4類b 5点、4類c 11点。

5類土器（第3図　第5図4・6　第9図5　第10図　第19図3・5・6・10・18・20　第20図22・23・27・29・30　第21図31・32・33・35～38　第22図40～43・46～48・49・51・52～61　第23図62・65・68～71・73・74・76　第24図1　第26図24～38　第27図39～54　図版9・10）

広い文様帯を口縁部にもつものである。撚糸圧痕文のみのもの**5類a**、沈線文のみのもの**5類b**、隆起線と撚糸圧痕文のもの**5類c**、隆起線の区画文にそって沈線文を施すもの**5類d**、隆起線の区画文のみのもの**5類e**と細分した。

5類aは3点のみの出土である。細片で器形は不明だが、大型の山形突起部分（第26図24）や円形突起をもつもの（第26図26）がある。後者は7類土器のグループかもしれない。焼成はもろく、胎土に砂粒を含む。大木7b式に比定される。5類bは4点のみの出土である。沈線文による区画に渦巻文や連弧文などを配するモチーフで、区画の境目に突起をもつもの（第26図28）などを含む。器形は口縁内湾のキャリパー形深鉢であろう。胎土に砂粒含み焼成はやや不良であり、器厚8㎜前後の中、大型の器形を持つ。大木7b式に比定される。

5類cは3点のみの出土である。器形の判明するものは口縁直上の深鉢（第23図62）と口縁内湾する深鉢（第26図29）と2点だけである。いずれも胎土に砂粒を含み焼成不良である。第23図62・76は大木7b式に、第26図29は横S字状の突起から大木8a式にそれぞれ比定される。

5類dは27点と出土数多く、復元可能なもの2点含む。器形は口縁内湾のキャリパー形深鉢である。隆起線によって大波状若しくは山形状、楕円状に口縁部を区画し、その中心に渦巻文を配するモチーフが一般的である。口縁は平縁のものと背の低い大突起をもちあげ大波状口縁となるものがある。口縁部文様帯の上部には隆帯による細長い文様帯をもつものがあり、その多くはミガキ調整された深い沈線帯を成し、口縁4又は8箇所は隆起して渦巻状や半円形などの突起を形づくる。区画文に用いる隆起線には1本によるものと複数によるものがある。後者はより新しいものと考えられ、大木8b式に極近いものであろう。胎土は緻密なものと砂粒を多

く含むものとあるが、焼成は大旨良好で褐色が主調色である。容量は小型のものから第3図のように超大型のものまであり、5類a～cに比べ大型が多くなっている。5類dは大旨大木8a式に比定されるが、極めて大木8b式に近いと見られる破片（第26図34・37）も含んでいる。

5類eは隆起線文による区画文や曲線文を施す類で、出土数は39点ある。分類できた破片の中では最も多い。器形全体を知り得る個体はないが、口縁内湾するキャリパー形深鉢が大部分と見られ、中に直上形に近いものもある。口縁は平縁のものと渦状の突起を持つものとがある。隆起線による区画モチーフは5類dのそれと相似するものの他に、区画がくずれて渦巻文だけを横に連結したもの（第20図22・23）や平行線や波状にめぐらすだけのもの（第21図35　第19図5・6　第22図42）などが見られる。隆起線は5類dと同様に1本によるものと2本の平行線によるものとがあり、やはり後者の方がより新しいと考えられるとともに出土数も多い。5類eに特徴的な文様は、渦巻文につけられた菱形文（第22図40・57）、頸部や胴部にめぐらされる小波状隆起線（第20図27・30　第21図31　第27図52）があげられる。大きく隆起する突起には渦巻文が大部分使われ、渦巻を形づくる隆帯の中央に溝状の沈線を施したものが多い（第20図23　第22図41・50　第27図50・52）。橋状把手を持つものもある（第21図32　第27図49）。文様を表出する平行な隆起線間はミガキ調整されているものも多い。胎土に砂粒を含み焼成やや不良である。器厚6㎜～1㎝で小型から大型のものまでバラエティーに富む。5類eは大木8a式に比定されるが、平行な隆起線により文様表現されているグループはより大木8b式に近い新しいものと思われる。

6類土器（第19図7　第22図44・50　第24図2・6　第27図55～59　図版10）

口縁外反ぎみの器形のものを一括した。出土数は10点。器形は深鉢形で中型のものが大部分と見られる。施文は沈線と隆起線によってなされるが、いずれも口頸部に平行な横帯をめぐらすモチーフを持つ。中には第24図2のように胴部に波状に懸垂させているものも見られる。胎土に細砂含み焼成不良のものが多い。施文技法から5類d・eに共伴する大木8a式であろう。

7類土器（第21図34　第25図7　第27図60・61　図版10）

口縁「く」の字状に屈曲する浅鉢形のものである。4点の出土。文様帯は隆起線による長楕円形の区画文内に撚糸圧痕文や沈線列を施している。胎土に細砂含み焼成は良好である。区画モチーフや器形から大木7b式に比定される。

8類土器（第24図3　図版10）

同じ中期土器の中で他の類に含められない特異なものを8類として分離した。1点のみで太い隆帯による沈線帯、橋状把手などから、大木8a式に比定されよう。

9類土器（第5図1　第24図4　第27図62・63　図版10）

地文のみのもので他類と共伴する大木7b～8a式のものと思われる。

第26図　遺構外出土土器拓影図

第27図　遺構外出土土器拓影図

石器について

石器・石片類は約70点を得たが、このうち石器として識別し得るもの、使用の痕跡が認められるものは約30点である。調査地全体としては量的にも少なく、バラエティにも乏しい感がある。またそれらの出土状況は、土壙・柱穴等の埋土、遺構外から出土したものが多く、生活時の様相が窺える積極的状況はほとんど認められない。

以下、本遺跡の石器類について概観を記述する。なお、名称、分類基準については従来からの慣例となっている（と思われる）ものを踏襲した。

第1類　石ヒ（第28図1～5　図版11）

ツマミを有する剝掻具と思われる石器類を含めた。形態、大きさ、刃部の加工状況には差異があるが、いずれも横形（ツマミ方向に対して刃部が直交するもの）である。全体の形態からは刃部が一方に片寄るもの（1・3・4）と、左右対称形のもの（2・5）とに区分される。図1は前者に含められ、大形・肉厚の剝片素材を使用、刃部は両面から加工が及び、形状は緩い弧を成す。3は1に類似するが非常に小形のもの。鉄石英を石材としている。4は扁平な素材を使い、周縁3辺に丁寧な両面加工を施したもの。刃部は直状で、二次加工はツマミ周辺の作り出しに集中する。刃部の加工は積極的には行われず、僅かな押圧剝離と使用によると思われる小剝離が観察される。5は左右対称形の石ヒで、刃部の形状が弧を成すものである。刃部形成の加工はやや甘い。

第2類　スクレーパー（第28図6　図版11）

形状は次の3a類に似るが、意図ある剝離加工により一定の形状を得ている点で区別した。1点のみをこれにあてたが、Side Scraper としての12なども含めてよいものであろう。6は第1類に似た基部作り出しの意図が見られるが、ツマミ状には至っていない。刃部加工は片面からのみ行われ、刃部角は鋭角となっている。

第3類　Utirized frake（第28図7～13　図版11）

使用痕の見られる剝片であるが、限密には僅かな刃部加工の認められるものも含めた。剝片素材の形状を利用し、縁辺を切削・剝掻等に使用したと思われる。形態は不定であるが、素材の用い方から一応横形（3a）、縦形（3b）に区分した。前者として7・8、後者には9～13があたる。

第4類　箆状石器（第29図14～17　図版11）

石器の形態からいわゆる箆状石器と称されるもの4点を一括した。加工の状態・使用磨耗の状況はすべて異なる。14は両面を丁寧に調整剝離し、四周に二次加工を施こしたものである。両側縁には刃ツブレ状の小剝離が見られ、先端部（刃部）は磨耗が著しく稜が失われている。15は上部欠損品とも考えるが、この場合折損部付近に二次的な加工を行って再生したものであ

ろう。14同様に調整剝離・二次加工は丁寧に行われている。一方側縁は直状を呈し密な押圧剝離が観察される。一部に磨耗痕が見られた。先端部は刃部形成のための加工が消極的であるが使用痕は見られる。側縁使用が第一義的か？17は調整剝離はあまり認められず、二次加工は側縁に集中しているが、先端部に刃こぼれ状の小剝離が認められる。16は側縁、先端共に二次的な新しい剝離が観察されるが、これを使用による損耗とすれば、14・15などに比べて使用目的には力の入った作業が想定される(例えば上下運動による切断など)。前者はむしろ剝掻等に使用されたものと思われる。

第5類　磨製石斧（第29図18・19　図版11）

保存状態が極めて劣悪で、磨製の痕跡はほとんどとどめていない。凝灰岩使用のため軟質で摩滅も著しい。刃部は使用時の損耗により石斧としての形状が失われ、後二次的用途に転用されたと考えられる。一方側縁にも同様の事は窺われ、一次的な損耗のみではなく、新たな刃部形成のための剝離が行われたものと考えられる。

第6類　円盤状石器（第29図20　図版11）

名称、用途共に明らかではないが、上記の様に仮称した。材質は石英を使用。剝離によりほぼ円形の形提を作り出している。厚さ約3㎝、重量約200ｇと比較的重い。周縁の稜が刃潰れを起した部分が見られ、非実用品としての石製品と把えるよりは、道具と把える方が妥当だと考えられた。一種の敲打具であろうか？

第7類　磨石（第30図21）

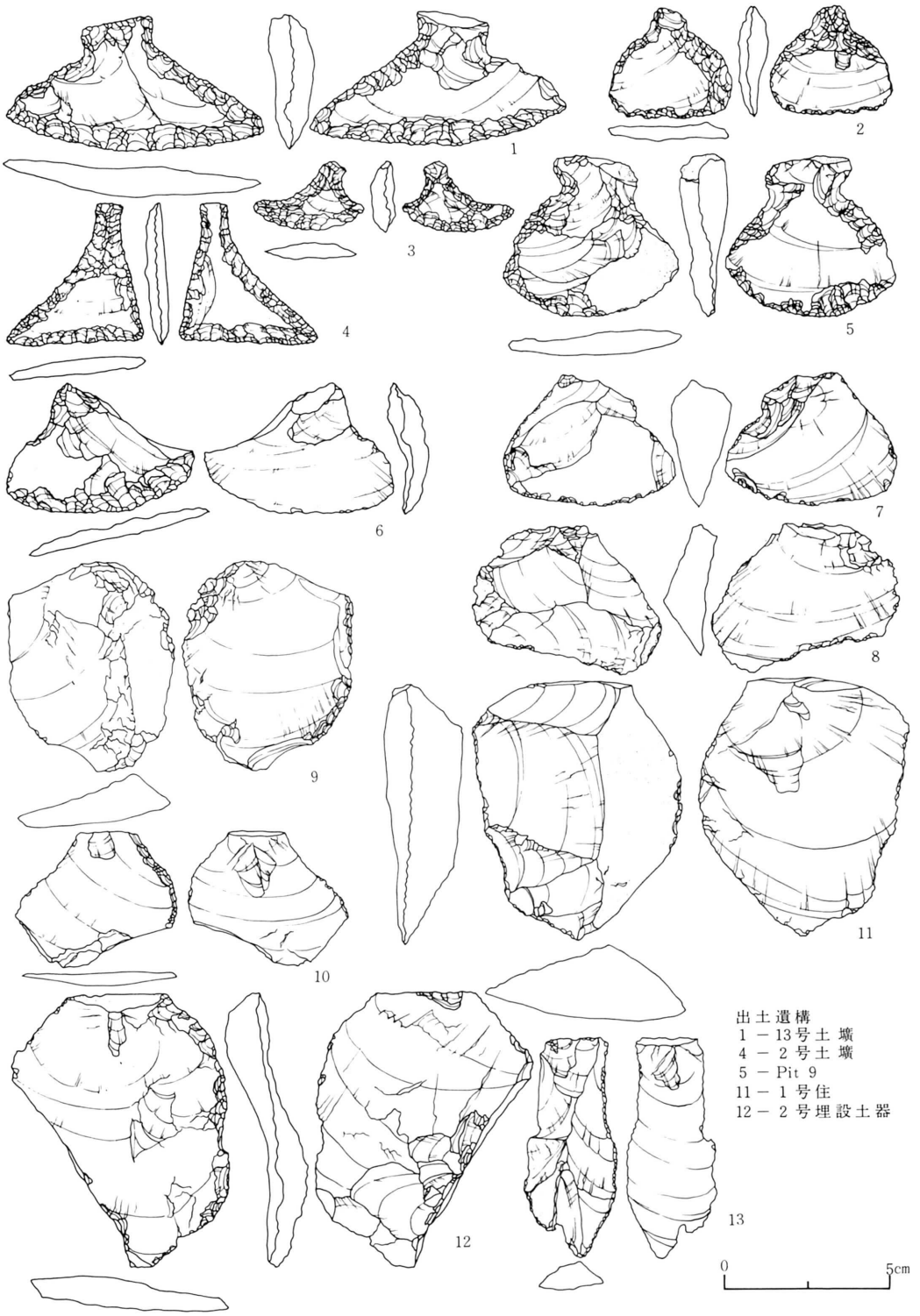
長辺の一辺を磨面として機能させたものである。また短辺の一端に上下運動によると思われる破損の痕が残ることから、敲打具としても使用されたものであろう。

第8類　石皿（第30図22）

明瞭ではないが周囲に調整擦痕が見られることから、整形は研磨によったものと思われる。約¼の残存であるため石皿としては不明確であるが、上下面ともに数本の溝が走り、砥石としての利用は明確である。上面の溝は太く浅い。

石製品（第30図23）

表土中から一点の石製品が出土した。下半部を欠失しているため全形は不明だが、おそらく三角形状を呈すと思われる。流紋岩質凝灰岩を使用、軟質で摩滅が著しい。全面に顕著な調整擦痕が見られる。三角形の両端部には貫通孔が穿たれているが、穿孔は両面から行われたものである。穿孔痕は鈍い円錐形を成している。

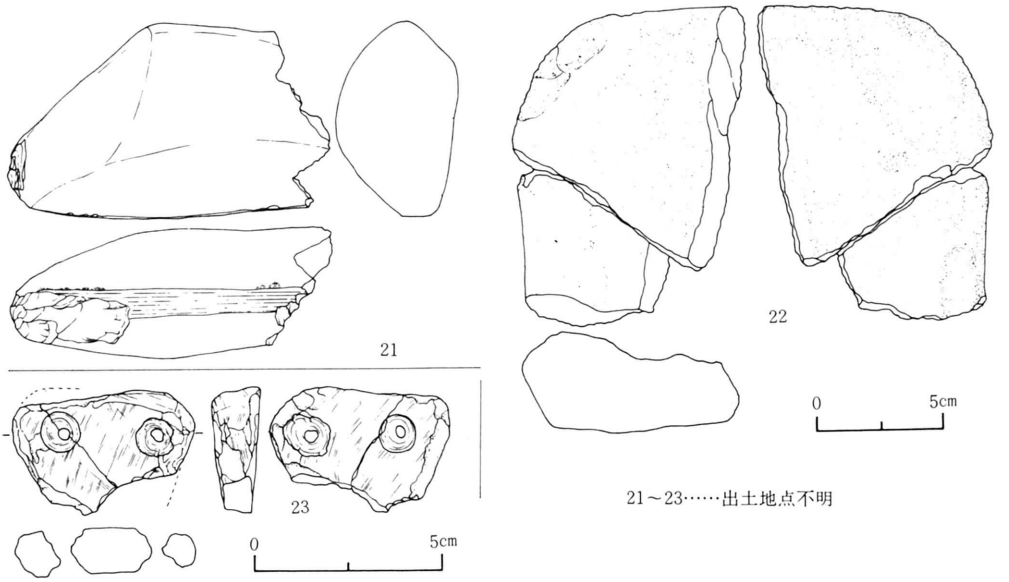


第28図　石器実測図（1～3類）

出土遺構　14…2号住P_2　15…13号土壙　16…8号土壙
18…4号土壙　19・20…6号土壙

第29図　石器実測図（4～6類）

0　5cm



第30図　石器(7・8類)・石製品実測図

第3表　石 器 観 察

図・図版	No.	分類	出土遺構(地点)	計測値 最大長cm	最大幅cm	最大厚cm	重量g	石材	産地	備考
28　11	1	1類	15号壙	4.0	7.7	1.3)	24.3	泥質細粒凝灰岩		
〃　〃	2	〃	Ab10グリット	3.3	3.7	0.8	7.2	黄褐色極細粒珪質凝灰岩	奥羽山地　中新統上部	
〃　〃	3	〃	5号住 No 9 pit	2.2	3.3	0.7	3.2	鉄質石英		
〃　〃	4	〃	2号土壙	4.2	4.1	0.6	7.1	珪質泥岩		
〃　〃	5	〃	pit 9	4.7	5.1	1.2	21.5	〃		
28　11	6	2類	Ae20グリット	3.9	5.8	0.9	12.3	凝灰質硬質泥岩		
28　11	7	3a類	Ac20　〃	3.8	5.0	1.8	23.6	硬質泥岩	奥羽山地　中統統上部	
〃　〃	8	〃	Acブロック	4.5	4.9	1.3	25.4	凝灰質硬質泥岩		
〃　〃	9	b	Ad30グリッド	6.2	6.2	1.9	49.1	〃	新	
〃　〃	10	〃	Ab10　〃	4.0	7.1	0.7	10.2	泥質細粒凝灰岩		
〃　〃	11	〃	1号住	7.7	2.8	2.4	108.0	珪質泥岩		
〃　〃	12	〃	2号埋設土器	8.3	2.8	1.4	61.5	硬質泥岩	奥羽山地　中新統上部	
〃　〃	13	〃	Ab10グリッド	6.6	3.3	1.0	15.3	珪質泥岩		
29　11	14	4類	2号住　P2	7.1	4.5	1.6	34.5	硬質泥岩	奥羽山地　中新統	
〃　〃	15	〃	15号土壙	5.5	4.4	1.9	35.4	珪質泥岩		
〃　〃	16	〃	8号土壙	8.4	5.4	1.8	69.8	硬質泥岩	奥羽山地　中新統	
〃　〃	17	〃	Acブロック	9.9	4.4	1.7	64.5	凝灰質硬質泥岩		
29　11	18	5類	4号土壙	14.0	5.4	3.0	370.0	輝緑凝灰岩	古生界	
〃　〃	19	〃	6号土壙	(7.7)	(4.6)	—	(70.4)	〃	〃	欠損品
29　11	20	6類	〃	7.7	7.3	3.3	198.0	石英		
30	21	7類		(12.0)	(9.0)	(4.0)	(555.0)	泥質細粒凝灰岩		欠損品
30	22	8類		(13.0)	7.5	(4.6)	(405.0)	淡緑色粗粒砂質凝灰岩		〃
30	23		表　土	4.8	(3.1)	1.3	(17.4)	流紋岩質凝灰岩	奥羽山地　中新統中部	石製品、欠損

※計測値　(数字)は欠損品の残存値を示す。

(2) 遺構について

竪穴住居跡

1号・2号住居跡とも削平のためか壁は遺存せず、周溝等の施設も認められない。住居跡としたのは、埋設土器中の焼土から土器埋設炉とし、それに対応して配列する柱穴状ピットを柱穴とすることによったものである。1号住居跡の場合は独立し位置することで住居跡としてのまとまりを認定できるが、2号住居跡では、他の小ピットとの関連の中で住居跡とすることに多少無理のあることも否定できない。

〔平面形〕　それぞれの柱穴配列から推定する。1号住居跡は増改築があり、古期では円形で径は約4mで、新期は楕円形で長径約5m、短径約3.5mであり、長軸は東西方向である。2号住居跡は楕円形で長径約5m、短径約3.5mで、1号住居跡新期とほぼ同規模である。長軸は北西から東南方向となる。

〔床面〕　1号住居跡土器埋設炉の近辺を除き、削平によって本来の床面の遺存はないが、地山面をそのまま床面としたものである。

〔柱穴〕　いずれも6個であるが、1号住居跡の古期では正六角形に近い配列、新期では長軸に対し3個づつ配され、中央の2個が外に張り出す。2号住居跡では長軸に対し2個が対称に配され長軸の中央線上に乗る2個が短軸側柱より外に張り出し位置するもので、三者三様をなす。

〔炉〕　1号住居跡古期では、ほぼ中央に位置したものと推察されるが構造は不明である。新期は土器埋設炉で西半中央に、2号住居跡では2基の土器埋設炉がほぼ中央に並列してある。炉に使用した土器は、いずれも深鉢で意図的に胴部を切断している。

〔埋設土器〕　1号住居跡では東端に正位に埋設した土器が、2号住居跡では南縁沿いに反位に埋設した土器がある。どちらも深鉢で1号住居跡のものは胴部を切断しており、弱い火をうけていることから、火の使用に伴なう機能をもったものと考えられるが、2号住居跡の埋設土器と合せ性格と機能を示す根拠に欠ける。また住居跡範囲内に位置することから関連するものとしたが、積極的なものに欠ける。

〔年代〕　柱穴埋土等から出土の土器もあるが、直接的年代決定資料は炉埋設土器である。1号住居跡では土器分類の5類dに相当し、また埋設土器は5類eで、いずれも大木8aに比定される。2号住居跡では、炉埋設土器は分類不可能なため、埋設土器によると5類dに分類され、更に、本遺構より新しい6号土壙の底面や埋土出土の土器の大半が5類d・eに分類されることから、2号住居跡も大木8a期に近い時期と考えられる。

以上からみて、1号（古・新期）・2号住居跡とも大木8a期、つまり縄文時代中期中葉と年代比定されるものと考える。

柱穴状ピット

検出地区および縄文時代への位置づけの理由は前述した。検出された現状の中では、掘立柱建物等になる配列は見出せず、その性格は不明である。

埋設土器

2基中、1号埋設土器は深鉢の胴部を切断したもので、2号埋設土器は鉢で口縁を欠くが、底部をもつ、1号では埋土に焼土を見なく、2号では埋土に焼土をみる。しかし、1号も胴部切断のあり方は住居跡の炉埋設土器と似、2号で焼土があり、いずれも正位の埋設状況からして、火の使用に関する機能が推察できるが、今後の課題でもある。時期は確定できない。

土 壙

18基の検出で、平面、断面の形態と規模から基本的には三つに分類できる。

A類 楕円もしくは不整円形の平面を基本とし長径150cm以上、皿状の断面を呈し深さ10cm～45cm、埋土、底面に比較的土器を含む、Ab10・20、Ac20区に集中する。

B類 円もしくは不整円形の平面を基本とし長径70cm～130cm内のもので、皿状の断面を呈し深さ8cm～25cmで、遺物は少なく、8号土壙から箆状石器、14号土壙から5類Cの土器片4点が出土したのみである。Ac10区に集中する。

C類 隅丸方形の平面を基本とし長辺が95cm～128cmで、ビーカー状の断面を呈し深さ71cm～90cm 底面中央に円形の小穴を有する。遺物は全く検出されない。

A類は全て遺物を共伴し、大むね4類から5類の土器が多く縄文中期前半に比定できる。B類は第II地区・第V地区で検出された土壙と類似する。縄文時代に比定されると考えるが、理由は第V区のまとめの項で述べる。C類も遺物がなく年代決定は困難であるが、平安時代の6号・9号竪穴住居跡より古く、縄文時代の円形で底面に小穴を有する土壙の変形と考えることもでき、事実、17号土壙の上端平面は円形を呈する。以上から縄文期の遺構と解したい。なおC類に類似遺構は水沢市袖谷地遺跡[註(1)]や第V地区で知見する。

註(1) 袖谷地遺跡「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書」—VI—岩手県教育委員会、日本道路公団

3　古代・中世の遺構と遺物

(1)　竪穴住居跡と出土遺物

竪穴住居跡の大部分は、削平が著しく辛じてその痕跡を留めるもののみである。なお遺構番号は縄文時代の竪穴住居跡番号からの通しで用い、土器の坏はA類・B類の分類記号で（4—(1)項参照）甕等については、土師器、須恵器の用語を使用した。

3号（Ad10）竪穴住居跡（第31図）

Ad10区南東隅近くに位置する。削平が著しく不明な点が多いが、床面一部及びその構築時の掘り方埋土と推察される部分、焼土、遺物の存在から住居跡と推定した。

〔重複〕　認められない。

〔平面形　規模〕　不明

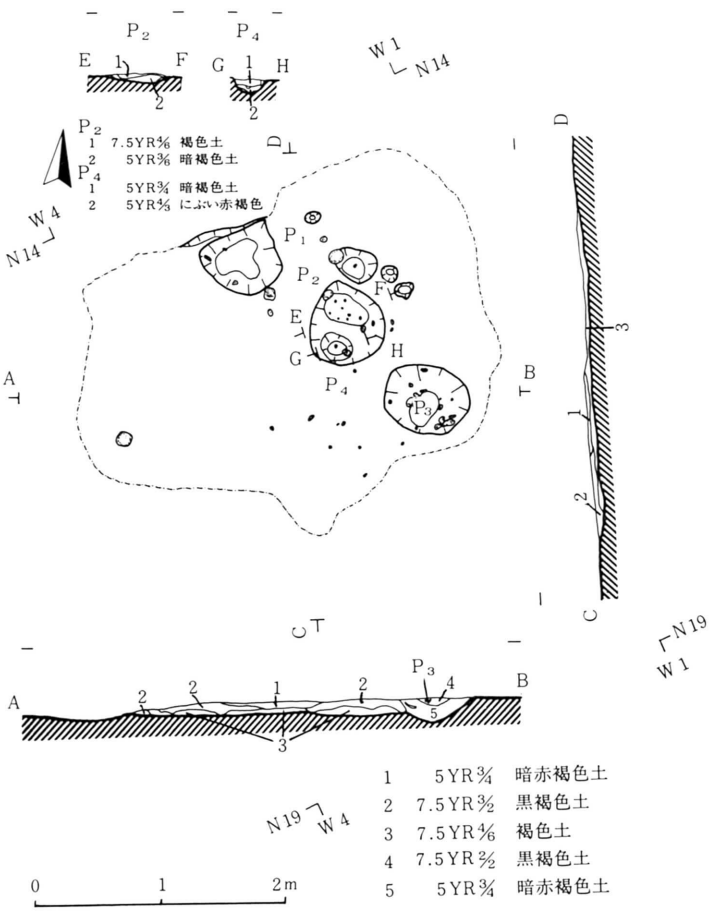
〔埋土〕　不明

〔床　壁〕　削平のため本来の床面が遺存する状況にないが、構築に当っては一担地山を掘りこんだ後、黒色土と地山火山灰土の混土を主体に一定面まで埋め、その上面を床としている。すなわち、第31図の断面に示す1層は黒色土と火山灰土の混土に焼土を極少含み、2層もほぼ同様、3層は火山灰土を主体に黒色土を含んだものであり、床構築の埋土と解される。

壁については不明である。

〔柱穴〕　確認できない。

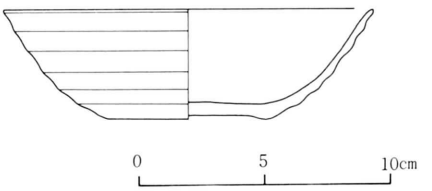
〔かまど〕　確認できないが、P_2・P_4を覆い約60cm×80cmの範囲に焼土の堆積があり、更にP_2・P_4埋土にも認められるが、現地の火熱痕をもち、特にP_2では強く地床炉的性格も推察できる。



第31図　3号竪穴住居跡

〔その他の施設〕　P_1は55cm×50cmの不整形で、検出面から8cmの深さ、P_3は55cm×70cmの楕円形、検出面から20cmの深さをもつ、いずれも性格は不明である。

〔遺物〕 床面からB類坏片3点（口縁1 体部1 底部1）、C類坏片2点（体部1、底部1）土師器甕胴部片4点と復元可能B類坏（第32図 図版12）1点が出土した。



第32図 3号住出土坏

第32図B類坏は、口径14.8cm、底径6.4cm、器高4.4cmで、体はやや内湾ぎみに立ち上がり、口縁は直に外にぬける。外面はにぶい褐色を呈し胎土に少量の石英と多量の小円礫を含み、焼成は不良である。ロクロ痕の凹凸が明瞭で、底部は回転糸切り無調整であり、B_4類に分類した。

4号（Ae10）竪穴住居跡（第33図 図版4）

Ae10区の北西隅に位置し、南に5号竪穴住居跡が隣接する。削平が著しく床面の一部を遺存するのみである。

〔重複〕 ピットの中には遺構に伴なうものか否か明確でないものもあり、また5号住居跡との重複も想定されるが確証がなく不明である。

〔平面形 規模〕 わずかに遺存する壁の状況から、隅丸方形で東西4.1m、南北3.8mの規模が推察される。東辺でN－7°－Wである。

〔埋土〕 6層からなり、1層の黒褐色土は地山火山灰土を小ブロック状に混入し、焼土、炭化物を極小含む、2層暗褐色土と火山灰土の混土、3層は汚れた火山灰褐色土、4層明褐色火山灰土、5層は火山灰土の混る黒褐色土、6層は火山灰土と黒褐色土の混土である。なお、7層は P_3 の埋土で地山火山灰と焼土、炭化物を含む黒褐色土である。

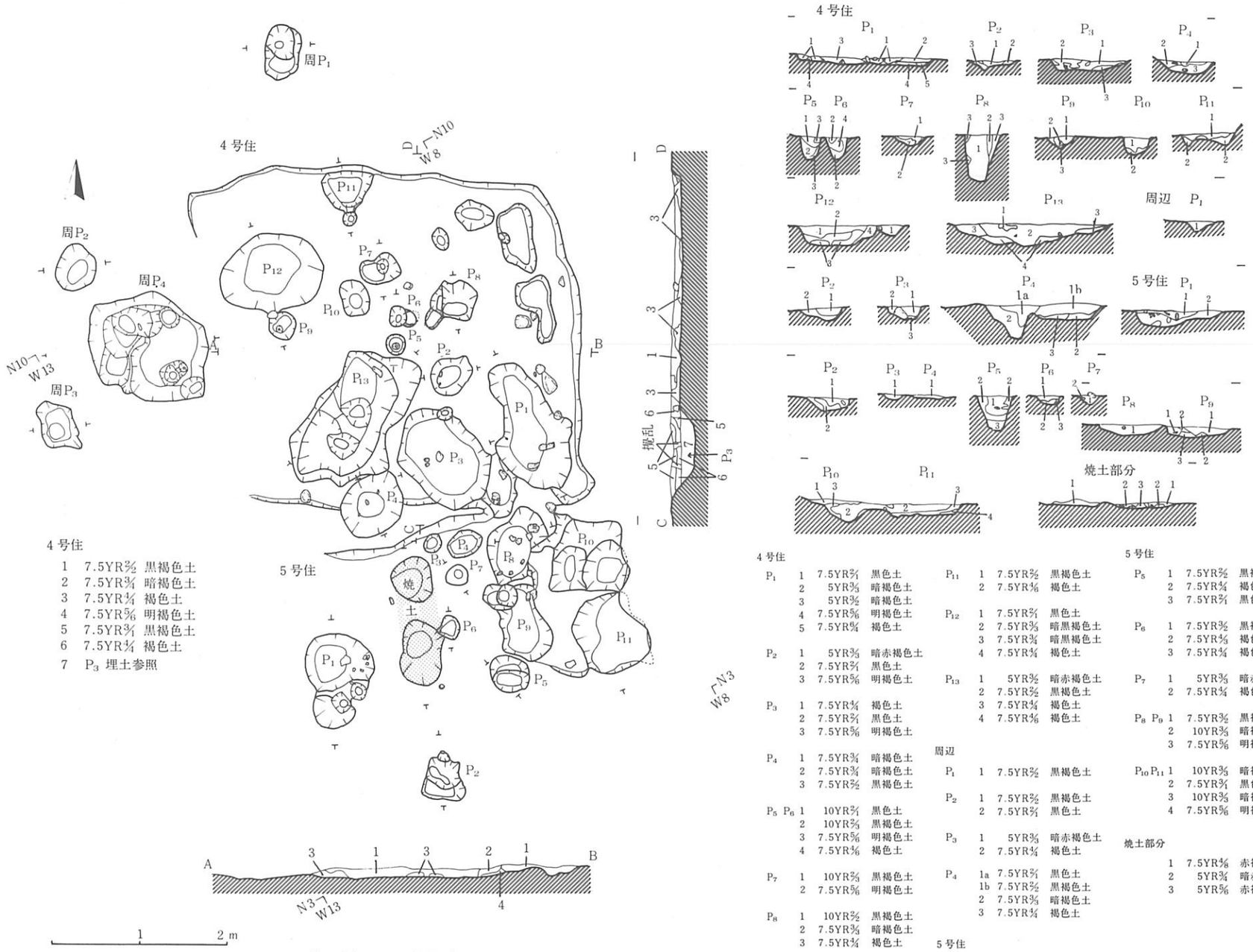
以上の中で P_3 の埋土とした7層の上にのみ6・5層をもち、1層上面から掘りこまれた P_3 に後に埋められた可能性が強く、とするならば、1～4層は比較的固く床面構築土となることも考えられる。このことは、上記の各層は本項で扱う住居跡埋土とは異なるものとなる。

〔床 壁〕 床は埋土の項で述べたように、埋土としたものが床の構築土とするならば、地山を一担掘りこんで一定面まで構築土を埋めその上面を床とした可能性が強い。したがって深さ10cm内外で遺存する壁（西・南辺は不明瞭）は、床構築の掘り方輪郭で、床面上の壁は遺存しないことになる。

〔柱穴〕 東半中央やや北寄りに位置する P_8 は、径40cm×50cm、深さ50cmで柱穴状を呈し、埋土からしても可能性が強い。ただし対する柱穴が不明である。

〔かまど〕 確認できない。

〔その他の施設〕 住居跡内と推定される中には13のピットを数えるが、掘りこみ面が判然



4号住

1　7.5YR 2/2　黒褐色土
2　7.5YR 3/4　暗褐色土
3　7.5YR 4/4　褐色土
4　7.5YR 5/6　明褐色土
5　7.5YR 3/1　黒褐色土
6　7.5YR 4/4　褐色土
7　P3 埋土参照

第33図　4・5号竪穴住居跡

4号住

P1	1	7.5YR 3/1	黒色土
	2	5YR 3/3	暗褐色土
	3	5YR 3/2	暗褐色土
	4	7.5YR 5/6	明褐色土
	5	7.5YR 6/4	褐色土
P2	1	5YR 3/3	暗赤褐色土
	2	7.5YR 2/1	黒色土
	3	7.5YR 5/6	明褐色土
P3	1	7.5YR 4/4	褐色土
	2	7.5YR 2/1	黒色土
	3	7.5YR 5/6	明褐色土
P4	1	7.5YR 3/4	暗褐色土
	2	7.5YR 3/4	暗褐色土
	3	7.5YR 3/2	黒褐色土
P5 P6	1	10YR 2/1	黒色土
	2	10YR 3/3	黒褐色土
	3	7.5YR 5/6	明褐色土
	4	7.5YR 4/6	褐色土
P7	1	10YR 3/3	黒褐色土
	2	7.5YR 5/6	明褐色土
P8	1	10YR 3/2	黒褐色土
	2	7.5YR 3/3	暗褐色土
	3	7.5YR 4/4	褐色土
P9	1	7.5YR 3/3	暗褐色土
	2	7.5YR 5/6	明褐色土
	3	7.5YR 3/2	黒色土
P10	1	7.5YR 3/2	黒色土
	2	7.5YR 5/6	明褐色土
P11	1	7.5YR 3/2	黒褐色土
	2	7.5YR 4/6	褐色土
P12	1	7.5YR 2/1	黒色土
	2	7.5YR 3/3	暗黒褐色土
	3	7.5YR 3/3	暗黒褐色土
	4	7.5YR 4/4	褐色土
P13	1	5YR 3/3	暗赤褐色土
	2	7.5YR 3/2	黒褐色土
	3	7.5YR 4/4	褐色土
	4	7.5YR 4/6	褐色土

周辺

P1	1	7.5YR 3/2	黒褐色土
P2	1	7.5YR 3/2	黒褐色土
	2	7.5YR 2/1	黒色土
P3	1	5YR 3/3	暗赤褐色土
	2	7.5YR 4/4	褐色土
P4	1a	7.5YR 2/1	黒色土
	1b	7.5YR 3/2	黒褐色土
	2	7.5YR 3/3	暗褐色土
	3	7.5YR 4/4	褐色土

5号住

P1	1	7.5YR 3/3	暗褐色土
	2	7.5YR 3/2	黒褐色土
P2	1	7.5YR 3/3	極暗褐色土
	2	7.5YR 3/4	暗褐色土
P3 P4	1	7.5YR 3/2	黒褐色土

5号住

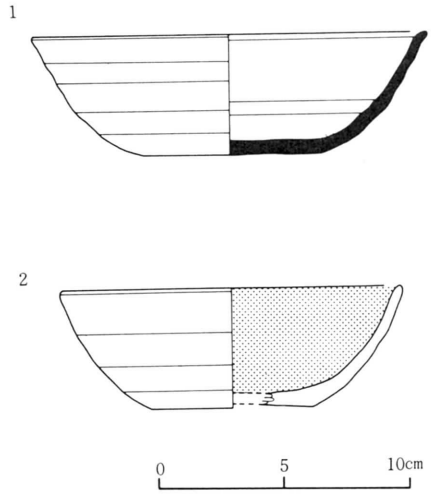
P5	1	7.5YR 3/2	黒褐色土
	2	7.5YR 4/4	褐色土
	3	7.5YR 2/1	黒色土
P6	1	7.5YR 3/2	黒褐色土
	2	7.5YR 4/3	褐色土
	3	7.5YR 4/4	褐色土
P7	1	5YR 3/3	暗赤褐色土
	2	7.5YR 4/4	褐色土
P8 P9	1	7.5YR 3/2	黒褐色土
	2	10YR 3/3	暗褐色土
	3	7.5YR 5/6	明褐色土
P10 P11	1	10YR 3/3	暗褐色土
	2	7.5YR 2/1	黒色土
	3	10YR 3/3	暗褐色土
	4	7.5YR 5/6	明褐色土

焼土部分

	1	7.5YR 5/8	赤褐色土
	2	5YR 3/4	暗赤褐色土
	3	5YR 5/6	赤褐色土

としないため、性格については判断しにくいが、前述の P_3 のように床面から掘りこまれたと推定される例もあり住居跡内の何らかの施設と考えることができるし、他方、床構築の掘り方の一部が含まれている可能性もある。なお、周辺の P_1～P_4 の性格と住居跡との関連も不明である。

〔遺物〕 A類坏片6点（口縁4 体部1 底部1） B類坏片7点（口縁5 体部1 底部1） C類坏片6点（口縁1 体部4 底部1） 須恵器甕片4点(口縁1 胴部3 底部0)、土師器甕片37点（口縁6 胴部26 底部5）と復元実測可能の坏2点（第34図1・2 図版12）がある。第34図1の坏は、底～口縁まで約50%の残存で、推定口径15.8cm、底径7cm、器高4.8cmで体部はやや丸味をもって立ちあがり、口縁はわずかに外反する。内外面とも灰色を基調とするが、にぶい橙色を呈する部分がある。口縁に重ね焼き痕を認め、底部は回転糸切り無調整、 A_1類に分類した。

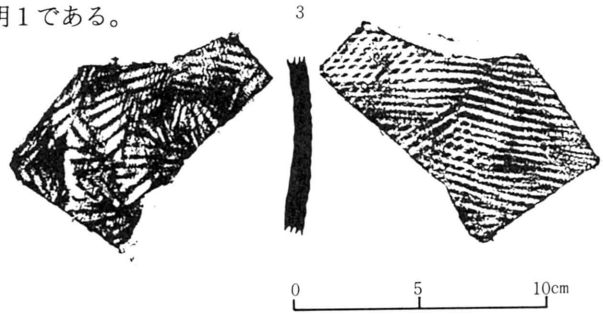


第34図 4号住出土坏

2の坏は、底～口縁まで約25%の残存で、推定口径13.4cm、底径6.4cm、器高4.8cmで、ロクロ使用の体部はやや丸味をもって立ち、口縁はそのまま外にぬける。体外面はにぶい橙色を呈し、内面は黒色処理がある。内外面及び底部とも磨滅が著しく調整の有無、底部切り離し技法は不明である。C_1類に分類した。

各器種破片の底部はA・B・C類坏はいずれも回転糸切り無調整、土師器甕ではナデ調整2、木葉痕1、回転糸切り無調整1、磨滅不明1である。

須恵器甕片は第35図のように、外面に刻目のある工具による平行叩き目、一部格子目状があり、内面は不定方向のあて工具痕とその上にカキ目状の調整痕がある。内外面とも青灰色を、断面は灰褐色を呈しているものに代表される。



第35図 4号住出土土器拓影図

5号（Ae20）竪穴住居跡（第33図 図版4）

4号住居跡の南にすぐ隣接して位置する。削平のため、北東隅とみられる部分のみわずかに遺存し、住居跡の全容は不明である。

〔重複〕 4号住居跡との重複も想定されるが、確証がなく不明である。

〔平面形 規模〕 不明である。

〔埋土〕 削平のため遺存せず不明である。

〔床 壁〕 床の状況は不明であり、北側壁の一部かとみられる個所が存在するが、床構築の掘り方部分とも言え断定し難い。

〔柱穴〕 P_5 は径40cm×50cm、検出面から40cmで柱穴状をなすが、対する柱穴もなく確証できない。

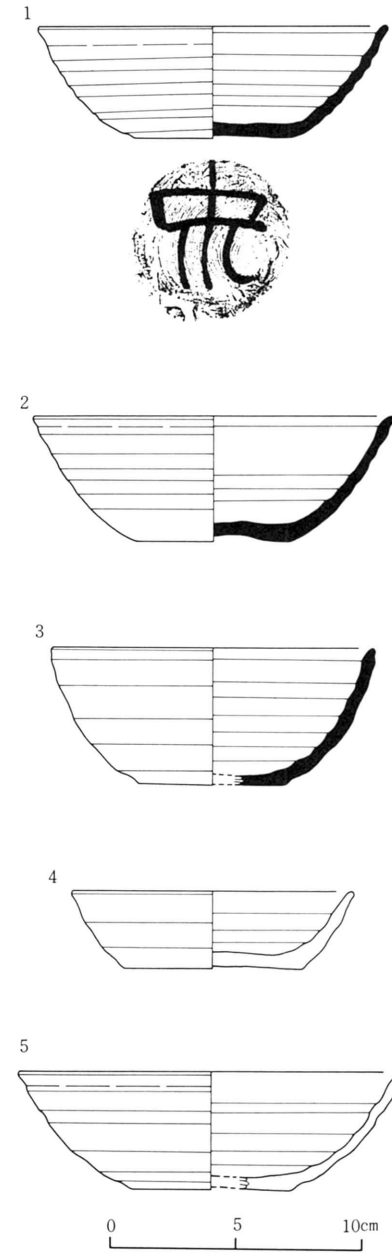
〔かまど〕 確認できないが、北側部分で50cm×150cmで南北に長い長楕円状の焼土の堆積があり厚さ5～7cmを測る。現地火熱を認めるが強いものではない。

〔その他の施設〕 P_1～P_{11} を認めたが、P_1内で坏3個体、P_8内で坏2個体検出しており貯蔵穴的性格を推察できるが確証に欠ける。他は性格不明である。

〔遺物〕 A類坏片11点（口縁5 体部3 底部3） B類坏片10点（口縁6 体部3 底部1） C類坏片10点(口縁5 体部5)、須恵器甕胴部片1点 土師器甕片51点（口縁18 胴28 底5）と復元実測可能なA類坏3点（第36図1～3 図版12)、B類坏2点（第36図4・5 図版12）が出土した。

第36図1は、口縁の一部分を欠くのみで約90％は残存する。口径13.8cm、底径6.2cm、器高4.4cmで、体はやや丸味をもって立ち、口縁で若干外反する。外面は灰色を呈し口縁に重ね焼き痕がある。回転糸切り無調整で、外底面にかすかに墨書痕があり赤外線撮影の結果、「卉」又は「卉」にみられる。P_8 からの出土で、A_1類に分類した。

2の坏は、口縁から底部へ全体の3％の残存で、推定口径14.2cm、底部径6.0cm、器高5.0cm、形態は1の坏に類似する。外面は灰黄色を呈し、口縁に重ね焼痕をもつ、回転糸切り無調整の底部である。



第36図 5号住出土坏

P_8 からの出土で、A_1類とした。

3の坏、口縁から底部へ約20%の残存で、推定口径12.6cm、底径5.8cm、器高5.4cmで、口径に対し器高の比率が高く、体は丸味をもって立ち口縁に変化はない。外面黄灰色を呈し口縁に重ね焼き痕をもつ、底部回転糸切り無調整、P_1 からの出土で、A_2類とした。

4の坏は、全体の50%の残存で、推定口径11cm、底径7cm、器高3.1cm、体は直に外傾し口唇でわずかに外反する。外面は橙色またはにぶい橙色で、胎土に石英を多量に含む、底部回転糸切り無調整、P_1 からの出土で、B_1類とした。

5の坏、約40%の残存で、推定口径15.2cm、底径6.4cm、器高4.7cmあり、体はやや丸味をもち比較的大きく外傾し、口縁がわずかに外反する。浅黄橙色を呈し、胎土に多量の石英を含む、底部回転糸切り無調整、P_1 からの出土で、B_4類とした。

A・B類坏破片の底部は、いずれも回転糸切り無調整、土師器甕破片底部では、回転糸切り無調整1、木葉痕1で、他は磨滅して不明である。

6号（Ba30）竪穴住居跡

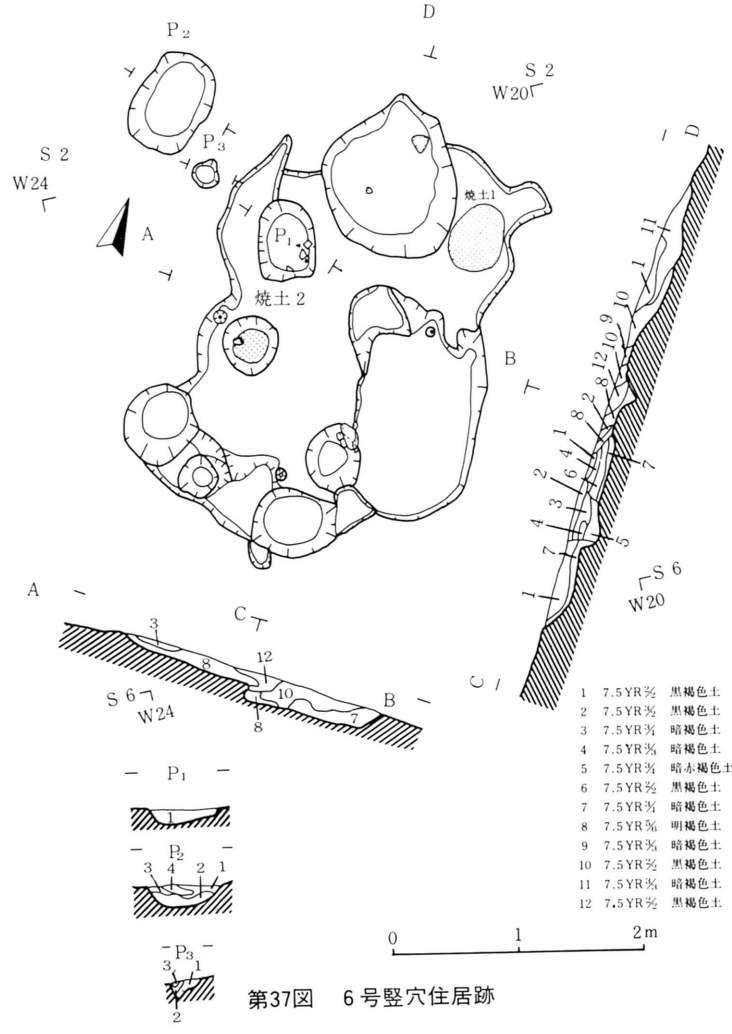
（第37図）

Ba30区の北東隅に位置するが、削平のためその痕跡を留めるに過ぎない。

〔重複〕　東側で16号土壙と重複し、本遺構がより新しい。

〔平面形　規模〕　削平のため、東西2.3m、南北3.6mの不整形にその痕跡を残すのみで断定できないが隅丸長方形等が推察される。なお現状での南北方向は、ほぼ真北に近い。

〔埋土〕　第37図の断面からも知れるが、細分された土性の基調は黒色土と火山灰土の混土で、しかも地山面に凹



第37図　6号竪穴住居跡

凸が著しいことは、住居跡の埋没土たる埋土ではなく、床構築土であると推察する。したがって、いわゆる埋土は削平によって不明である。

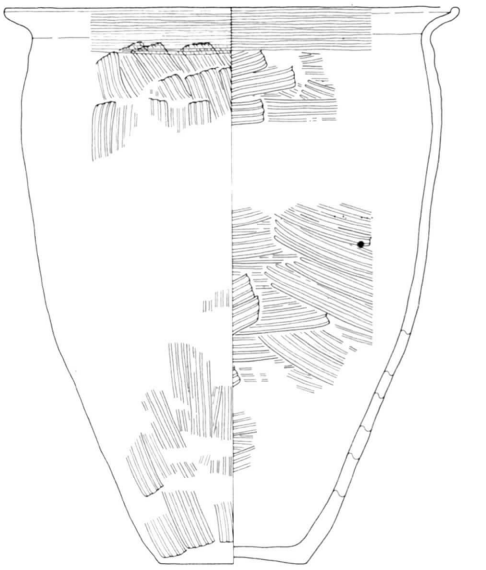
〔床 壁〕 前項で述べたように、床は地山面を一担掘りこんで後、一定面まで黒色土と火山灰土の混土を主体に埋め固め構築したものと推定され、現状はその掘り方の一部が残存したものとみる。壁は削平につき不明である。

〔柱穴〕 不明である。

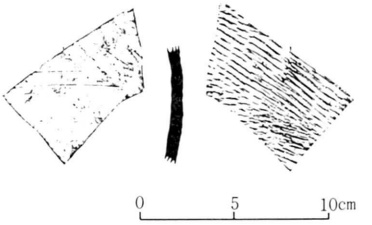
〔かまど〕 不明であるが、40cm×53cmの楕円状の範囲で焼土1、45cm×50cmの円形の範囲で焼土2を認めた。いずれも現地性のものである。

〔その他の施設〕 P_1～P_3 のピットを検出したが性格は不明である。

〔遺物〕 A類坏片10点（口縁5 体部5）B類坏片の体部1点、C類坏片4点(口縁2 体部2） 須恵器甕胴部片5点 土師器甕片8点（胴部6 底部2）と実測可能の土師器長胴甕（第38図 図版12）1個体の出土をみた。



第38図 6号住出土甕



第39図 6号住出土甕拓影図

第38図の土師器長胴甕は、全体の30％の残存で図面合成による。推定で口径23.8cm頸部径21.2cm 底部径7.8cm 器高29.3cmあり、ロクロ不使用で、口縁は短かく「く」字状に外傾するが比較的屈曲が強く、口唇を上方につまみ出す、調整は口縁内外とも横ナデ、胴部は外面は縦方向の刷毛目、内面上半は横方向、下半は横及び斜方向の刷毛目で、底部はヘラナデが施されている。外面は明赤褐色を呈し、胎土に石英、雲母、小円礫を含んでいる。P_1 から出土した。

須恵器甕片（第39図）は、外面に平行叩き目、内面にあて工具痕とその上にカキ目状の調整痕がある。外面は灰黄色、断面が灰黄褐色を呈する。

土師器甕底部片は磨滅のため調整不明であるが、いずれもロクロ不使用のものと推察する。

7号（Ba50）竪穴住居跡（第40図 図版4・5）

Ba50区の南東隅に位置し、削平や木根攪乱を認めるが、ほぼその輪隔を遺存している。

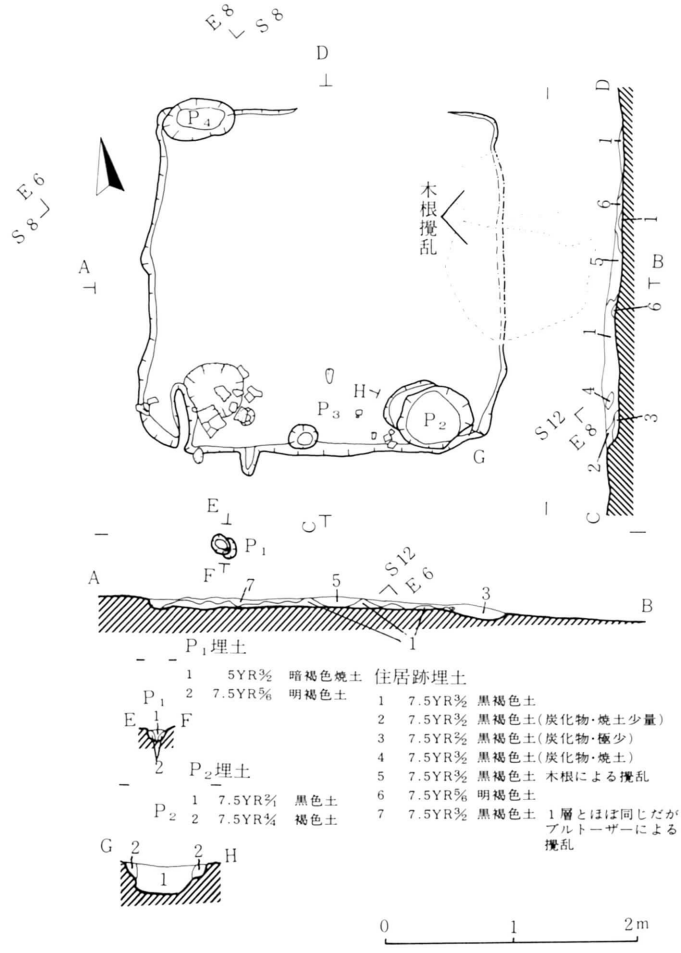
〔重複〕　認められない。

〔平面形　規模〕　隈丸方形と推定され、東西2.8m、南北2.7mで正方形に近く、東壁南北方向でN－12°－Eとなる。

〔埋土〕　1層から7層まで細分されているが、6層の明褐色火山灰土基調を除き、黒褐色土主体に地山火山灰土が混入する。その混入のしかたに粒状又はブロック状等及び焼土、炭化物の含有の有無等の若干の差異によるもので、基本的には黒褐色土に統一できる。

〔床　壁〕　床は地山火山灰土面をそのまま用い、ほぼ平坦とみる。

北壁と東壁が削平、木根による破壊で不明瞭である。現状で最も遺存の良い西壁での壁高は約10cmで外傾するが、本来的なものは不明である。



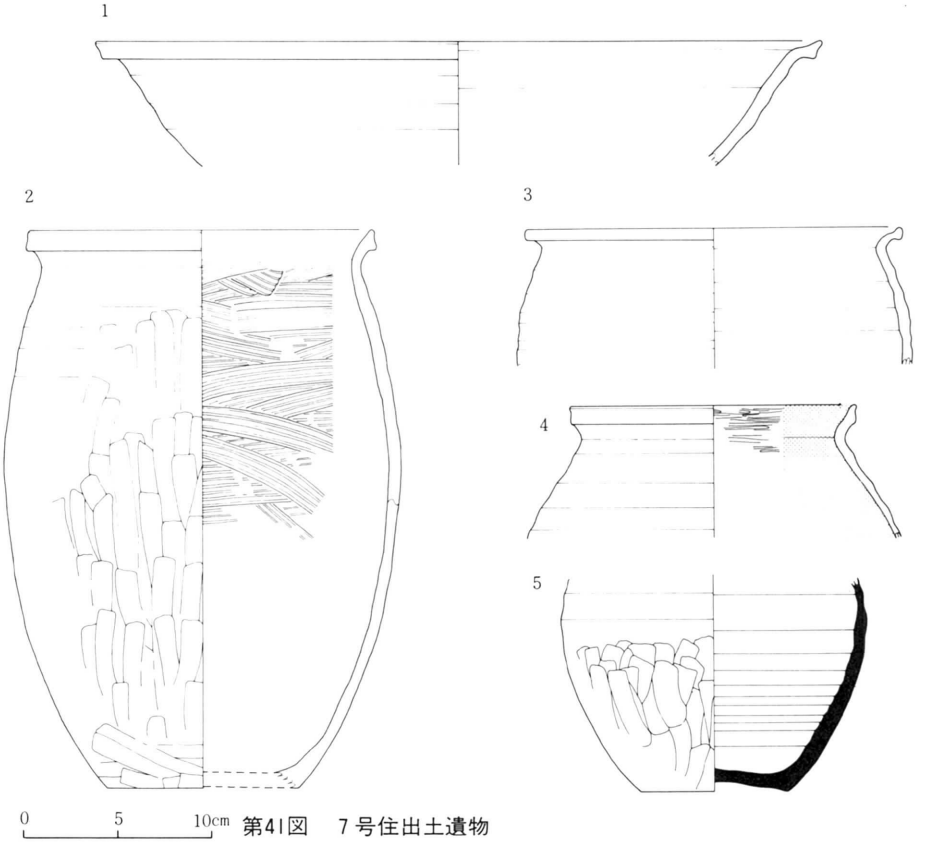
第40図　7号竪穴住居跡

〔柱穴〕　認められない。

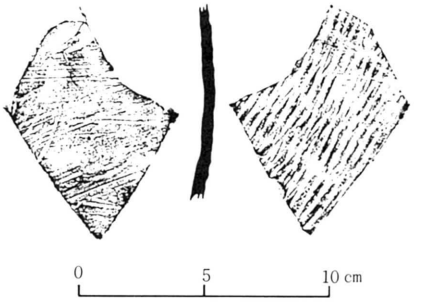
〔かまど〕　南壁の西端に位置する。破壊が著しく、右袖の一部と燃焼部底面のみの遺存である。遺存する右袖は、火山灰性粘土を主体に構築されたもので、川原石を芯材としたものである。燃焼部底面は、45cm×50cmの範囲で6cmほどの落ちこみになっていて比較的強く焼けている。煙道は不明であり、煙出しも確証に欠けるが、P_1は埋土に暗褐色焼土をもつことと位置的に煙出しの可能性もある。

〔その他の施設〕　P_2～P_4のピット中、P_2は周辺に遺物をもち、かまど近くに位置し貯蔵穴的性格を考え得る。P_3・P_4は埋土にそれぞれ褐色火山灰土・黒褐色土1層で共伴遺物もなく、性格不明であるとともに本遺構に伴なうとの確証もない。

〔遺物〕　A類坏片13点（口縁6　体部5　底部2）　B類坏片11点（口縁4　体部7）　C類坏片8点（口縁3　体部2　底部3）　須恵器甕片3点　土師器甕片29点（口縁5　胴部21　底部3）と実測可能土器5点（第41図　図版13）の出土である。



第41図　7号住出土遺物



第42図　7号住出土甕拓影図

第41図の1は、口縁から体部の残存で底部を欠く、全体の10%ほどからの実測復元であり、盤と推察する。

推定口径は38.6cmで、ロクロ使用で体は若干丸味をもつかとみられ、口縁は「く」字状に外に短かく屈曲し、口唇を上方につまみ出す。全体にロクロナデ調整があり、外面はにぶい黄橙を呈し、胎土中に石英、小円礫を多く含み、焼成はB類坏と同じである。かまど付近から出土した。

2はロクロ使用の土師器長胴甕で、全体の約30%からの実測復元である。推定口径18.2cm 底径10.2cm　器高29.6cm、最大径は胴部で21cm程であって胴張りの形を呈する。口縁は短かく外反し、口唇を上につまみだす、調整は、口縁内外ともロクロナデ、胴部内面上半で横方向の刷毛目、下半は磨滅で不明、外面は縦方向のヘラケズリである。外面は明黄褐色で胎土に石英、雲母、小円礫を多く含む。かまど及びその周辺から出土した。

3はロクロ使用の土師器甕で、口縁から胴部の一部の残存から実測復元したものである。推定口径は20cmで、最大径は胴部とみられる。口縁は短かく強く外へ屈曲し、口唇を上下につまみだす。内外面ともロクロナデ調整で、外面はにぶい橙色を呈し、口縁近くに火熱のため赤変した部分を認める。胎土に石英、小円礫を多く含む。かまど燃焼部からの出土である。

4は口縁から胴部の一部残存から実測復元した。ロクロ使用で推定口径15.2cmあり、口縁は短かく「く」字状に外反し口唇でやや外につまみ出す。胴は大きく張り出し球胴状を呈するものと推定する。内面は黒色処理が施され横方向のヘラミガキ調整があり、外面はロクロナデ調整で明褐灰色を呈し、胎土に微量の金雲母と少量の石英を含む。いわゆる内面黒色処理の土師器壺で、かまど付近及び P_2 付近で破片が出土した。

5は須恵器で胴上半から口縁を欠き、全形態はつかみ得ないが甕又は壺と推察する。推定胴部径16.4cm、底部径7.8cmあり、最大径は胴部とみられる。胴部下半内面はロクロナデ、外面は鋭い縦方向のヘラケズリ、底部もヘラケズリ調整である。外面は灰色を呈し、胎土に石英少量と砂粒を含む、かまど周辺から出土した。

須恵器甕片は第42図に代表されるように、外面に平行叩き目、内面はあて工具痕の上にカキ目状の調整痕をもつ、外面色調は褐灰色で断面は灰色を呈する。

出土底部破片は甕を除きいずれも回転糸切り無調整、甕は磨滅で不明である。

8号（Bb10）竪穴住居跡（第43図　図版5）

Bb10区の南西隅に位置し、地山火山灰土と異なる暗褐色の方形範囲と円形の焼土及び少量の土器片を検出したことで住居跡とした。

〔重複〕　新しい掘りこみと重複しそれより古い可能性がある。

〔平面形　規模〕　推定される平面形は、東西3.5m、南北3.3mの正方形に近く、南北方向でほぼ真北を向く。

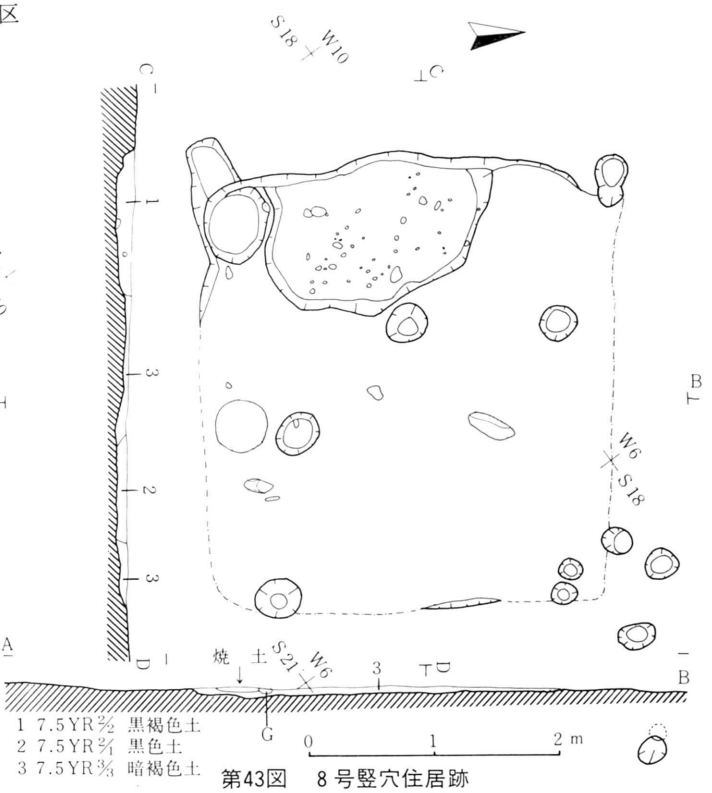
〔埋土〕　削平のため、いわゆる埋土はないとみられる。すなわち層は黒土と火山灰土がブロック状に混合する暗褐色土で、この上面に現地性の焼土を認めることから、3層は床構築土の可能性が強く、1・2層は断面からの観察では3層上面から入りこみ新しい掘りこみの可能性もある。

〔床　壁〕　前項で述べたように、黒土と火山灰土の混土を用いて床を構築したものとみられ構築土の厚さは約4cmを測る。壁は不明である。

〔かまど〕　確認できない。推定南辺沿い中央付近に径42cm×42cmの現地性焼土がある。

〔その他の施設〕　円形ピットを多数認めるが柱穴等になり得るものはない。

〔遺物〕　A類坏体部片1点　B類坏片4点（口縁3　体部1）土師器甕胴部片7点がある。



第43図　8号竪穴住居跡

9号（Bc70）竪穴住居跡（第44図　図版5）

Bc70区の北西隅近くに位置しているが、削平が著しい。

〔重復〕　西壁P_3付近で18号土壙と重復するが、本住居跡がより新しい。

〔平面形　規模〕　東西3m×南北4.2mの南北に長い方形で、南北方向でN'—7°—Eである。

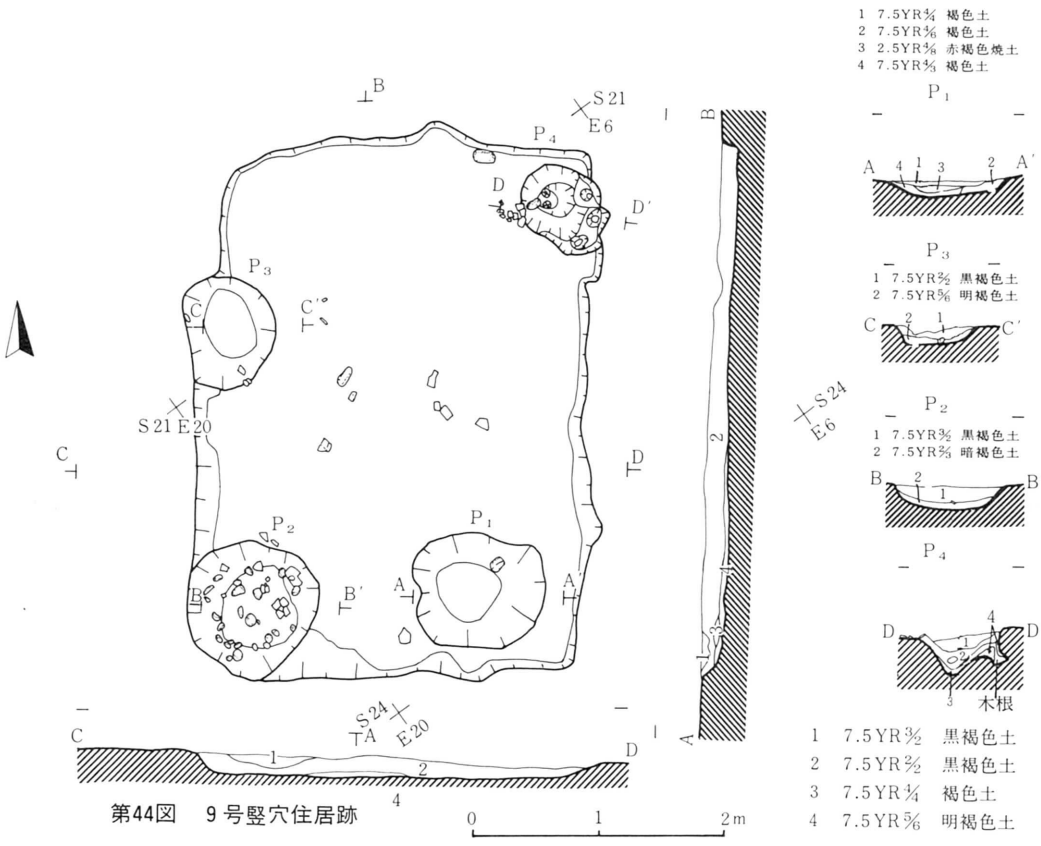
〔埋土〕　1～4層と黒色土又は黒褐色土で、土性に大きな差異はない。いずれも焼土、炭化物を少量と火山灰土を小ブロック状で含むが、火山灰土の混入率は2層が最も多く、4層が最も少ない。埋土の主体は2層である。

〔床　壁〕　床面は地山火山灰土をそのまま利用し、ほぼ平坦である。壁は北壁で直に近く立つが、他は外傾している。遺存する壁高は西壁で15cmを測る。

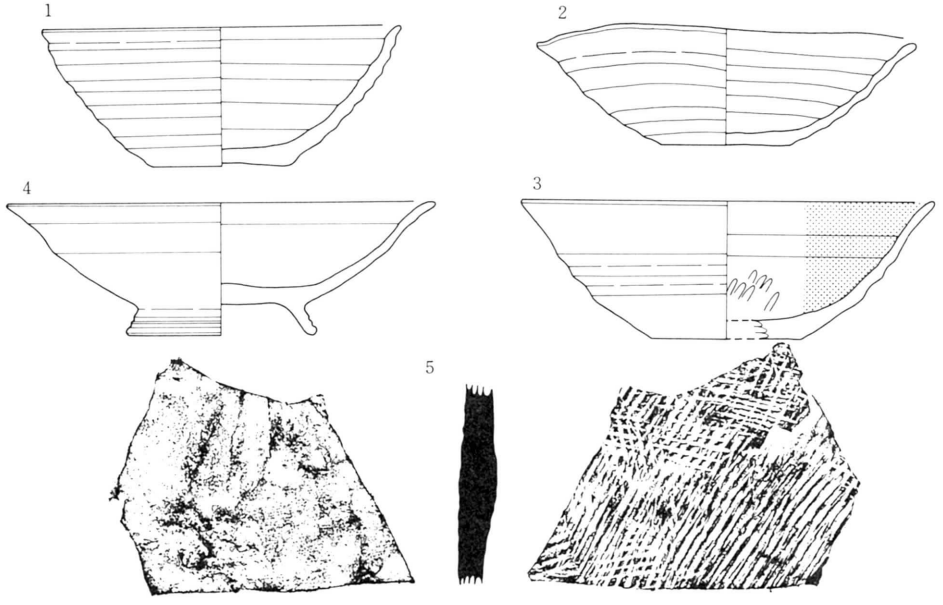
〔柱穴〕　〔かまど〕　柱穴は不明、かまど不明であるが壁の残りと関連すると本来的になかった可能性がある。

〔その他の施設〕　P_1の径100cm×90cm、深さ13cm、P_2径102cm×105cm、深さ19cm、P_3の径70cm×90cm、深さ11cm、P_4の径60cm×70cm　深さ30cm、の規模をもつ4ピットを検出したが、その性格については不明である。

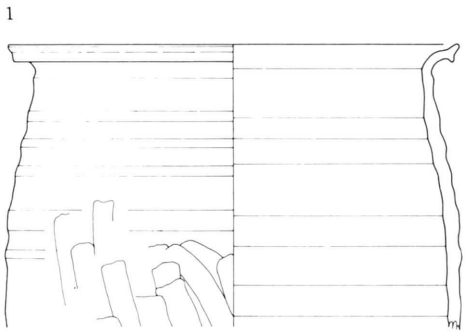
〔遺物〕　A類坏片4点（口縁1　体部2　底部1）　B類坏片36点（口縁20　体部11　底部5）　C類坏片4点（体部3　底部1）　須恵器甕片胴部8点　土師器甕片43点（口縁7　胴部34　底部2）と実測可能土器6点（第45図1～4　第46図1・2　図版13・14）がある。

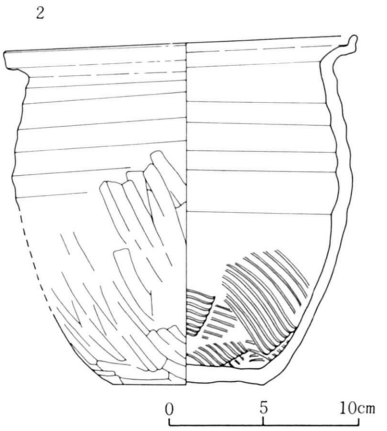


第44図　9号竪穴住居跡



第45図　9号住出土遺物





第46図　9号住出土甕

第45図1の坏はほぼ完形で、口径14.2cm　底径5.4cm　器高5.5cmあり、体は底部から直に外傾し、上半口縁近くで若干内側に屈曲し口縁はやや外返する。いわゆる摺鉢形を呈する。内外面ともロクロ調整痕があり、特に外面はロクロ痕が明瞭である。色調は内外ともにぶい橙色を呈し、胎土に微量の石英と砂粒を含む。底部は回転糸切り無調整、P_2内出土である。B_2類とした。

2は約25%の残存からの実測復元である。推定口径15.2cm　底径5.2cm　器高4.8cmで、体部はやや丸味をもち口縁で比較的大きく外反し、全体的にゆがんでいる。内外ともロクロ調整痕があり、外面は浅黄橙色を呈し、胎土に微量の石英と小円礫を多量に含む、底部回転糸切り無調整であり、P_2内からの出土である。B_3類に分類した。

3は口縁から底部へ全体の約25%の残存である。推定口径16.6cm、底径6cm　器高5.5cmあり体はやや丸味をもち、口縁は外反する。内面に黒色処理が施され、底から放射状に体下半へのミガキ、体上半では横のミガキ調整がある。外面はにぶい黄橙色を呈し、胎土に金雲母、石英がみられる。底部回転糸切り無調整、P_2内及び床面からの出土である。C_2類に分類した。

4はB類の台付坏で、脚から口縁まで約20%の残存である。推察口径17cm、底径6.6cm、脚部径7.4cm、器高5.3cmのうち脚部高が1.1cmとなる。体はやや丸味をもち大きく外傾し口縁で外反、脚は外に開き2条の沈線がめぐる。内外面ともロクロ調整痕のみで、浅黄橙色を呈する。胎土に微量の石英と雲母を含む、底部回転糸切り無調整、床面からの出土である。

第46図1はロクロ使用の土師器長胴甕で、全体の20%の遺存で下半は全く欠く。推定口径が23.8cm、胴部径24.2cmであり、口縁は短かく、外に強く屈曲し口唇で上下につまみ出す。口縁及び胴部上半は内外ともロクロナデ、胴部外面中半で縦方向のヘラケズリ調整をみる。外面は淡黄色を呈し、胎土に石英、小円礫を多量に含む、床面からの出土である。

2はロクロ使用の土師器甕で60%を残存する。口径18.8cm　底径8cm　器高18.5cmあり、胴中半でやや張り、口縁は短かく、外に強く屈曲し口唇を上につまみ出す。口縁及び胴部上半は内外面ともロクロナデ、胴部下半は内面で斜方向の刷毛目、外面で斜方向を主体とするヘラケズリ調整である。外面はにぶい橙色を呈するが、大半は煤が付着し灰褐色となっている。また

胴部下端の一部に火熱による赤変がみられる。P_2内と床面からの出土である。

第45図５は須恵器大甕片で、外面は黒褐色を呈し平行叩き目、内面にあて工具痕をもつもので、他に内外面とも平行叩き目をもつ破片がある。ただし、内・外面では使用具は異なり、外面施文がきめ細かい。

出土土器片の底部中、A・B類坏はいずれも回転糸切り無調整、C類の１点は磨滅のため切離し不明で、体下端には調整はない。これは埋土中からの出土である。土師器甕は磨滅により不明である。

10号（Bc60）竪穴住居跡（第47図　図版６）

Bc60区の南西に位置し、削平が著しく残痕が一部分認められるのみで、遺物も極めて少ない。

〔重複〕　認められない。

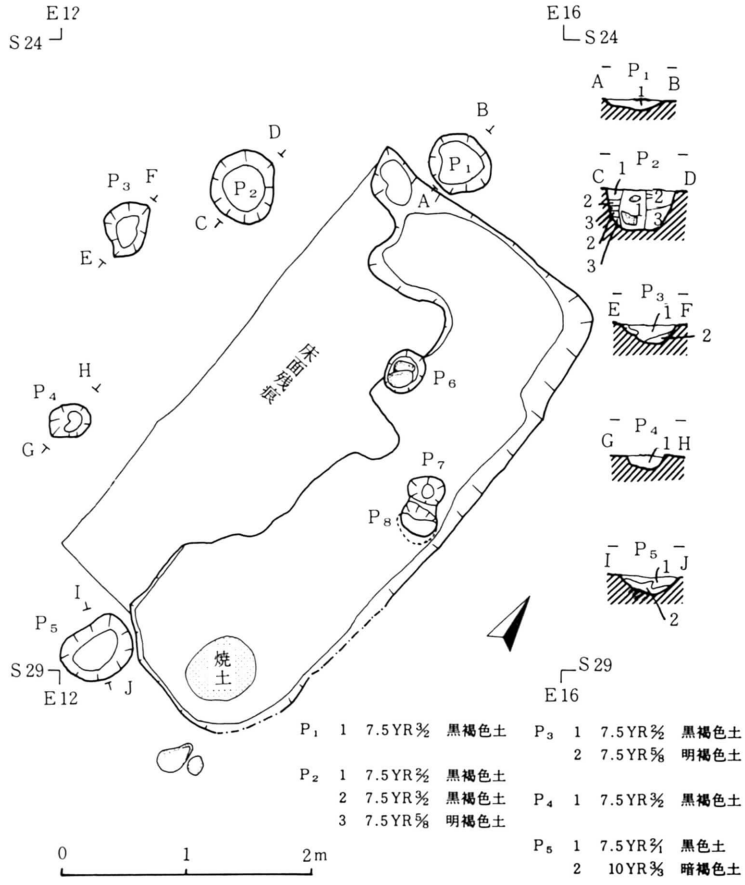
〔平面形　規模〕　現存で推定できるのは、東辺が約4.5mあることのみであるが、隅丸方形が考えられる。

東辺における南北方向はN－8°－Eとなる。

〔埋土〕　削平により不明。

〔床　壁〕　残存部の東半に５cm内外の落ちこみがあり、調査時点では排水遺構とされているが、床構築の掘り方と推察され、したがって床は地山面と一部構築土によるものとみられる。壁は削平のため不明である。

〔柱穴〕　P_2は柱痕跡があり柱穴と考えられ、対応するP_4とP_6であるが、P_4は浅く、柱穴としての確証はない。P_6は石が詰るが石面で深く27cmあり柱穴としての可能性がある。他のピットも各々に対応する位置にピットがあり、配置的には柱穴として考え得るが、深さや形態が柱穴状を呈しないことから断定できない。



第47図　10号竪穴住居跡

〔かまど〕　確認できないが、南東隅の掘りこみ面に径50cmの現地性の焼土を認めた。削平のため、床面からのものか否かは不明である。

〔遺物〕　土師器甕片６点（口縁１　胴部３　底部２）のみである。

(2) 土壙・墓壙と出土遺物

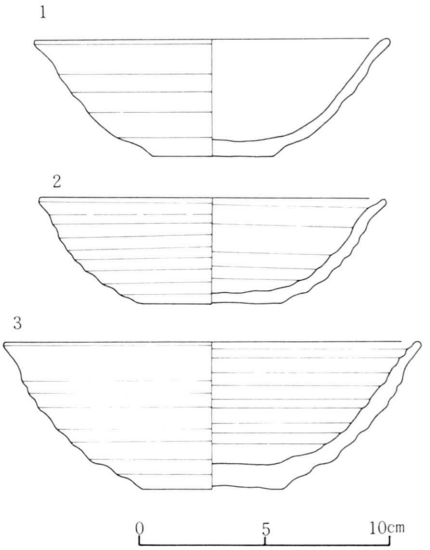
共伴遺物から平安時代の土壙３、中世墓壙１、時期不明土壙２とみられる。番号は通し番号を用いた。

19号（Ba20No２）土壙（第50図）

不整円形を呈し、開口部で65cm×72cm、底部35cm×32cm　検出面からの深さ31cmで壁は外傾し逆台形の断面である。埋土１層は焼土・炭化物を若干含む黒色土、２層も１層に類似するが焼土、炭化物がない、３層は黒色土を含む火山灰土、埋土中からＢ類坏片３点が出土した。

20号（Bc70No６）土壙（第50図　図版６）

Bc70区北西隅で９号住居跡の西側に隣接してある。不整楕円状で開口部180cm×103cm　底部131cm×77cm、検出面からの深さ36cmで、ゆがんだ逆台形状の断面を呈する。埋土は３層からなるが、主体は黒褐色土で、いずれも焼土と炭化物を若干含んでおり特に２層では浅黄色パミス（降下火山灰土）の層がみられるが分散することから流入と考える。３層では地山火山灰土が混る。また径30cm大以下の不整形の礫の集積が底面真上からあり、これらの礫下には多量のカヤの炭化物が認められたが底面、壁面に火熱を受けた様相はない。



第48図　20号土壙出土坏

遺物の出土は比較的多量で埋土２・３層を中心にする。Ａ類坏片２点、Ｂ類坏片５点、Ｃ類坏片６点土師器甕片13点と実測可能坏３個体（第49図１～３　図版14）が出土した。

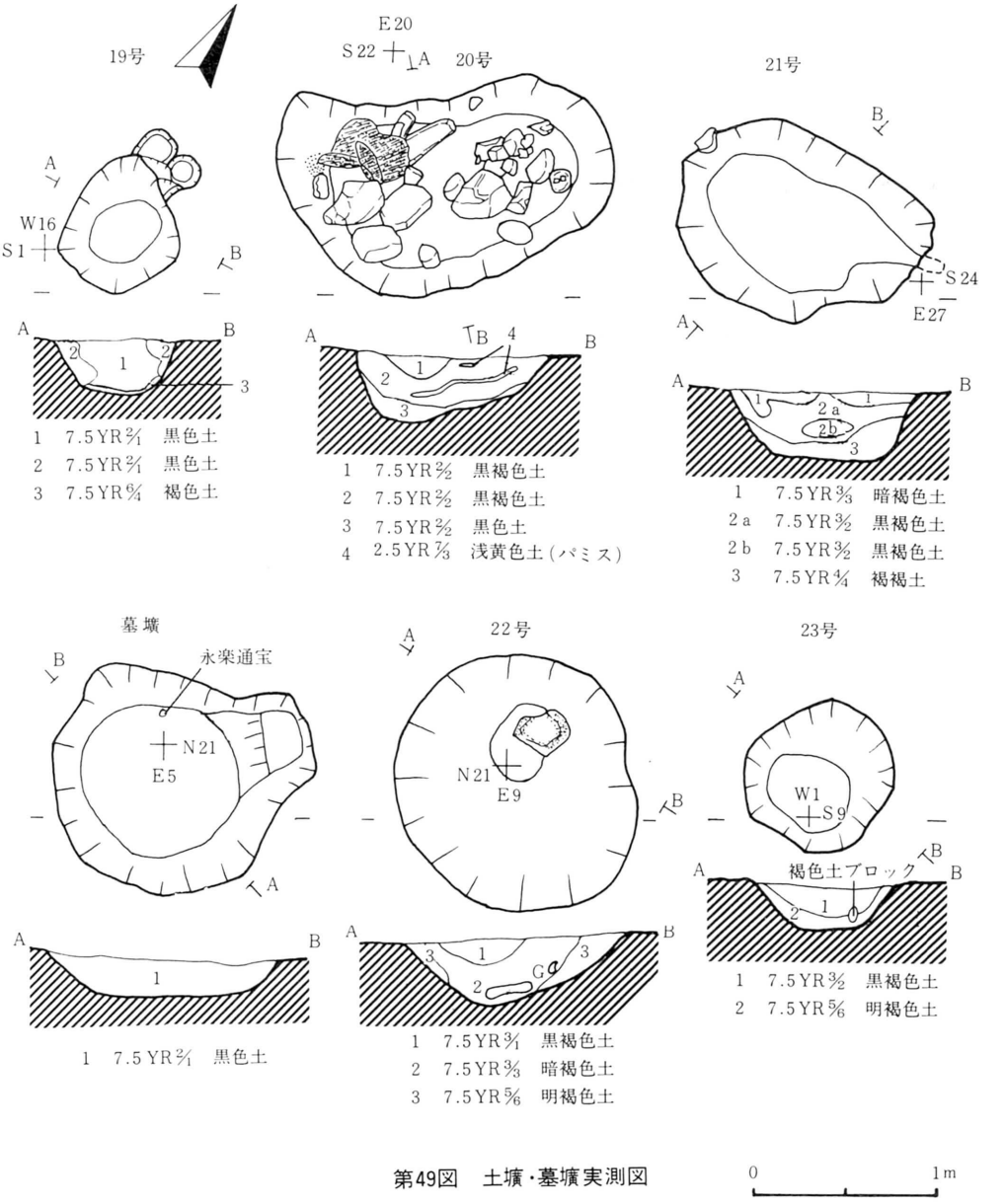
第49図１の坏は口縁部から体部へ約30％の残存で、推定口径14.2cm　底径５cm　器高4.6cmあり、体はやや丸味をもち口縁が外反する。内外面ともロクロナデ痕があり浅黄橙色を呈し、胎土に少量の石英を含む。底部回転糸切り無調整、B_3類に分類した。

２は完形の坏で、口径13.8cm　底径5.6cm　器高4 2cmあり、体はやや丸味をもち口縁は外反する。体外面のロクロ痕が明瞭で橙色を呈し、焼成良好で胎土に多量の小円礫を含む。底部は回転糸切り無調整、形態、焼成とも３の坏に類似する。B_4類とした。

3の坏は口縁から底部へ約30%の残存で、推定口径16.6cm　器高5.9cmあり、体はやや丸味をもち口縁は外反する。体外面のロクロ痕が明瞭であり、明赤褐色を呈し、焼成良好で胎土に小円礫を含む。底部は回転糸切り無調整。形態と焼成が2の坏と類似し、B_5類とした。

21号（Bc70No 4）土壙（第50図）

9号住居跡の北東隅と重複し、住居跡より新しい。不整楕円形で開口部138cm×107cm、底部90cm×66cm、検出面からの深さ37cmで、逆台形状に近い断面を呈する。埋土1層は火山灰土



第49図　土壙・墓壙実測図

に黒褐色土が混る攪乱土の可能性がある。2層は黒褐色土に火山灰土が混入、極少の炭化物を含むが、2_bは2_aに比し柔かく火山灰土が少ない。3層は火山灰土に若干の黒色土と極少の炭化物を含んでいる。埋土中から縄文土器の小破片35点とA・B類坏片各1点が出土した。

墓壙（Ac50No 2）（第50図　図版6）

不整円形で開口部141cm×119cm底部114cm×81cm、検出面よりの深さ20cmで、皿状の断面を呈し、埋土は黒褐色土に若干の火山灰を含む単層である。北縁底面から6枚重ねの永楽通宝が出土し、中世の墓壙である可能性が強い。

22号（Ac50No 1）土壙（第50図　図版6）

墓壙の北東約4mにあり、ほぼ円形で開口部128cm×138cm　底部41cm×41cmで検出面からの深さ37cmであり、半円状の断面を呈する。埋土1層は黒褐色土に炭化物と火山灰土を極少含み、2層は暗褐色土で焼土と火山灰土を若干と極少の炭化物を含み、3層は明褐色火山灰土に若干の黒色土が混る。共伴遺物はなく時期不明である。

23号（Ba10No 4）土壙（第50図）

ほぼ円形で開口部81cm×83cm　底部45cm×42cm、検出面からの深さ23cmあり、逆台形状の断面を呈する。埋土1層は黒褐色土に火山灰を若干含み、2層は明褐色火山灰土に部分的に黒色土を含む。共伴遺物はなく時期不明である。

4　古代・中世のまとめ

(1)　遺物について

歴史時代の遺物は、土器に集約され、他には22号土壙出土の永楽通宝がある。ここでは、遺構出土の土器についてその概要を述べる。なお、土器の特徴は各遺構の項で記述したので割愛する。計測値等は第4表にまとめた。

土器の器種は、坏、高台付坏、甕、盤等になるが、数的に坏が最も多い。しかし、遺存が50%以上のものは坏で5点、甕では1点のみである。したがって、大半は図上復元の資料になり、それによって概括するが、出土点数から坏・酸化焔焼成の甕のみを大雑把に分類する。

坏

分類　**焼成**　**A類**　還元焔焼成　いわゆる須恵器と呼ばれ、くすべ色を呈し硬質のもの。

B類　酸化焔焼成　赤褐色、土師質土器等と呼ばれ、赤褐色、黄橙色等の色調。

C類　酸化焔焼成で内面に里色処理を施すもの。いわゆる内黒土師器と呼ばれ、色調はB類と類似する。内面にヘラミガキ等の調整がある。

形態・技法　形態は器の大・小は加味せず、**口径に対する底径と器高の指数**によった。また、体の立ち上がりは、若干の丸味をもつものが大半であり、口縁も含め特徴的なもの以外は説明しない。調整・底部切り離し技法についても、

大半は**再調整なく、回転糸切り無調整**の**ロクロ使用**土器である。

A_1 類	還元焔焼成	底径指数42～45	器高指数30～35		
A_2 類	〃 〃	底面指数46	器高指数43	1類より外傾角度が急	
B_1 類	酸化焔焼成	底径指数64	器高指数25	器高低く、底径大、体は直に外傾	
B_2 類	〃 〃	底径指数36	器高指数39	摺鉢形 体は直に外傾	
B_3 類	〃 〃	底径指数34～35	器高指数32		
B_4 類	〃 〃	底径指数41～43	器高指数30～31		
B_5 類	〃 〃	底径指数28	器高指数39		
C_1 類	酸化焔焼成（内面黒色処理）	底径指数48	器高指数36	磨滅著しく切離し技法不明	
C_2 類	〃 〃	底径指数36	器高指数33		

以上、細分化したが、A類～C類まで用いた資料14点中の10点までは、底径指数34～45に、器高指数30～35に入る。これを出るのは、A_2類、B_1類、B_2類、C_1類に分類した4点である。この4点の器高に対する体の外傾度をみると34°～40°で、中でもA_2類、B_1類、C_1類は34°～37°になり、体の立ちが急になる。他では、ゆがみのある1点を除き、41°～45°に入るが、A類よりB・C類の開きが大きい傾向をもつ。[註(1)]

坏の年代 形態上で若干の差はあるにしても、成形技法上は各類とも一括し得る。すなわち、ロクロ使用で、各種とも底部回転糸切り無調整、C類のみ内面黒色処理上のヘラミガキ調整をみるが、他類では内外面とも再調整がない。

したがって、成形、切り離し技法上の進歩段階が、再調整→無調整・底部ヘラ切り→糸切りとの一般概念と、当地方で回転糸切り無調整の坏が主流をなすとされる10世紀代[註(2)]に比定できるが、共伴関係と類例からすると9世紀後半代も含むと解され、詳細は(2)項でふれたい。

甕・壺・高台付坏・盤

甕 図化資料は5点、いずれも酸化焔焼成で坏の分類を用いるとB類になり、ロクロ未使用をⅠ、ロクロ使用をⅡとし、長胴甕をa・他をb、最大径が胴部にあるものに′を付すと、

BⅠa類～1点、**BⅡá類**～3点、**BⅡb類**～1点であり、ロクロ使用の長胴甕はいずれも最大径が胴にあること、また各類とも、口縁部が短かく、口唇で上下または上方につまみ出すことが類似する。B類甕に対し、還元焔焼成のA類甕がある。平行叩き目・格子目状叩き目に代表される器面文様をもつ、いわゆる大甕の破片のみである。

壺 C類の広口壺1点、A類の壺（または甕）1点が出土した。

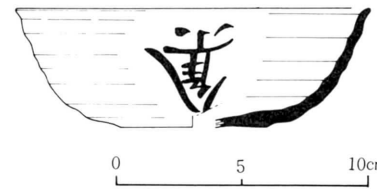
高台付坏・盤 いずれもB類で、各1点の出土である。

墨書坏 2点出土した。1点は5号住居跡出土のA類坏（第36図1 図版12）で、「宍」又は

第 4 表　遺構出土遺物観察一覧表

項目 / 遺構	種別	図版	分類記号	底部切り離し	調整 部位	調整 技法	焼成	胎土	色調	口径値 cm (a)	底径値 cm (b)	器高 cm (c)	b／a × 100	c／a × 100	外傾角度 (o)	登録番号	備考	
3 号住 (Ad10住)	坏		B4	回転糸切り			不良	石英少量 小円礫多量	7.5YR 8/4 浅黄橙	(14.8)	6.4	4.4	43	30	45	37a－1	反転	
4 号住 (Ae10住)	坏		A1	回転糸切り			普通	砂粒	5Y 5/1 灰・5YR 6/4 にぶい橙	(15.8)	7.0	4.8	44	30	42.5	44－44	反転	
	坏（内黒）		C1	不明			〃	石英多量	7.5YR 7/4 にぶい橙	(13.4)	(6.4)	4.8	48	36	37	44－45	〃	
5 号住 (Ae20住)	坏		A2	回転糸切り			良好	小円礫有	2.5Y 5/1 黄灰	(12.6)	(5.8)	5.4	46	43	34	45－1	〃	
	坏		B4	〃			普通	石英多量 小円礫有	10YR 8/3 浅黄橙	(15.2)	(6.4)	4.7	42	31	44.5	45－2	〃	
	坏		B1	〃			〃	石英多量 雲母少量	5YR 6/6 橙・5YR 7/4 にぶい橙	(11.0)	7.0)	3.1	64	28	35	45－3	〃	
	坏		A1	〃			良好	小円礫有	5Y 5/1 灰	13.8	6.2	4.4	45	32	42	48－1		墨書
	坏		A1	〃			〃	石英微量 小円礫有	2.5Y 7/2 灰黄	(14.2)	6.0	5.0	42	35	41	48－2	反転	
6 号住 (Ba30住)	甕		B I a	不明	口縁 体部 外面底部	横ナデ 刷毛目 ヘラナデ	普通	石英・雲母 小円礫有	2.5YR 5/8 明赤褐	23.8	7.8	(29.3)	33	(123)		60－1	〃	
7 号住 (Ba50住)	甕		B II á	欠損			普通		5YR 7/4 にぶい橙	20.0		(7.3)				67－12	反転	
	甕		B II á	不明	内面体部 外面体部	刷毛目 ヘラケズリ	やや不良	石英・雲母 小円礫多量	10YR 明黄褐	18.2	10.2	29.6	56	163		68－2	〃	
	甕または壺		A	〃	外面体部 内面口縁	ヘラケズリ	良好	石英・雲母有 小円礫多量	5Y 5/1 灰		7.8	(11.3)				69－14	〃	
	壺		C	〃	内面口縁	ヘラミガキ	普通	石英少量	1.5YR 7/2 明褐灰	15.2		(7.0)				69－15	〃	
	盤		B	欠損			やや不良	石英少量 金雲母微量	10YR 7/4 にぶい黄橙	38.6		(7.4)				70－2	〃	
9 号住 (Bc70住)	坏		B2	回転糸切り			普通	石英・小円礫多量 金雲母微量	7.5YR 7/4 にぶい橙	14.2	5.4	5.5	38	39	40	91－13		
	高台付坏		B	〃			〃	石英微量	7.5YR 8/3 浅黄橙	(17.0)	(6.6)	4.2 (台1.1)	39		51	92－3	反転	
	坏（内黒）		C2	回転糸切り	内面底部	ヘラミガキ	普通	石英・雲母微量	10YR 7/4 にぶい黄橙	(16.6)	(6.0)	5.5	36	33	44	92－14	〃	
	甕		B II b	ケズリ調整痕により不明	内面の体部下半 外面体部	刷毛目 ヘラケズリ	〃	石英少量	5YR 7/4 にぶい橙・5YR 5/2 灰褐	18.8)	8.0	18.5	43	98		92－1		
	坏		B3	回転糸切り			やや不良	石英微量 小円礫多量	5YR 7/6 橙・7.5YR 8/3 浅黄橙	(15.2)	(5.2)	4.8	34	32	52	92－2	反転	
	甕		B II á	欠損	外面体部	ヘラケズリ	普通	石英・小円礫多量	2.5Y 8/3 淡黄	23.8		(15.0)				93－8	〃	
20号土壙	坏		B3	回転糸切り			〃	石英少量	7.5YR 8/3 浅黄橙	(14.2)	5.0	4.6	35	32	46.5	95－3	〃	
	坏		B4	〃			良好	小円礫多量	5YR 6/6 橙	13.8	5.6	4.2	41	30	46.5	95－1		
	坏		B5	〃			〃	石英・雲母少量	5YR 5/6 明赤褐	(16.6)	5.8	5.9	35	36	44	95－2	反転	

「宋」の墨書が底部にあり「宋」か。いま1点は遺構外出土のA類坏（第50図　図版14）である。遺存は約40％で推定で口径・底径は14cm・6cmで、器高4.7cm、ロクロ成形で、体はやや丸味みもって外傾し、底部回転糸切り無調整で内外面とも灰色を呈する。体外面に下端を天とする文字（第50図）があり、上に「宀」の不明文字、下に「集」？の二字の可能性がある。



第50図　遺構外出土　墨書坏

註(1)　この傾向は、紫波町上平沢新田遺跡における様相とは逆である。上平沢新田では、B・C類坏の大半は42°以下、本調査区では以上になり、数値的に本調査区のB・C類坏は外傾度が大きい。一方本調査区のA類坏は42.5°以下である。上平沢新田遺跡「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書」―Ⅲ―岩手県教育委員会　日本道路公団

(2)　下羽場遺跡「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書」―Ⅰ― 岩手県教育委員会　日本道路公団
伊藤　博幸　岩手県の古代土器生産について―須恵器とロクロ土師器の素描―「岩手史学研究」№61

(2)　遺構について

竪穴住居跡

3号～10号竪穴住居跡の8棟が、歴史時代のものである。削平によって、床面を残すのみで全容は捉え得ない。

〔規模〕　計測または推測できるのは、4号・7号・8号・9号住居跡で、各々4.1m×3.8m・2.8m×2.7m・3.5m×3.3m・3m×4.2mで、9号住居跡が長方形で他は正方形に近い。一辺3m～4mの規模に包括される。

〔床〕　3号・4号・6号・8号・10号住居跡では、一担地山を掘りこんで後、一定面まで構築土を埋めて叩き込む手法を用い、7号・9号住居跡では、地山面を活用、5号住居跡では不明である。総じて、構築土によって床面をつくっている。

〔かまど〕　明らかにかまどの痕跡をとどめるのは、7号住居跡のみで、右袖の一部と燃焼部を認めるが、煙道等は不明で遺存状況は良くない。なお、南壁西端に位置する。3号・5号・6号・8号・10号住居跡で現地性の焼土を認めた。3号住居跡を除き、いずれかの壁寄りに位置するが、かまどとの関係は不明である。9号住では本来的になかった可能性も強い。

〔柱穴その他〕　各住居跡からピットが検出されているが性格は不明であり、柱穴、その他の施設と断定できるものはない。

〔共伴遺跡〕　各住居跡の出土遺物は量的に少ないが、破片数は下表にまとまる。

類／住	坏			甕		類／住	坏			甕	
	A	B	C	A	B		A	B	C	A	B
3　号　住		3	2		4	7　号　住	13	11	8	3	29
4　号　住	6	7	6	4	37	8　号　住	1	4			7
5　号　住	11	10	10	1	51	9　号　住	4	36	4	8	43
6　号　住	10	1	4	5	8	10　号　住					6

上の表から絶対量の少ない3号・8号・10号住居跡を除き、坏・甕に関しては焼成分類上の各類を伴出している。

次に、復元・図化した遺物について分類記号を用いて整理すると次のようになる。

	坏	高台付坏	盤	甕	壺
3 号 住	B4				
4 号 住	A1 C1				
5 号 住	A1 A2 B1 B4				
6 号 住				BⅠa	
7 号 住			B	BⅡá	A C
9 号 住	B2 B3 C2	B		BⅡá BⅡb	

以上から土器の組成を見出すとするなら、器種の比較的偏在しない9号住居跡に求めることができる。次いで5号住居の坏、7号住居跡の盤・甕・壺に求めることができよう。また住居跡の相関を求めると、A_1類から①4号＝5号住居跡、B_4類から②3号＝5号住居跡となり、①と②から3号＝4号＝5号住居跡となる。一方、BⅡa′から③7号＝9号住居跡がなりたつし、坏の成形技法を主眼にするならば、回転糸切り無調整を主流とすること、一部住居跡を除き、破片ではあるが各類を共伴すること等から、極少の資料からで危険ではあるが、各住居跡は近似の年代に存在したものと推定される。

〔住居跡の年代〕　9号住居跡の土器組成は、坏A類（破片）・B類（B_2・B_3）・C類（C_2）高台付坏B類・甕BⅡ類（BⅡa′・BⅡb）となる。これに類似するあり方は、宮地遺跡[註(1)]の第Ⅲ群で①酸化焔焼成の回転糸切り無調整で内黒の坏（BⅠa類）・②黒色処理のしない坏（BⅢ類）、③酸化焔焼成で口径より器高が大きな甕（BⅠ類）を中心に構成、④それに①に再調整を加えた坏（BⅠc）と⑤酸化焔焼成で内面黒色処理の高台付坏（BⅠ類）、⑥黒色処理のない高台付坏（BⅢ類）を共伴するものもある[註(2)]。

宮地遺跡第Ⅲ群を9号住居跡の遺物と対応すると、坏は①＝C類・②＝B類、甕は③＝BⅡ類、高台付坏は⑥＝高台付坏B類となり、ほぼ見合う対応をする。しかも、回転糸切り無調整の還元焔焼成の坏（BⅡ類）の混入もあるとしており、9号住居跡にA類坏片を共伴することと矛盾しない。遺跡や住居跡のもつ性格から土器所有の差異が考えられるし、量的比率の差異もあり得るであろうが、大筋で9号住居跡の土器セットは、宮地遺跡の第Ⅲ群と似ると言える。

宮地遺跡では第Ⅲ群土器を伴出する遺構群を第Ⅲ期に設定し、その年代を9世紀後葉から10世紀中葉にかかる[註(4)]としている。また坏の成形上の技法から、回転糸切り無調整が主流をしめる10世紀代とすることと関連しながら、土器のセット関係を加味すると、本調査区では再調整を施す坏は知見できず、還元焔焼成の坏が比率的には相当ある。したがって、いわゆる須恵器坏が衰退する[註(1)]11世紀以前に比定される。以上から、本調査区の住居跡を共伴遺物と、他遺跡の類例から総合したとき、9世紀末から10世紀代に比定されるものと考える。

土壙と墓壙

19号・20号・21号土壙は出土遺物から平安時代に比定したが、19号・21号については埋土中からの出土であって必ずしも断定できないし、性格、機能も不明である。

20号土壙はB_3類・B_4類・B_5類の坏が各１個体とA・B・C類の坏片およびB類甕片が比較的多量に埋土２・３層から出土しており、特に３層からの出土は底面直上であって、住居跡同様の年代に比定できる。また埋土２層中のパミス（降下火山灰土）は分散して含まれることから流入したものと推察される。また、礫、カヤの炭化物等が認められ特異な様相を呈するが性格、機能とも不明である。

22号墓壙は、６枚の永楽通宝いわゆる六文銭の出土があり、中世墓壙である。当台地には第Ⅶ区北に隣接し14基の古墓があり調査の結果[註(5)]、土葬墓と火葬墓があり、土葬墓の１号、火葬墓の５・６・８号墓から永楽通宝が出土している。本遺構は第Ⅶ区北の古墓と関連するものとみられ、削平地にも遺構が存在した可能性がある。

註(1) 宮地遺跡 「東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書」－Ⅳ－ 岩手県教育委員会 日本国有鉄道盛岡工事局

(2) 前掲(1)報告書 〔２〕出土土器の分類Ｐ312～Ｐ320 〔３〕住居跡における土器のあり方〔第Ⅲ群〕

(3) 前掲(1)報告書 〔６〕遺跡の年代Ｐ338

(4) 伊藤博幸 岩手県の古代土器生産について－須恵器とロクロ土師器の素描－「岩手史学研究」 第61号、1976
岡田茂弘 桑原滋郎 多賀城周辺における古代坏形土器の変遷 「宮城県多賀城跡研究紀要－１－」1974

(5) 菊池啓次郎 梅木古墓群 「和賀町史」 和賀町 昭和52年

II まとめ

本調査区での検出遺構・遺物からみて、縄文、平安、中世の時代に人間生活の営みの場として捉えられる。

縄文時代は、竪穴住居跡2棟と、性格不明であるが多くの土壙・遺物が検出されたが、縄文土器は、1・2類＝大木7b、3類＝大木7b～8a、4類a・b＝大木7b、4類c＝大木7b～8a、5類a・b＝大木7b、5類c＝大木7b～8a、5類d・e＝大木8a、6類＝大木8a、7類＝大木7b、8類＝大木8a、9類＝大木7b～8aのように比定され、数量的には4類と5類が多く、特に4類C、5類d・eと、大木8aもしくはそれに近いものの比率が高い。

遺物、遺構の分布は、調査区西北のAb10・20区、Ac10・20区に集中し、以東では稀薄になり西方約50mの第VII区に、住居跡、および本調査区と同類の土器が検出されておることから、本調査区の西北郡から第VII区への台地縁辺部は、縄文中期前半に比定される一連の集落跡であった可能性が強い。なお、第VII区に比し、5類a・5類cの出土量が少ない。

平安時代は、供伴遺物から推察すると、9世紀末から10世紀代と考えられるが、出土資料が比較的少量であり、しかも、削平によって住居跡の破壊が著しいことから、類推で問題も残るが大筋で前述の年代観を与えた。

住居跡構造の中で、かまどを確認できたのは1棟のみで、他は焼土の確認しかなく問題を残す。特に検出住居跡の中では比較的壁の遺存度が高く、遺物をセットでみられる9号住居跡で確認できなかったことは課題である。

この期の遺構検出地区では縄文時代の遺物・遺構が稀薄になることは前述の通りであり、第VI区の住居跡との関連を考えることができるが、間に位置する第V区では平安期の遺構遺物の検出は全くなく、集落の占地に間隔があったかとも思われる。

中世墓壙は、第VII区北の古墓群との関連は副葬遺物から断定できるもので、台地北縁の西部分は一連の墓群地域であったと思われる。この墓群が岩崎城と関連するものか[註(1)]検討に値するものである。

註(1) 菊池啓次郎 梅木古墓群 「和賀町史」 和賀町 昭和52年

第　V　地　区

第 V 地 区

I 検出された遺構と遺物

本調査区は、当初調査地区としての対象外であったが、I～IV区調査中に遺構の存在が確認され急遽調査対象となりIV地区東（仮）として調査を進めたが、本報告ではV地区とした。

検出遺構はすべて土壙で54基を教える。これらの土壙は1例を除き、平面形が円もしくは楕円に近く径70cm～100cm前後、浅い皿状の断面形を呈するものに集約される。調査区全域における遺物の出土は、土壙内の2例のみで他は全くない。各土壙の計測値は第1表の通りである。

土 壙

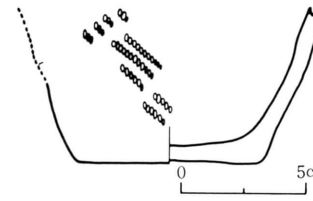
1号（Ab011P）土壙（第3図　図版1）

ほぼ円形で壁は外傾し皿状の断面を呈する。埋土の主体は1層で、若干の火山灰土と極少の炭化物、及び大豆大の礫を全般に含む黒褐色土である。2層は黒色土と大豆大の礫を若干混入する褐色火山灰土である。遺物の出土はない。

2号（Ab012P）土壙（第3図　図版1）

円形で壁は下半でやや外傾し上はほぼ直に立ち盥（たらい）状の断面をもつ。底は平坦で、11cm×22cmの長い川原石1個を認めた。埋土は4層からなり、1層の暗褐色土は火山灰土を含み、2層は火山灰土に暗褐色土が若干混入、3層は黒褐色土に火山灰土と指頭大の礫を若干混入、4層は褐色火山灰土に黒褐色土と大豆大の礫を若干混入する。

埋土2層中から縄文土器鉢の下半部分（第1図　図版3）1個体の出土がある。単節R－L斜行縄文で外面灰褐色を呈し、内面に横ミガキ調整がある。



第1図　2号土壙出土土器

3号（Ab013P）土壙（第3図）

不整円形で、壁はやや外傾もしくは直に近い状況で皿状の断面を呈し、底面はほぼ平坦である。埋土1層は暗褐色土で火山灰土を含み、2層は褐色土で火山灰土に暗褐色土を混入する。1層は後の攪乱の可能性もあり、埋土は2層を主体に考えられる。遺物は共伴しない。

4号（Ab014P）土壙（第3図　図版1）

ほぼ円形、壁はやや外傾し皿状の断面を呈し、底は平坦である。埋土1層は暗褐色土に火山灰土を含み、2層は黒褐色土に火山灰土と指頭大の礫を若干混入し埋土の主体をなし、3層は壁際に入り火山灰土に黒褐色土と大豆大の礫を混入する。共伴する遺物はない。

5号（Ab015P）土壙（第3図）

北半が攪乱破壊をうけた可能性があり、現状は不整円形、壁は外傾し皿状の断面を呈し、底面は北側で攪乱をみるがほぼ平坦である。埋土１層は黒褐色土に若干の火山灰土と極少の炭化物を含みパサパサしており、２層もパサパサし粘性に乏しい暗褐色土で火山灰土と大豆大の礫を含む。１・２層は南半で薄くなり後の攪乱土ともみられる。３層は明褐色火山灰土に暗褐色土が混在し小礫を若干含む。共伴遺物はない。

６号（Ab016P）土壙（第３図）

楕円状で、壁は底から大きく外に開きボール状又は半円状の断面を呈し、底は南半に深くなる。埋土１層は黒褐色土に火山灰土と大豆大の礫を若干含む。２層は褐色火山灰土に若干の黒褐色土と大豆大の礫を含む。共伴遺物はない。

７号（Ab017P）土壙（第３図　図版１）

ほぼ円形、壁はやや外傾し皿状の断面を呈し、底面はほぼ平坦に近い。埋土１層は黒褐色土に若干の火山灰土が混入、２層は暗褐色土で黒色土と火山灰土の混合、３層は褐色火山灰土に黒色土を含む。共伴遺物はない。

８号（Ab018P）土壙（第３図）

楕円形の南半は削平されている。壁は外傾し皿状の断面を呈し、底面はほぼ平坦に近い。埋土１層は黒褐色土で若干の火山灰土が粒状に含まれ、２層は黒褐色土に火山灰土を多く含む。共伴遺物はない。

９号（Ab019P）土壙（第３図）

南西半で攪乱破壊の可能性があり、現状は不整円形で、壁は外傾し皿状の断面を呈する。底面は北半で若干落ちこみ、25cm×10cm大以下の川原石が数個散在する。埋土１層は褐色土で火山灰土と黒褐色土がまだら状に混在する攪乱層である。２層は黒褐色土に火山灰土が粒状及びブロック状に若干入り、３層の褐色火山灰土に黒褐色土混入となる。共伴遺物はない。

10号（Ab021P）土壙（第４図　図版１）

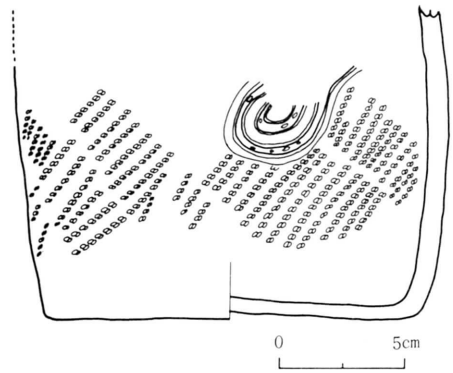
円形で、壁は外傾し断面は皿状を呈し平坦な底面である。埋土１層は黒褐色土に若干の火山灰土が粒状に混り、２層は褐色火山灰土に黒褐色土がまだら状に混入、大豆大の礫を若干含んでいる。共伴遺物はない。

11号（Ab501P）土壙（第４図　図版１）

南半は攪乱破壊の可能性もあり、現状は不整円形で、壁はやや外傾し盥状に近い断面を呈する。埋土１層は黒褐色土に若干の火山灰土が粒状に含まれ、極少の炭化物がある。２層は褐色火山灰土を主体に黒褐色土の混入をみる。

この埋土２層上面の１層中から上半を欠く鉢（第２図　図版３）１個体分が、正位にあり東側に支えらしい川原石があって、意図的設置の可能性が強くある。土器は鉢の下半を遺存し、

遺存部の器高は12.3cm、胴部径17.2cm、底部径15cmあり、R－L－Rの複節斜行縄文に渦巻状の沈線を一部 認める。外面は橙色、内面に横ミガキ調整がある。 大木8a に比定されるかと推察する。



第２図　11号土壙出土土器

12号（Ab502P）土壙（第４図　図版１）

不整円形、壁はやや外傾し皿状の断面を呈し、埋土１・３層はそれぞれ11号土壙の１・２層に類似し、２層は１層より多くの火山灰土を含む褐色土である。共伴遺物はない。

13号（Ab503P）土壙（第４図　図版１）

ほぼ円形で壁は内湾状で下半は奥に抉りこまれた浅い袋状の断面を呈する。埋土１層は黒褐色土に若干の火山灰土を粒状に含み、２層は褐色土で１層より火山灰をやや多く含む。３層は褐色火山灰土で黒褐色土が混入し大豆大の礫を若干含む。色相・土性は１・３層が11号土壙の１・２層に２層が12号土壙の２層にそれぞれ類似する。共伴遺物はない。

14号（Ab504P）土壙（第４図　図版１）

円形、壁はやや外傾するが盥状又は浅いビーカー状の断面を呈し、底面はほぼ平坦で、11cm×30cm以下の長形の川原石が中央付近に集中してある。埋土１層は黒褐色土で若干の火山灰土を粒状に含み11号土壙１層と類似、２層は褐色土で１層より火山灰土が多い。共伴遺物はない。

第15号（Ab505P）土壙（第４図）

円形で、壁はやや外傾するが盥状又は浅いビーカー状の断面で、底面はほぼ平坦となる。埋土１層は11号土壙１層と類似するが、大豆大の礫を若干含み、２層は12号土壙の２層、３層は11号土壙の２層と類似している。共伴遺物はない。

16号（Ab506P）土壙（第４図）

不整円形で、壁は北側で下端を奥に抉りこみ、他は大きく外傾する。底面はほぼ平坦である。埋土の１層は黒褐色土に若干の火山灰土を粒状に含み11号土壙１層と類似するが、径４cm×５cmほどの礫を含む。２層は褐色土で１層より火山灰土を多く含み極少の炭化物がある。３層は褐色火山灰土で黒褐色土が混る。共伴遺物はない。

17号（Ba501P）土壙（第４図　図版２）

ほぼ円形で、壁は外傾し、皿状の断面を呈し、底面は平坦で長径15cm大の川原石３個が認められた。埋土１層は黒褐色土で若干の火山灰土がブロック状にと礫の混入がある。２層は壁際に少量あるのみで、褐色火山灰土に黒褐色土が混入したものである。共伴遺物はない。

18号（Ba011P）土壙（第４図）

円形、壁の中端が奥に入り浅い袋状の断面を呈し、底面はほぼ平坦である。埋土は２層からなり、１層は黒褐色土に火山灰土がブロック及びまだら状に若干混入し、極少の炭化物を含み、２層は褐色火山灰土に黒褐色土が若干混り、大豆大の礫を含んでいる。共伴遺物はない。

19号（Ba021P）土壙（第５図）

ほぼ円形で、壁は直に近く立ち浅いビーカー状の断面を呈する。底面は木根により攪乱をうけているが、本来はほぼ平坦に近いものと推察する。埋土の１層は黒褐色土で若干の火山灰土を含み、植物毛根が多い。２層は褐色火山灰土に黒褐色土が混入する。共伴遺物はない。

20号（Ba022P）土壙（第５図）

楕円形に近く、壁は外傾し皿状の断面を呈し、底面はほぼ平坦である。埋土１層は19号土壙１層に類似するが植物根はなく、２層は汚れた褐色火山灰土である。共伴遺物はない。

21号（Ba502P）土壙（第５図　図版２）

円形で、壁は外傾し皿状の断面を呈し、底面はほぼ平坦である。埋土１層は黒褐色土に火山灰土のブロックと大豆大の礫が若干と炭化物を極少含む。２層は褐色火山灰土に黒褐色土と小礫を若干含んでおり、共伴遺物はない。

22号（Bb502P）土壙（第５図　図版２）

不整円形、壁は外傾し、皿状の断面を呈する。底面は緩傾斜で中央付近へ深くなる。埋土は１層のみで、黒褐色土に径５cm大以下の礫をかなり多く、植物根若干と炭化物を極少含む。共伴遺物はない。

23号（Bb501P）土壙（第５図）

不整円形で、壁は外傾し皿状の断面を呈し、底面は平坦である。埋土１層は黒褐色土に礫を含む。壁際の２層は褐色火山灰土に若干の黒褐色土と礫を含んでいる。遺物の共伴はない。

24号（Bb503P）土壙（第５図）

削平が著しく、現状は不整楕円状で、壁は外傾し皿状の断面を呈し、底面はやや凹凸がある。埋土は黒褐色土の１層に多量の礫を含み植物根もある。２層もかなり多くの礫がある褐色火山灰土に黒褐色土の混入したものである。遺物の共伴はない。

25号（Bb504P）土壙（第５図　図版２）

ほぼ円形で、壁は外傾し皿状の断面を呈す。底面はやや凹凸があり、長径20cm内外の川原石数個が認められた。埋土は１層のみで黒褐色土で24号土壙の１層に類似する。共伴遺物はない。

26号（Bb505P）土壙（第５図　図版２）

上部削平が著しく、現状は不整円形で、皿状の断面を呈し、底面はほぼ平坦で長径20cm大以下の川原石を数個認めた。埋土は褐色火山灰土に若干の黒褐色土とかなり多くの小礫を含む１

層のみである。遺物は共伴しない。

27号（Bb506P）土壙（第5図　図版2）

ほぼ円形、壁は下端で奥に抉りこまれ浅い袋状の断面を呈し、底面はほぼ平坦である。埋土1層は黒褐色土で礫を多く含み、24号土壙1層に類似する。2層は褐色火山灰土に若干の礫があり、3層では褐色火山灰土に黒褐色土と礫が若干混入する。遺物の共伴はない。

28号（Bb507P）土壙（第6図　図版2）

不整円形で、壁はやや外傾するが盥状の断面を呈し、底面はほぼ平坦であり、やや浮いているが30cm×45cmの長方形で扁平な川原石が中央に認められる。埋土1層は黒褐色土に極少の火山灰土が混入し、若干の礫を含む。2層は褐色火山灰土に若干の黒褐色土と礫を含んでいる。遺物の共伴はない。

29号（Bb605P）土壙（第6図）

不整の楕円で、壁は外傾し、皿状の断面を呈し、底面はほぼ平坦である。埋土の主体は1層で黒褐色土に黄褐色火山灰土のブロックを全般に含み、極少の炭化物をもっている。壁際の2層は褐色火山灰土に黒褐色土の混入したものである。共伴遺物はない。

30号（Bb606P）土壙（第6図）

上部削平が著しい、楕円状の平面形で、浅皿状の断面を呈する。埋土1層は黒褐色土に若干の火山灰土を含み、2層は29号土壙2層と類似する。共伴遺物はない。

31号（Bb607P）土壙（第6図）

ほぼ円形で、壁は外傾し皿状の断面を呈し、底面は平坦である。埋土の1層は黒褐色土に粒状の火山灰土を若干含み、2層は褐色火山灰土に黒褐色土が混入する。共伴遺物はない。

32号（Bb608P）土壙（第6図）

隅丸方形に近く、壁はやや外傾し盥状に近い断面を呈し、底面は平坦である。埋土1層は黒褐色土に黄褐色火山灰土を全般にブロック状に含み、極少の炭化物をもつ。2層は汚れた褐色火山灰土である。共伴遺物はない。

33号（Bb609P）土壙（第6図　図版2）

円形で、壁は外傾し皿状の断面を呈し、底面はほぼ平坦である。埋土は1層が主体で、1・2層とも32号土壙1・2層にそれぞれ類似する。共伴遺物はない。

34号（Bb6011P）土壙（第6図）

不整円形で、壁は直に近く立ち盥状の断面を呈し、底面は若干の凹凸があり、中央に25cm×30cmの円形で扁平な川原石を認めた。埋土1・2層は24号土壙の1・2層埋土にそれぞれ類似する。共伴遺物はない。

35号（Bb6012P）土壙（第6図　図版2）

円形で、壁は直に近く立ち盥状の断面を呈し、底面は若干の凹凸があり、中央に径25cm×30cm大の円形で扁平な川原石を認めた。埋土１・２層は24号土壙の１・２層埋土にそれぞれ類似する。共伴遺物はない。

36号（Bb701P）土壙（第６図）

不整円形で、壁はやや外傾するが、盥状の断面で底面は多少の凹凸がある。長径20cm内外の川原石10個ほどを土壙内中央に集積して認めた。埋土１層は黒褐色土に火山灰土がまだら状に若干と極少の炭化物が混入、２層は褐色火山灰土に黒褐色土が若干混入する。共伴遺物はない。

37号（Bb702P）土壙（第７図　図版３）

不整円形で、皿状の断面を呈し、底面はほぼ平坦で、径15cm内外の川原石を数個認めた。埋土１・２層は36号土壙と類似する。共伴遺物はない。

38号（Bb801P）土壙（第７図）

円形で、壁北半は中端で奥に入り、南半はやや外傾し盥状に近い断面となる。底面はほぼ平坦である。埋土の１層は黒褐色土に火山灰土、礫、炭化物が若干混入、２層は暗褐色土に火山灰土、礫を若干、３層は褐色火山灰土に黒褐色土と小礫が若干混入する。遺物は共伴しない。

39号（Ca801P）土壙（第７図）

ほぼ円形で、壁は外傾し皿状の断面を呈し、底面はほぼ平坦である。埋土１層は黒褐色土に火山灰土や小礫を若干含み、２層は汚れた褐色土である。共伴遺物はない。

40号（Ca701P）土壙（第７図）

ほぼ円形で、壁は西縁下端で一部奥に抉りこむが、他は外傾し皿状の断面を呈し、底面は平坦である。埋土１層は黒褐色土に火山灰土若干と極少の炭化物を含む。２層は火山灰土に黒褐色土と小礫を含む。共伴遺物はない。

41号（Ca601P）土壙（第７図　図版３）

ほぼ楕円状で、壁はほぼ直に近く立ち、盥状又は浅いビーカー状の断面を呈し、底面は平坦で中央に長径15cm大の川原石数個を認めた。埋土１層は黒褐色土、２層は褐色土で、色相・土性は35号土壙１・２にそれぞれ類似する。共伴遺物はない。

42号（Ca602P）土壙（第７図）

ほぼ円形で、壁はやや外傾ぎみであるが、盥状の断面に近い。底面にやや凹凸がある。埋土１層は黒褐色土に若干の火山灰土と炭化物を含み、壁際の２層は褐色火山灰土である。共伴遺物はない。

43号（Ca603P）土壙（（第７図）

円形で、壁は下端で奥に抉りこまれ浅い袋状の断面を呈する。埋土は記録なく不明であり、共伴遺物はない。

44号（Ca501P）土壙（第７図）

削平が著しく、現状は不整円形で、浅皿状の断面を呈している。径13cmで長さ45cmの円筒状の川原石を東縁に認めた。埋土は記録なく不明。共伴遺物はない。

45号（Bb011P）土壙（第７図）

楕円形、壁は外傾し皿状の断面を呈し、底面は平坦である。埋土１層は黒褐色土に全般に粒状の火山灰土を含む。２層は黒褐色土と火山灰土混土の暗褐色土。３層は黒褐色土を若干含む火山灰土。共伴遺物はない。

46号（Bb012P）土壙（第８図）

不整形で、木根攪乱もあり人為的土壙でない可能性もある。逆台形に近い断面を呈する。埋土１層は黒褐色土に粒状の火山灰土を全般に含み粘性に乏しい。２層は暗褐色火山灰土である。共伴遺物はない。

47号（Bb013P）土壙（第８図）

削平が著しく辛じて遺存する。不整円形で、底面は平坦で浅皿状の断面を呈する。埋土１層は黒褐色土。２層は暗褐色土で、45号土壙１・２層とそれぞれ類似する。共伴遺物はない。

48号（Bb014P）土壙（第８図　図版３）

不整楕円形で、南北壁は中端で奥に若干入り断面が袋状を呈し、東西断面は浅いビーカー状となる。底面はほぼ平坦で、中央近くに径10cm～20cm大の川原石が10数個集積する。埋土１層は黒褐色土に粒状の火山灰土を含み、２層は黒褐色土と火山灰土の混土、３層は暗褐色土であり、共伴遺物はない。

49号（Bb015P）土壙（第８図　図版３）

楕円形で、壁は外傾し皿状の断面を呈し、底面は平坦である。埋土１層は48号土壙１層に、２層は45号土壙２層に類似し、３層は暗褐色土に若干の火山灰土を含む。共伴遺物はない。

50号（Bb016P）土壙（第８図）

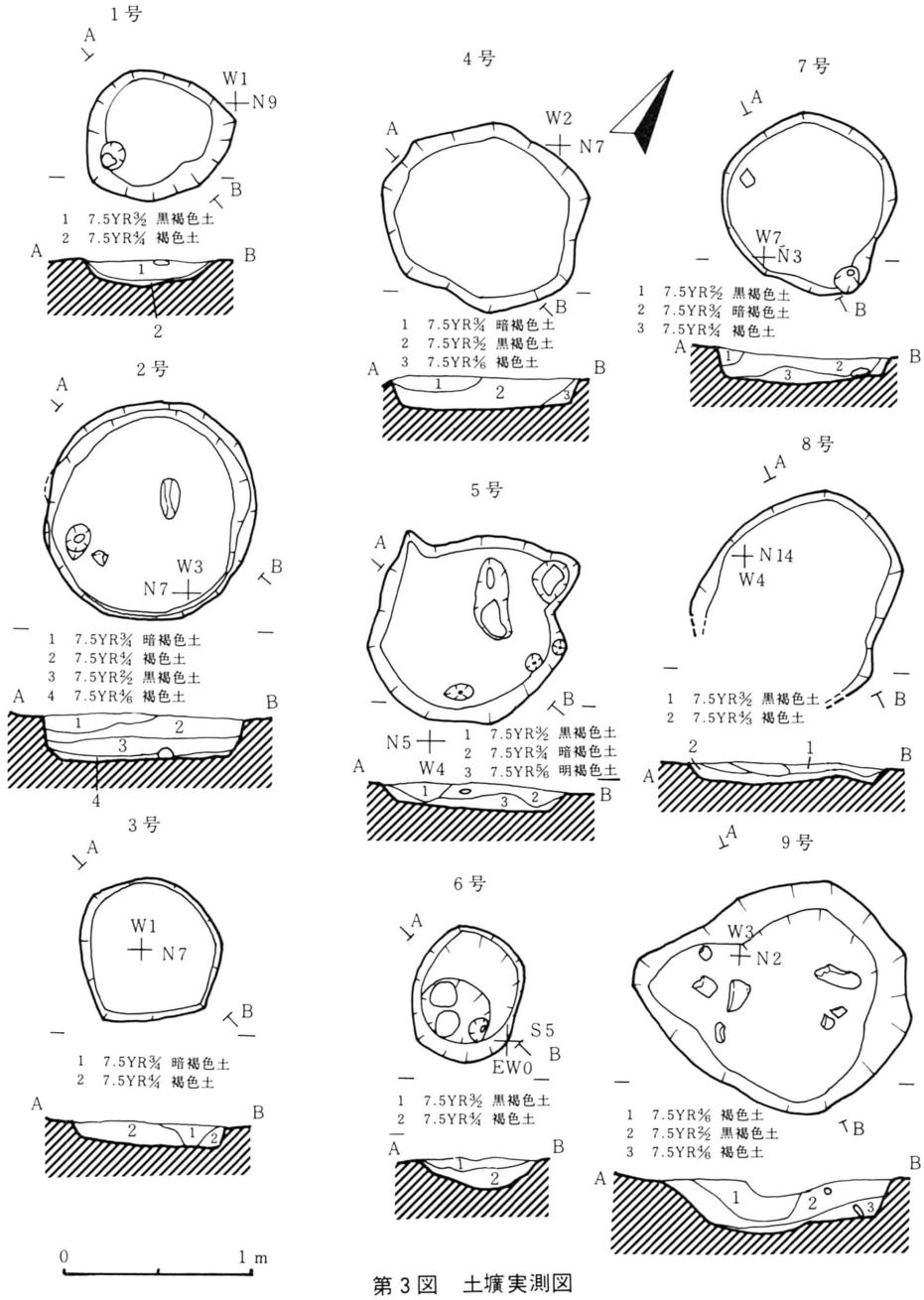
不整円形で、壁は外傾し皿状の断面を呈し、底面は平坦である。埋土１・３層は45号土壙１・３層にそれぞれ類似し、２層は褐色火山灰土に暗褐色土がまだら状で全般に含む。共伴遺物はない。

51号（Bb017P）土壙（第８図　図版３）

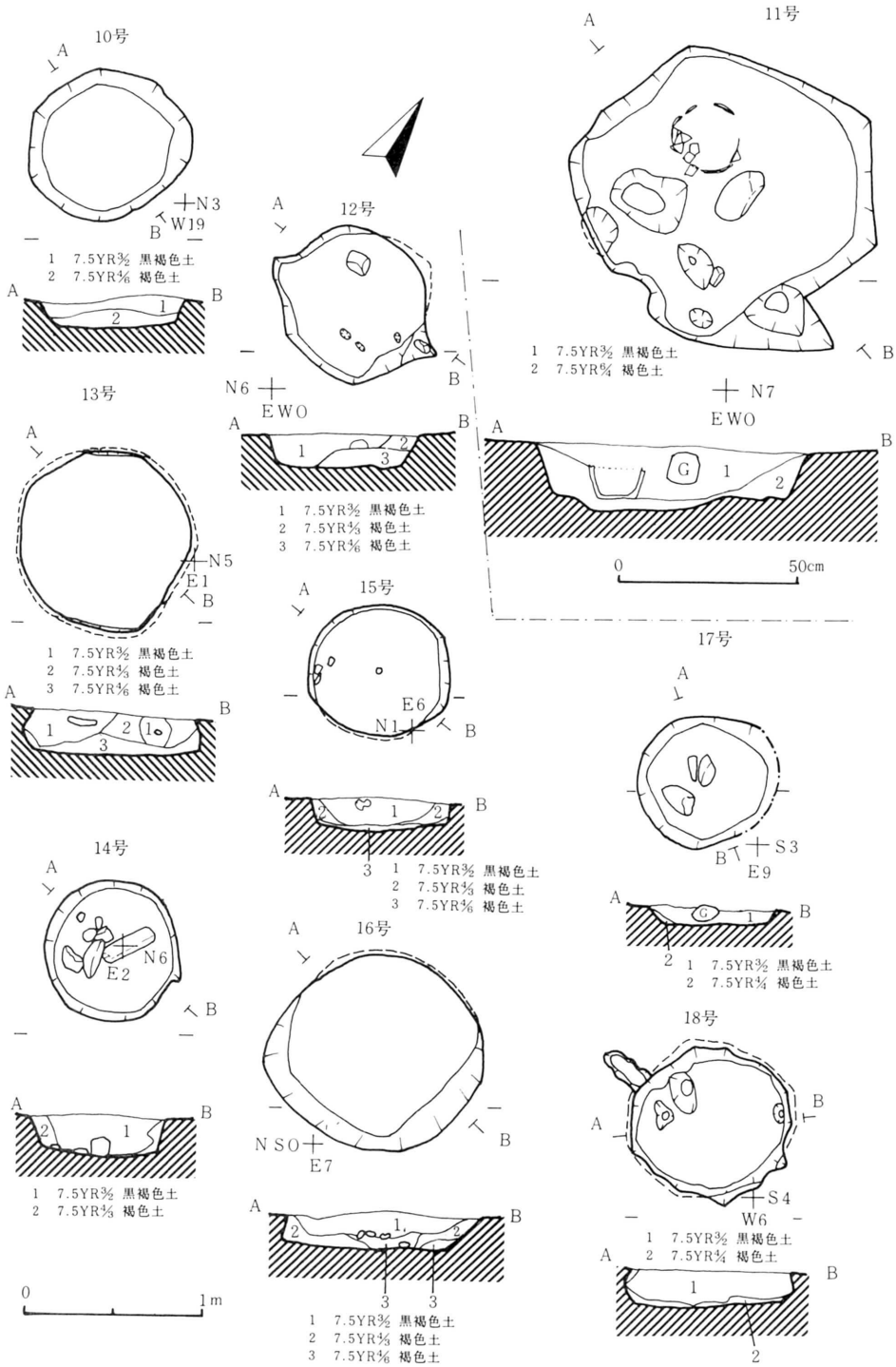
不整楕円形で、壁は北西側で中端が奥に入り、他はやや外傾する。盥状に近い断面を呈し、底部は平坦で長径15cm大程の川原石10個近くを認めた。埋土の１層は暗褐色土で粒状の火山灰土と極少の炭化物を含み、２層は褐色土で径0.5cm～１cm程の火山灰土のブロックと黒褐色土をまだら状に含む。３層に褐色火山灰土に黒褐色土を含み45号土壙３層と類似する。共伴遺物はない。

第Ⅰ表 土壙計測値一覧

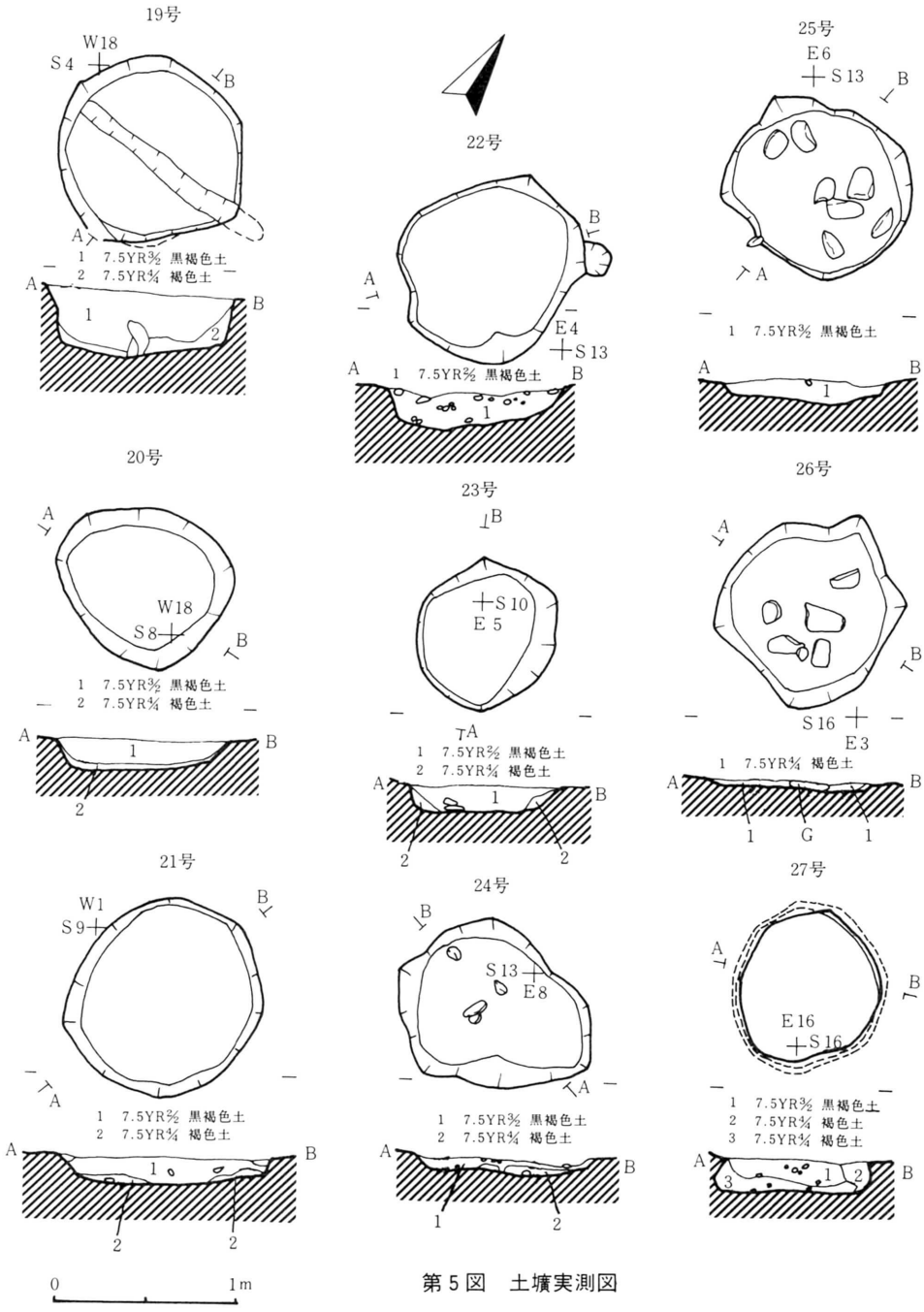
土壙名	開壙部 (cm)	壙底部 (cm)	深さ (cm)	形態 平面	形態 断面	分類	遺物	重復	図・図版	
1号 (Ab01 1P)	80× 70	56×559	14	ほぼ円形	皿状	B1a	なし	なし	3	1
2号 (Ab01 2P)	112×115	94×104	26	円形	盥状	B1a	縄文1	なし	3	1
3号 (Ab01 3P)	79× 77	68× 71	13	不整円形	皿状	B1a	なし	なし	3	
4号 (Ab01 4P)	110×101	94× 85	18	ほぼ円形	皿状	B1a	なし	なし	3	1
5号 (Ab01 5P)	107×101	91× 86	15	不整円形	皿状	B1a	なし	なし	3	
6号 (Ab01 6P)	60× 74	52× 60	16	楕円形	ボール状	B1a	なし	なし	3	
7号 (Ab01 7P)	94× 96	82× 84	14	ほぼ円形	皿状	B1a	なし	なし	3	1
8号 (Ab01 8P)	110×114	89×106	11	ほぼ円形	皿状	B1a	なし	なし	3	
9号 (Ab01 9P)	146×122	121×101	27	不整円形	盥状	B1a	なし	なし	3	
10号 (Ab02 1P)	91× 86	73× 70	18	円形	皿状	B1a	なし	なし	4	1
11号 (Ab50 1P)	84× 82	75× 77	18	ほぼ円形	皿状	B1a	縄文1	なし	4	1
12号 (Ab50 2P)	80× 90	80× 81	18	不整円形	皿状	B1a	なし	なし	4	1
13号 (Ab50 3P)	94×100	101×104	19	ほぼ円形	浅い袋状	B2a	なし	なし	4	1
14号 (Ab50 4P)	75× 79	66× 69	24	円形	盥状	B1b	なし	なし	4	1
15号 (Ab50 5P)	79× 73	69× 72	24	円形	盥状	B1a	なし	なし	4	
16号 (Ab50 6P)	122×110	104×104	19	不整円形	皿状	B1a	なし	なし	4	
17号 (Ba50 1P)	80× 73	66× 66	21	ほぼ円形	皿状	B1b	なし	なし	4	2
18号 (Ba01 1P)	90× 90	81× 72	21	ほぼ円形	浅い袋状	B2a	なし	なし	4	
19号 (Ba02 1P)	100×102	94× 88	36	ほぼ円形	浅いビーカー状	B1a	なし	なし	5	
20号 (Ba02 2P)	94× 89	79× 66	18	楕円形	皿状	B1a	なし	なし	5	
21号 (Ba50 2P)	108×109	91×100	16	円形	皿状	B1a	なし	なし	5	2
22号 (Bb50 2P)	102×101	85× 90	21	不整円形	皿状	B1a	なし	なし	5	2
23号 (Bb50 1P)	76× 85	59× 59	15	不整円形	皿状	B1a	なし	なし	5	
24号 (Bb50 3P)	105× 95	90× 69	8	不整楕円形	皿状	B1a	なし	なし	5	
25号 (Bb50 4P)	105× 96	92× 89	13	ほぼ円形	皿状	B1b	なし	なし	5	2
26号 (Bb50 5P)	104×101	85× 85	3	不整円形	皿状	B1b	なし	なし	5	2
27号 (Bb50 6P)	78× 81	86× 96	17	ほぼ円形	浅い袋状	B2a	なし	なし	5	2
28号 (Bb50 7P)	105×101	100× 90	15	不整円形	皿状	B1c	なし	なし	6	2
29号 (Bb60 5P)	108× 85	81× 66	13	不整楕円形	盥状	B1a	なし	なし	6	
30号 (Bb60 6P)	70× 92	59× 81	5	楕円形	皿状	B1a	なし	なし	6	
31号 (Bb60 7P)	74× 76	57× 63	12	ほぼ円形	盥状	B1a	なし	なし	6	
32号 (Bb60 8P)	77× 85	75× 81	22	隅丸方形	盥状	B1a	なし	なし	6	
33号 (Bb60 9P)	74× 74	60× 61	13	円形	盥状	B1a	なし	なし	6	2
34号 (Bb60 11P)	90× 88	73× 77	22	不整円形	皿状	B1a	なし	なし	6	
35号 (Bb60 12P)	103× 99	93× 94	23	円形	盥状	B1c	なし	なし	6	2
36号 (Bb70 1P)	86× 81	70× 71	21	不整円形	皿状	B1b	なし	なし	6	
37号 (Bb70 2P)	65× 70	57× 56	6	不整円形	皿状	B1b	なし	なし	7	3
38号 (Bb80 1P)	94× 92	93× 96	19	円形	盥状	B1a	なし	なし	7	
39号 (Ca80 1P)	65× 70	49× 55	10	ほぼ楕円形	盥状	B1a	なし	なし	7	
40号 (Ca70 1P)	83× 76	71× 54	17	ほぼ円形	浅い袋状	B1a	なし	なし	7	
41号 (Ca60 1P)	87×100	81× 91	24	円形	浅い皿状	B1b	なし	なし	7	3
42号 (Ca60 2P)	84× 79	90× 76	21	不整円形	皿状	B1a	なし	なし	7	
43号 (Ca60 3P)	75× 78	79× 82	20	円形	逆台状	B2a	なし	なし	7	
44号 (Ca50 1P)	68× 79	57× 58	7	不整円形	浅い皿状	B1c	なし	なし	7	
45号 (Bb01 1P)	94× 71	80× 60	21	楕円形	袋状	B1a	なし	なし	7	
46号 (Bb01 2P)	114×131	102×121	33	不整円形	皿状	B1a	なし	なし	8	
47号 (Bb01 3P)	80× 85	77× 76	7	不整楕円形	皿状	B1a	なし	なし	8	
48号 (Bb01 4P)	72× 91	72× 93	43	不整楕円形	盥状	B2b	なし	なし	8	3
49号 (Bb01 5P)	82× 63	72× 50	13	楕円形形	盥状	B1a	なし	なし	8	3
50号 (Bb01 6P)	143×114	119× 96	19	不整円形	浅い皿状	B1a	なし	なし	8	
51号 (Bb01 7P)	90× 76	84× 74	24	不整楕円形	盥状	B1b	なし	なし	8	3
52号 (Ca01 1P)	112×104	99×104	34	不整円形	盥状	B1a	なし	なし	8	3
53号 (Ca01 2P)	89× 91	68× 75	8	不整円形	浅い皿状	B1a	なし	なし	8	
54号 (Cb01 1P)	134× 99	109× 68	51	隅丸方形	逆台状	C	なし	なし	8	3


1号
W1
N9
1 7.5YR3/2 黒褐色土
2 7.5YR3/4 褐色土
2号
W3
N7
1 7.5YR3/4 暗褐色土
2 7.5YR3/4 褐色土
3 7.5YR3/2 黒褐色土
4 7.5YR5/6 褐色土
3号
W1
N7
1 7.5YR3/4 暗褐色土
2 7.5YR3/4 褐色土
4号
W2
N7
1 7.5YR3/4 暗褐色土
2 7.5YR3/2 黒褐色土
3 7.5YR4/6 褐色土
5号
N5
W4
1 7.5YR3/2 黒褐色土
2 7.5YR3/4 暗褐色土
3 7.5YR5/6 明褐色土
6号
S5
EW0
1 7.5YR3/2 黒褐色土
2 7.5YR3/4 褐色土
7号
W7
N3
1 7.5YR3/2 黒褐色土
2 7.5YR3/4 暗褐色土
3 7.5YR3/4 褐色土
8号
N14
W4
1 7.5YR3/2 黒褐色土
2 7.5YR4/3 褐色土
9号
W3
N2
1 7.5YR4/6 褐色土
2 7.5YR3/2 黒褐色土
3 7.5YR5/6 褐色土
0
1 m

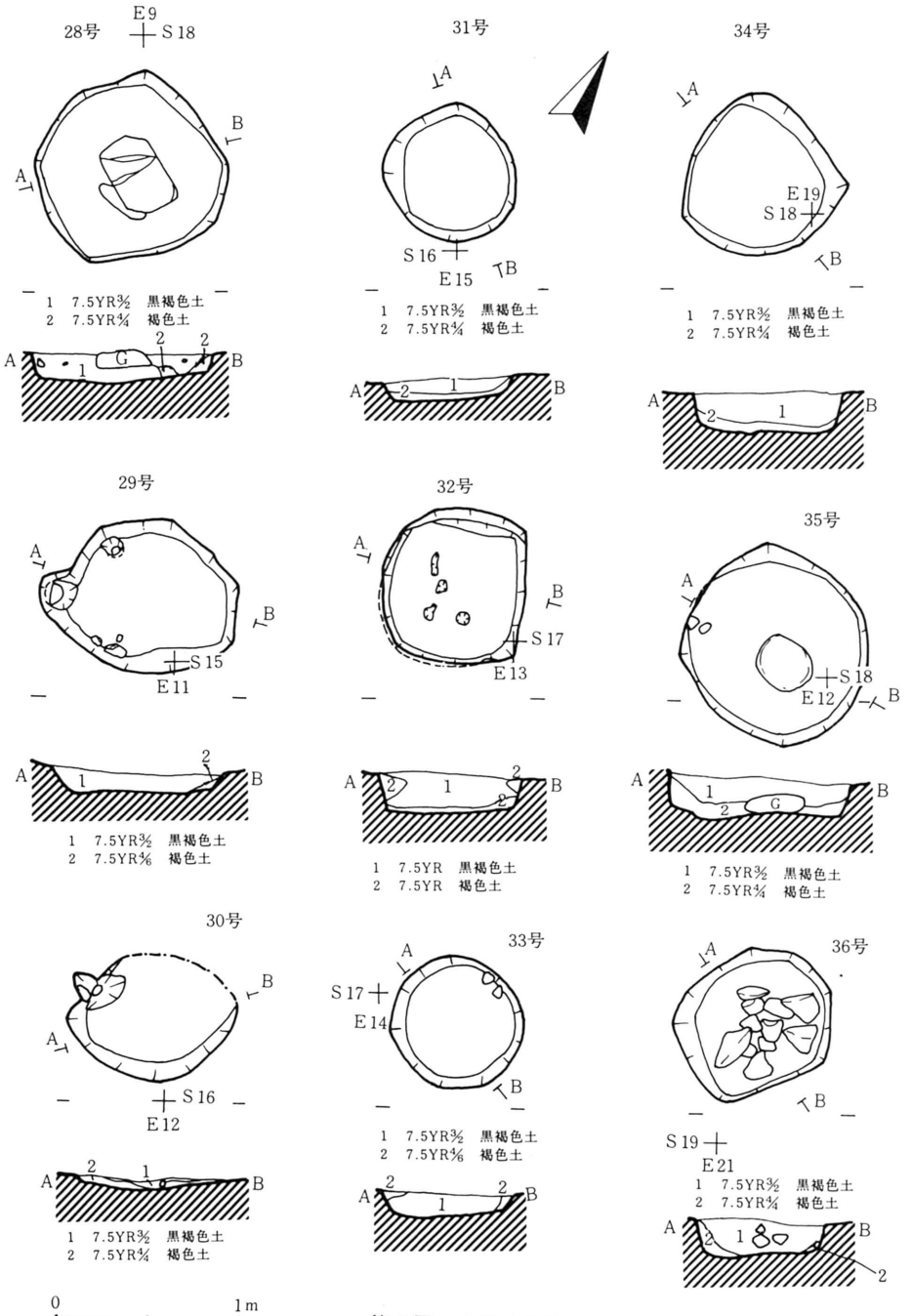
第3図　土壙実測図


10号
N3
W19
1 7.5YR3/2 黒褐色土
2 7.5YR5/6 褐色土
11号
1 7.5YR3/2 黒褐色土
2 7.5YR6/4 褐色土
N7
EWO
G
0 50cm
12号
N6
EWO
1 7.5YR3/2 黒褐色土
2 7.5YR3/3 褐色土
3 7.5YR5/6 褐色土
13号
N5
E1
1 7.5YR3/2 黒褐色土
2 7.5YR3/3 褐色土
3 7.5YR5/6 褐色土
15号
E6
N1
1 7.5YR3/2 黒褐色土
2 7.5YR3/3 褐色土
3 7.5YR5/6 褐色土
17号
S3
E9
1 7.5YR3/2 黒褐色土
2 7.5YR3/3 褐色土
14号
N6
E2
1 7.5YR3/2 黒褐色土
2 7.5YR3/3 褐色土
16号
NSO
E7
1 7.5YR3/2 黒褐色土
2 7.5YR3/3 褐色土
3 7.5YR5/6 褐色土
18号
S4
W6
1 7.5YR3/2 黒褐色土
2 7.5YR3/3 褐色土
0 1m

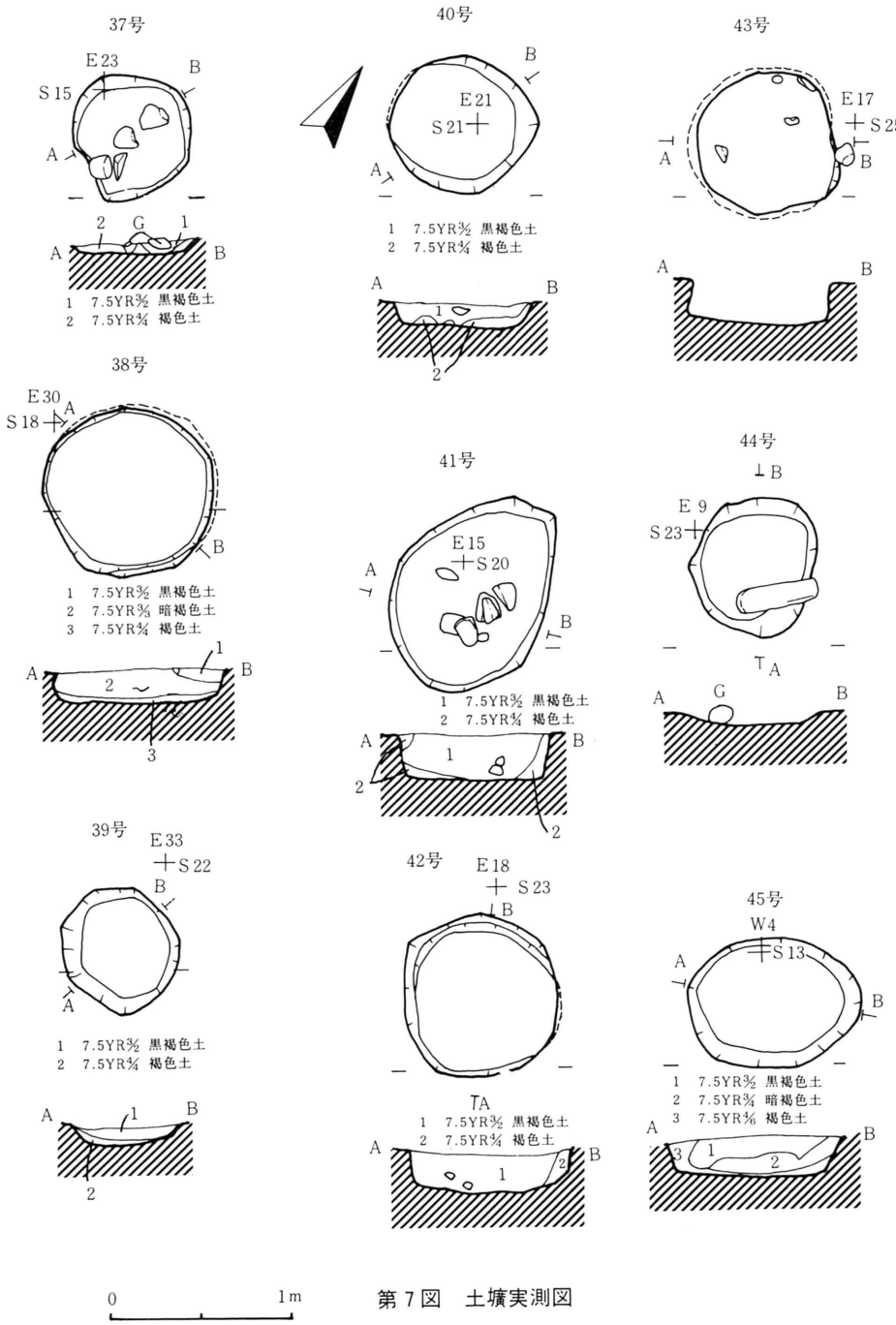
第4図 土壙実測図


19号
W18
S 4
A
B
1 7.5YR3/2 黒褐色土
2 7.5YR4/4 褐色土
1
2
20号
W18
S 8
1 7.5YR3/2 黒褐色土
2 7.5YR4/4 褐色土
21号
W1
S 9
1 7.5YR3/2 黒褐色土
2 7.5YR4/4 褐色土
22号
E 4
S 13
1 7.5YR3/2 黒褐色土
23号
S 10
E 5
1 7.5YR3/2 黒褐色土
2 7.5YR4/4 褐色土
24号
S 13
E 8
1 7.5YR3/2 黒褐色土
2 7.5YR4/4 褐色土
25号
E 6
S 13
1 7.5YR3/2 黒褐色土
26号
S 16
E 3
1 7.5YR4/4 褐色土
G
27号
E 16
S 16
1 7.5YR3/2 黒褐色土
2 7.5YR4/4 褐色土
3 7.5YR4/4 褐色土
0
1m

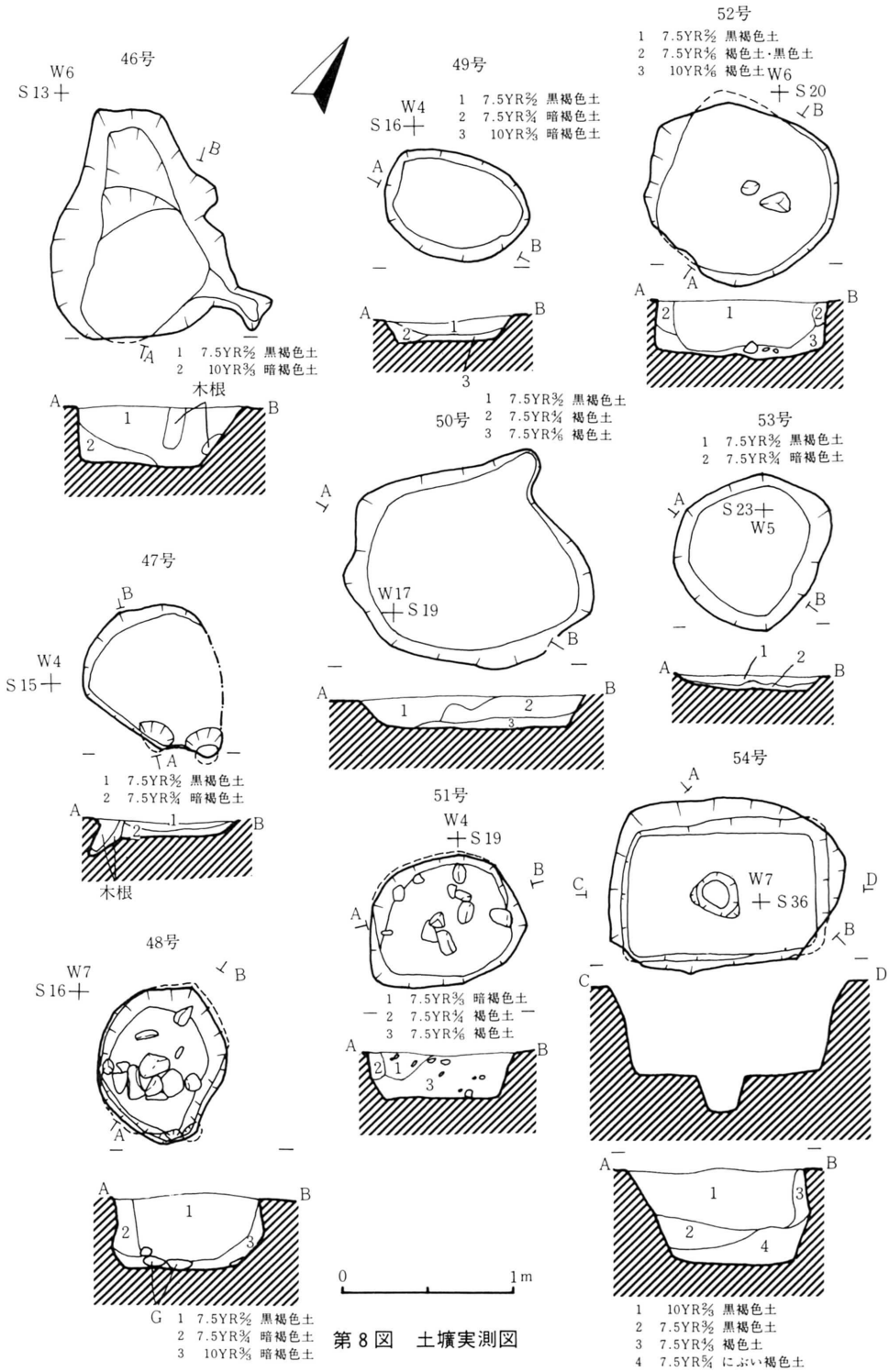
第5図 土壙実測図


28号
E 9
S 18
1 7.5YR3/2 黒褐色土
2 7.5YR4/4 褐色土
29号
S 15
E 11
1 7.5YR3/2 黒褐色土
2 7.5YR4/6 褐色土
30号
S 16
E 12
1 7.5YR3/2 黒褐色土
2 7.5YR4/4 褐色土
31号
S 16
E 15
1 7.5YR3/2 黒褐色土
2 7.5YR4/4 褐色土
32号
S 17
E 13
1 7.5YR 黒褐色土
2 7.5YR 褐色土
33号
S 17
E 14
1 7.5YR3/2 黒褐色土
2 7.5YR5/6 褐色土
34号
E 19
S 18
1 7.5YR3/2 黒褐色土
2 7.5YR4/4 褐色土
35号
S 18
E 12
1 7.5YR3/2 黒褐色土
2 7.5YR4/4 褐色土
36号
S 19
E 21
1 7.5YR3/2 黒褐色土
2 7.5YR4/4 褐色土
0
1 m

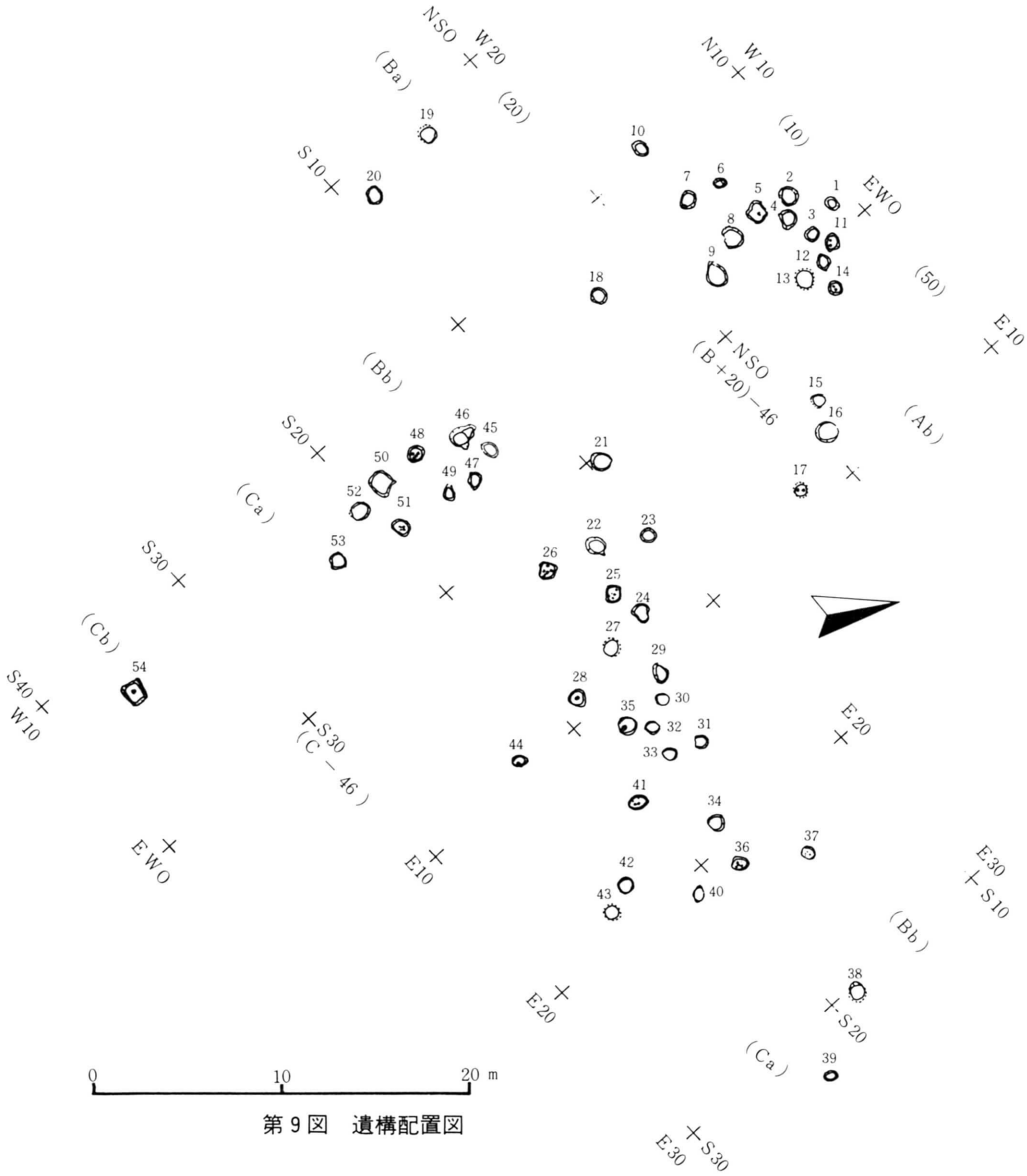
第 6 図　土壙実測図


37号
E23
S15
B
A
2 G 1
A B
1 7.5YR3/2 黒褐色土
2 7.5YR4/4 褐色土
38号
E30
S18
A
B
1 7.5YR3/2 黒褐色土
2 7.5YR3/3 暗褐色土
3 7.5YR4/4 褐色土
1
A B
2
3
39号
E33
S22
B
A
1 7.5YR3/2 黒褐色土
2 7.5YR4/4 褐色土
A 1 B
2
40号
B
E21
S21
A
1 7.5YR3/2 黒褐色土
2 7.5YR4/4 褐色土
A B
1
2
41号
E15
S20
A
B
1 7.5YR3/2 黒褐色土
2 7.5YR4/4 褐色土
A B
1
2
2
42号
E18
S23
B
TA
1 7.5YR3/2 黒褐色土
2 7.5YR4/4 褐色土
A B
1
2
43号
E17
S25
A
B
A B
44号
B
E 9
S23
A
A G B
45号
W4
S13
A
B
1 7.5YR3/2 黒褐色土
2 7.5YR3/4 暗褐色土
3 7.5YR4/6 褐色土
A B
3 1
2
0 1m

第7図 土壙実測図


46号
W6
S 13
1 7.5YR3/2 黒褐色土
2 10YR3/3 暗褐色土
木根
47号
W4
S 15
1 7.5YR3/2 黒褐色土
2 7.5YR3/4 暗褐色土
木根
48号
W7
S 16
G 1 7.5YR3/2 黒褐色土
2 7.5YR3/4 暗褐色土
3 10YR3/3 暗褐色土
49号
W4
S 16
1 7.5YR3/2 黒褐色土
2 7.5YR3/4 暗褐色土
3 10YR3/3 暗褐色土
50号
1 7.5YR3/2 黒褐色土
2 7.5YR3/4 褐色土
3 7.5YR4/6 褐色土
W17
S 19
51号
W4
S 19
1 7.5YR3/3 暗褐色土
2 7.5YR3/4 褐色土
3 7.5YR4/6 褐色土
52号
1 7.5YR3/2 黒褐色土
2 7.5YR3/6 褐色土・黒色土
3 10YR4/6 褐色土
W6
S 20
53号
1 7.5YR3/2 黒褐色土
2 7.5YR3/4 暗褐色土
S 23
W5
54号
W7
S 36
1 10YR3/3 黒褐色土
2 7.5YR3/2 黒褐色土
3 7.5YR3/3 褐色土
4 7.5YR5/4 にぶい褐色土
0
1m

第 8 図　土壙実測図


NSO
W20
(Ba)
(20)
N10
W10
(10)
S10
EWO
(50)
E10
(Bb)
NSO
(B+20)−46
(Ab)
S20
(Ca)
S30
(Cb)
S40
W10
S30
(C−46)
E20
EWO
E10
E30
S10
(Bb)
E20
S20
(Ca)
E30
S30
0
10
20 m

第 9 図　遺構配置図

52号（Ca011P）土壙（第８図　図版３）

不整円形で、壁は直に立ち底面に若干凹凸をみるが、ほぼ盥状又は浅いビーカー状の断面を呈する。埋土１層褐色土は46号土壙の１層と、２層の褐色土は45号土壙の３層と、３層の褐色土は46号土壙の２層とそれぞれ類似する。遺物は共伴しない。

53号（Ca012P）土壙（第８図）

不整円形で、浅皿状の断面を呈する。埋土１層は黒褐色土に火山灰土が粒状で全般に混り、極少の炭化物を含む。２層は暗褐色土で黒褐色土と火山灰土の混土で極少の炭化物を含み、それぞれ45号土壙の１・２層に類似する。共伴遺物はない。

54号（Cb011P）土壙（第８図　図版３）

長方形を呈し、壁は底部から上にやや外傾し中端から上で更に外に開き、逆台形に近い断面を呈する。平坦な底面のほぼ中央に径26cm×27cm、深さ21cmの小穴をもつ。埋土１層は黒褐色土で極少の炭化物を含む。２層も黒褐色土で炭化物はなく、３層は黒褐色土と火山灰土の混土、４層は褐色火山灰土に黒褐色土が混る。いずれも自然堆積土と推察される。共伴遺物はない。

II　ま と め

本調査区で検出された遺構は全て土壙であり、遺構間の重複もみられない。以下、検出土壙についてのまとめをする。

〔分　類〕　平面、断面の形態および規模等を基準に分類を試みた。基本的には二大別になる。分類記号は関連上IV区と同記号を用いた。(IV区のＡ類に該当する土壙は本調査区にはない)

Ｂ類　円形の平面を基本とし、径約70cm～150cm内で、深さ約10cm～30cm内外の規模を測る土壙で、断面形態で１・２に細分される。

１　断面が皿状または盥状等を呈するものを一括、　２　浅い袋状を呈するもの、

更に土壙中に川原石の包含の有無でａ・ｂ・ｃに分けられる。

ａ　川原石のないもの　ｂ　径20cm内外以下のもの複数をもつ　ｃ　長径40cm内外の扁平または円筒状のもの１個のみのもの

以上を整理すると、B1a類・B1b類・B1c類・B2a類・B2b類・B2c類となる。

Ｃ類　方形を基本とする平面形、断面ビーカー状で底面中央に円形の小穴をもつ。

分類別に土壙数をまとめると、B1a類が37基で大半をしめ、B1b類は14号・17号・25号・26号・36号・37号・41号・51号土壙の８基、B1c類は28号・35号・44号土壙の３基、B2a類が13号・18号・27号・43号土壙の４基、B2b類は48号土壙の１基、B2c類の該当はない。Ｃ類は54号土壙１基のみである。

形態的には、B1類が48基、B2類５基、Ｃ類１基となる。B1a類と同類土壙は第II区では「円

形土壙」と仮称し、第Ⅳ区ではB類としたものであり、C類と同類土壙は第Ⅳ区でもC類とし4基検出されている。

〔分布状況〕　台地北縁に沿った平坦地に位置し、西に隣接して第Ⅳ区がある。前述したように土壙以外の遺構は認められず、土壙間の重複もない。

単独で所在するC類の54号土壙は別に、土壙のあり方は明確な規則性は見出せないが、全体的にみると台地北縁に沿うように東西方向への広がりをもち、幾つかの小群が想定される。

すなわち、西側に位置する1号～14号土壙の一群であり、半円状の配列の様相をもつ。45号～53号土壙の一群は長楕円もしくは二列縦列の様相をもつ。また、23号～26号土壙を結ぶ以東37号～43号土壙を結ぶまでに多くの土壙をみるが、これを一群とすることが妥当であるのか、幾つかに分れるのか明確でない。

なお、分類別にみても規則性の有無は明確でない。ただ、B1b類・B1c類・B2b類の各土壙の中で、26号－25号・28号－44号・35号－41号・36号－38号・48号－51号土壙がいずれも約4mの距離をおき対になる。方向は一定しない。

一方、19号～20号・15号～17号・38号～39号土壙のように群から離れて所在するグループがあり、土壙間が4m内外であるのも前述と対比して興味ある。すなわち、2基もしくは3基の小単位を基本とし、その集合による群構成になることも考えられる。

〔性格　機能〕　B類・C類土壙についても性格、機能とも不明である。B類土壙は他種遺構と重複しない位置に群をなして所在することと、土壙内に川原石を有するものが知見できること等から、配列の規則性の有無も含め、性格、機能を解く鍵であり今後の課題である。

また、B類土壙は平面形と規模からみると同じ仲間である要素をもつが、断面形の皿状と袋状とによって性格や機能上の差異をもつか否か、分布的には一括できる群に入り、B1b類に対し1基ではあるがB2b類が認められ、江釣子村鳩岡崎遺跡[註(1)]C区で検出された36基のB1類・B2類に類似する土壙中にもB2b類と同様の土壙が存在する[註(2)]ことから、B類に包括される土壙は性格、機能上に大差はないものと解したい。

〔年　代〕　B類土壙中で遺物を共伴したのは、2号土壙の埋土と11号土壙の意図的設置の可能性のある土器で、後者は年代決定の資料たり得るとしたとき、縄文中期大木8a式に推察でき、土壙年代も同期に比定できる。

更に、第II区円形土壙1号の埋土から縄文土器片2点が出土[註(3)]したこと、前述の鳩岡崎遺跡では、多くは口径70cm～80cm内外のほぼ円形の平面をもち、深さ20cm内外で浅皿状、洗面器状、フラスコ状の断面形をもつ土壙36基が、調査区北側崖線下のC区で、他種遺構と重複しない状況で群をなして検出された。36基中の17基で縄文土器が共伴し、16基では破片であるが、CB53P1土壙では縄文中期大木7a式深鉢土器が埋設してあった可能性がある。

一方、紫波町上平沢新田遺跡[註(4)]は平安時代の集落を中心にする遺跡であるが、遺物は縄文時代(明確なのは後期初頭)、弥生時代のものも採集でき、縄文時代に比定される溝状土壙も検出されている。ここの1号～4号土壙は隣接し合い、うち1号土壙はB2a類・2号・4号土壙はB1a類・3号土壙はB1b類に各々類似し、1号・3号土壙には縄文土器の破片を共伴している。

以上の類例の土壙が形態・規模・のあり方等から、本調査区のB類に包括される土壙と類似遺構と解するならば、その共伴遺物が縄文土器に共通することから、この類の土壙は縄文時代に、更に、本調査区では縄文時代中期に比定できる可能性がある。

しかし、この類の土壙は遺物の出土例が極めて少なく、そのことが性格、機能を解く一面かも知れないが、年代比定上からは遺物出土の類例を始め、多角的な検討が必要であり、ここでは知見した範囲での可能性を述べ即断は壁けたい。

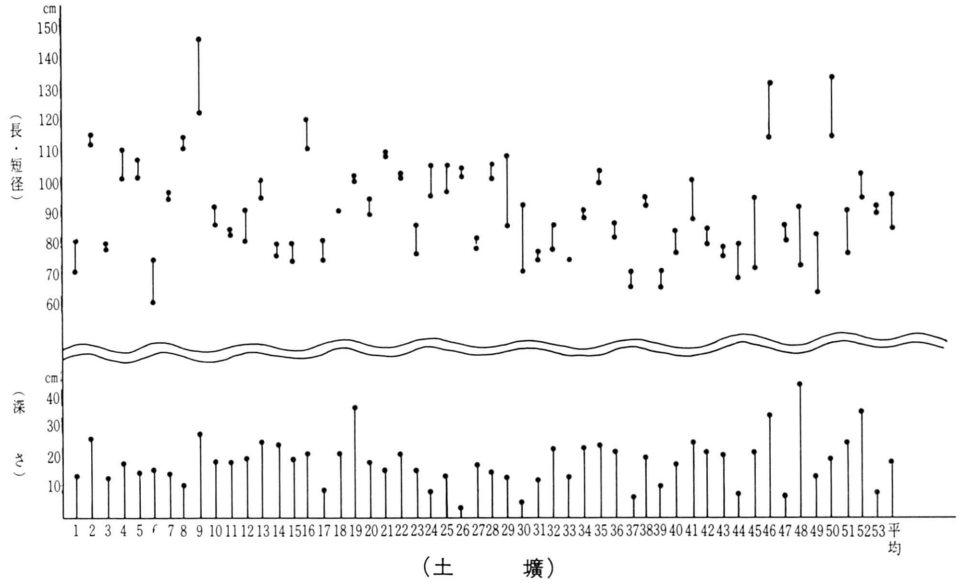
C類土壙は1基のみ単独で検出され、第IV区検出のC類土壙のあり方と合せ推察するに、B類土壙との直接的関連はないものと思う。遺物の共伴はなく年代決定は困難であるが、第IV区では重複関係から平安時代の竪穴住居跡よりも古く、縄文時代に見る円形で底面に小穴をもつ土壙の変形かとも見られ、近隣遺構・遺物も縄文時代中期、歴史時代のものに限られ、前述の理由等から一応縄文時代に比定されるものかと考える。

註(1)　鳩岡崎遺跡　和賀郡江釣子村所在　東北縦貫自動車道関連遺跡として昭和48年8月から昭和50年6月まで岩手県教育委員会文化課で調査、昭和56年度報告書刊行予定。

(2)　鳩岡崎遺跡関連の本文記述は、昭和48年の調査に参加した報告者の現場での知見と、記録等によった。

(3)　本書第II区の項　第1号土壙

(4)　上平沢新田遺跡　「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書」—III—　岩手県教育委員会　日本道路公団



第10図　B類土壙計測グラフ

第 III ・ VI 地区

第Ⅰ図　第Ⅲ・Ⅵ地区遺構配置図

第III．VI地区

I　検出された遺構と遺物

III、VI地区は、当遺跡の南東部にあたる地域で、東側には南北に走る堀跡をはさんで岩崎城跡が存在する。第III地区は昭和49年、第VI地区は昭和50年の調査地域である。

第III、VI地区で発見された遺構は、竪穴住居跡１棟、竪穴状遺構１基、土壙２基、溝状土壙２基、焼土遺構１基、溝７本、堀１本である。(第１図)遺物には、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、鉛玉、鉄玉、石器等がある。ここでは、これらの発見された遺構とその出土遺物について概略を述べていく。

1　竪穴住居跡と出土遺物

竪穴住居跡（Fd49）（第２図）

〔遺構の確認〕　調査区のほぼ中央部南側、堀の北約10mの地山面で確認されたものである。

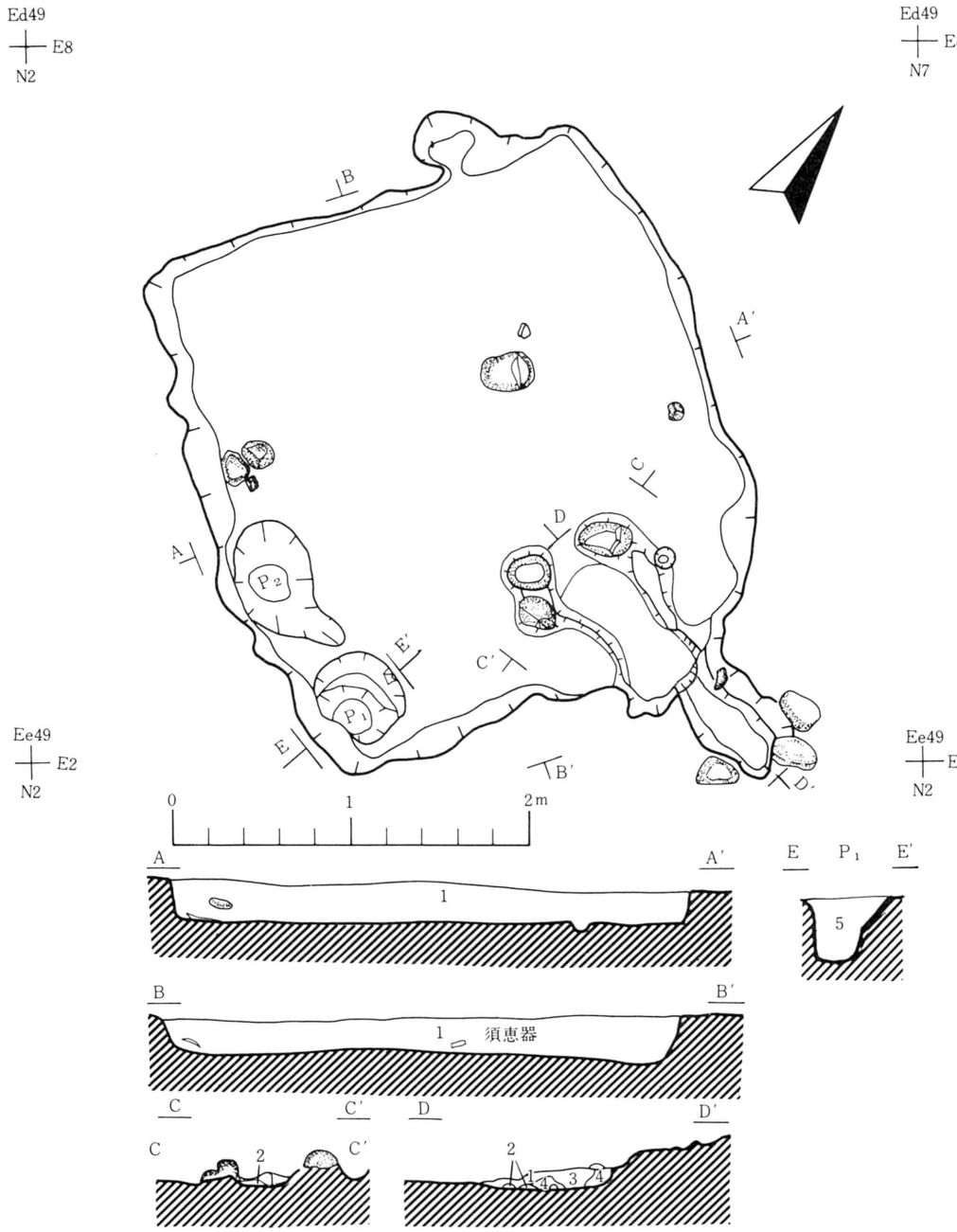
〔平面形、規模〕　平面形は、西壁北寄りに少し張り出し（入江状）が認められるが、ほぼ方形のプランをもつものといってよい。規模は長軸（東西）約３m、短軸（南北）約2.9mである。床面積は約8.7m²である。

〔堆積土〕　少量の焼土や炭化物の含まれている腐植土まじりの暗褐色シルト１層のみで住居全体を覆っている。

〔壁〕　地山をそのまま壁としているもので、最も残存状況の良い西壁で約22cmであり、他はそれに比べて少し低い。壁の立ち上りはやや外傾しているが鋭い立ち上りを示している。

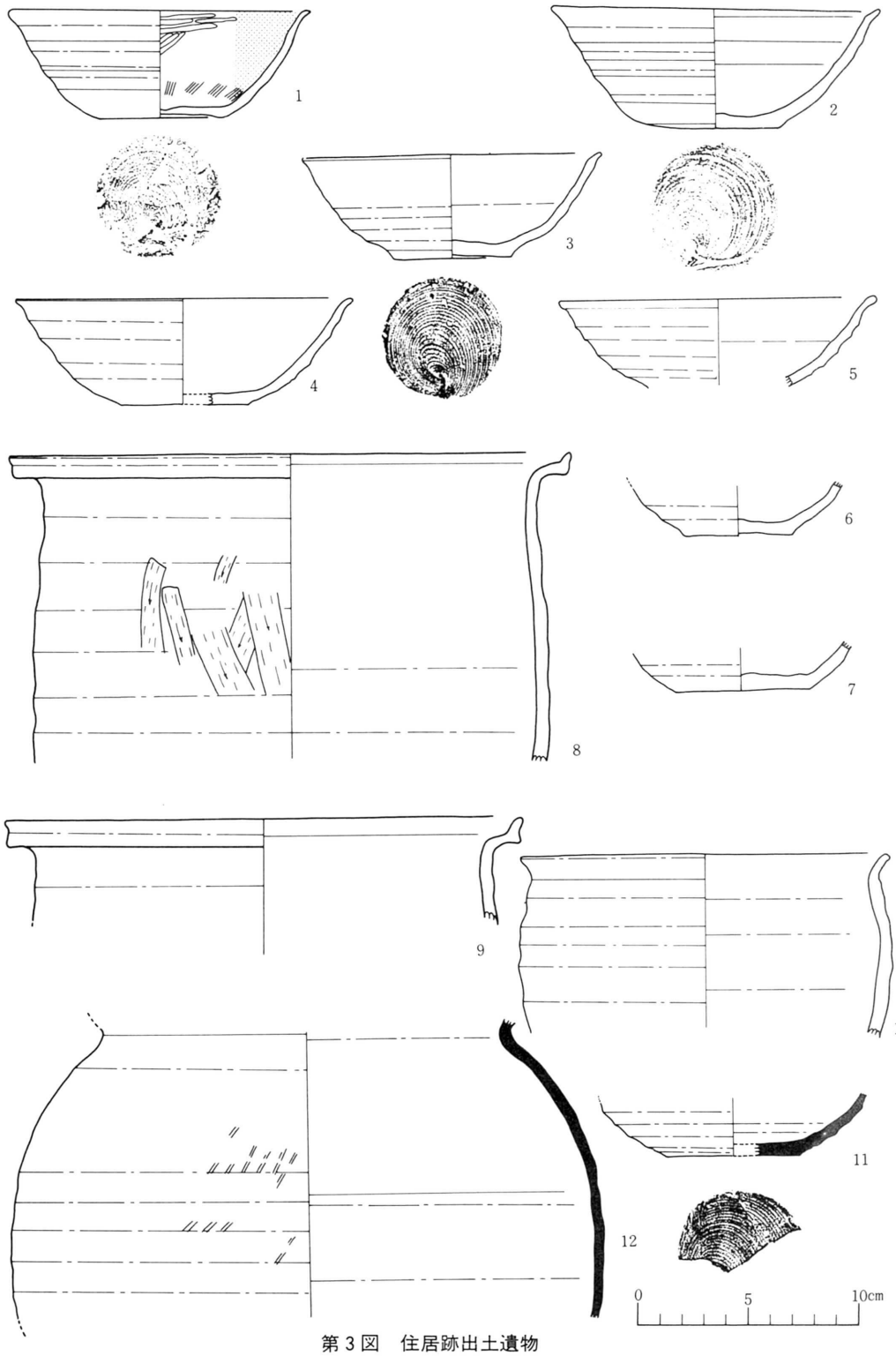
〔床面〕　地山をそのまま床としているもので、固くしまっており、平坦である。住居のほぼ中央と南壁中央部壁際には炭化物を含む焼土の広がりが認められた。

〔カマド〕　東壁北隅にとりつけられており、燃焼部と煙道部よりなる。天井部は既になく両側壁がわずかに残存していたものである。燃焼部は奥行約80cm、幅約40cmで底面は、やや皿状にくぼみ熱を受けて赤変している。底面より土師器の坏、甕の口縁部及び須恵器の坏の底部等が出土している。両側壁はシルトで構築されていたものであるが、かろうじてその存在がわかる程度である。両側壁を構築した際に使用されたとみられる人頭大の川原石３個が焚口部に存在した。煙道へは、奥壁際より約10cmの段差をもって上っている。煙道部は、上部がほとんど削平され、わずかに底面部分が存在した。その規模は、長さ約70cm、幅40cmと比較的短い。なお煙出部にピットはみられない。煙道の構築に使用したとみられる人頭大の川原石３個が煙道の周辺に存在した。長軸方向は、N－E－110°である。



層	土色	備　　考
1	暗褐色	腐植土混じりのシルト。炭化物と焼土が少し混入している。
2	橙　色	焼土で、ガリガリに焼けている。
3	茶褐色	炭化物、焼土が小ブロック状に混じる。
4	暗茶褐色	焼土、炭化物が微量混じる。
5	黒　色	炭化物、焼土が微量まじる。やわらかい。

第 2 図　竪穴住居跡



第 3 図　住居跡出土遺物

〔柱穴〕　認められない。

〔貯蔵穴状ピット等〕　南東隅の南壁に接するような形で、径50×50cm、深さ約30cmの平面形がほぼ円形に近い擂り鉢状のピットが検出された。又、そのすぐ西の焼土下より長径約80cm短径45cm、深さ約15cmの深皿状を呈する円形状のピットが検出され、その堆積土の中より土師器の坏1個体と底部より土師器の破片が出土している。いずれも堆積土には炭化物と焼土が微量混じっている。

〔年代決定資料〕　住居跡の構築及び使用等の年代を決定する資料としては、カマド内や床面、及び南壁際のピット等から出土した土師器、須恵器等がある。

出土遺物

土師器　復元可能なものや破片を含めて実測したものは坏7点、甕3点である。いずれも製作に際してロクロを使用しているものである。

坏（第3図1～7）　いずれも、内彎気味に体部から口縁部まで外傾する器形で、口縁部でやや外反するものである。(1)は、内面がヘラミガキされ黒色処理が施されている。他は底部切り離し技法が、いずれも回転糸切り技法により切り離されており、再調整はみられない。内黒処理等も認められないものである。

甕（第3図8～10）　主として口縁部だけの破片であるので正確な器形は不明である。最大径が口縁部にあり、口径より器高の大きい長胴のものと推定されるものである。(8、9)は、口縁部が短く強く外反し、口唇部が強く上方へ挽き出されているもので、器面調整としては(9)は、体部外面にケズリが施されている。(10)は、口縁部が短くゆるく外反し、口唇部は単純に丸めてあるものである。

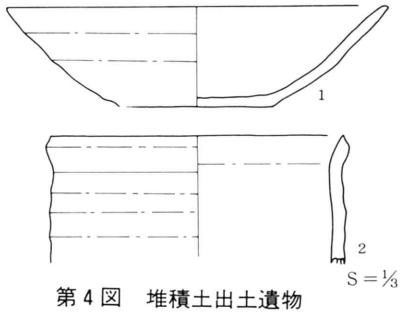
須恵器

坏（第3図11）　下半部の破片なため器形は不明である。底部の切り離し技法は回転糸切り無調整である。

甕（第3図12）　球胴に近い器形と推定される甕（あるいは壺）の体部破片である。体部外

表Ⅰ　住居跡出土遺物観察表

番号	出土層位	種別	調整 外面	調整 内面	底面	器高	口径	体径	底径
1	カマド内	土師器(坏)	ロクロ	ヘラミガキ・内黒処理	回転糸切り	4.8	13.7		5.6
2	南壁 Pit	土師器(坏)	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	5.4	14.9		5.8
3	〃　〃	土師器(坏)	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	4.7	13.5		5.4
4	〃　〃	土師器(坏)	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	4.8	15.3		(5.8)
5	〃　〃	土師器(坏)	ロクロ	ロクロ		(3.9)	(14.4)		
6	〃　〃	土師器(坏)	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	(2.2)			5.0
7	煙道内	土師器(坏)	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	(1.2)			6.1
8	カマド内	土師器(甕)	ロクロ　ケズリ	ロクロ		(13.8)	(25.4)		
9	床面	土師器(甕)	ロクロ	ロクロ		(4.4)	(23.3)		
10	床面	土師器(甕)	ロクロ	ロクロ		(7.8)	(16.6)		
11	カマド内	須恵器(坏)	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	(2.2)			6.1
12	床面	須恵器(甕)	ロクロ	ロクロ		(13.4)		(26.8)	
13	埋土	土師器(坏)	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	(6.1)	(15.2)		
14	埋土	土師器(甕)	ロクロ	ロクロ		(4.9)	(12.0)		



第 4 図　堆積土出土遺物

面にタタキメ痕が認められる。

堆積土出土遺物

表 2 の如く堆積土からは土師器坏、甕等の破片が少し出土している。その中で実測したものは、坏、甕の破片各 1 点である。

土師器　いずれも製作に際してロクロを使用しているものである。

坏（第 4 図 1）　体部から口縁部にかけて外傾気味のもので、底部の切り離し技法は、回転糸切り無調整のものである。

甕（第 4 図 2）　破片なため正確な器形は不明であるが、口縁部が短く、少し外反し口唇部がわずかに上方に挽き上げられている比較的小型の長胴と推定されるものである。

表 2　破片集計表

		器　種	床　面	カマド内	埋　土	ピット他
坏	体	土師器			4	1
	底	〃	1		3	1
甕	口	〃	1		1	
	底	〃	1			
坏	口	須恵器		1		
	底					

2　**竪穴状遺構**（Fe50）（第 5 図）

〔遺構の確認〕　調査区の南隅、第 2 号溝の東約2.5mの地山面で確認したものである。

〔平面形、規模〕　平面形は、南北に長い長方形状を呈している。規模は、長軸（南北）約6.6m、短軸(東西)約4.5mである。但し、北端より南に約4.5mまでは壁高が約40～30cmあり、それより南側は約 5 cmと浅くなっている。従って深い部分だけでみるとその規模は4.5×4.5mの方形といえる。

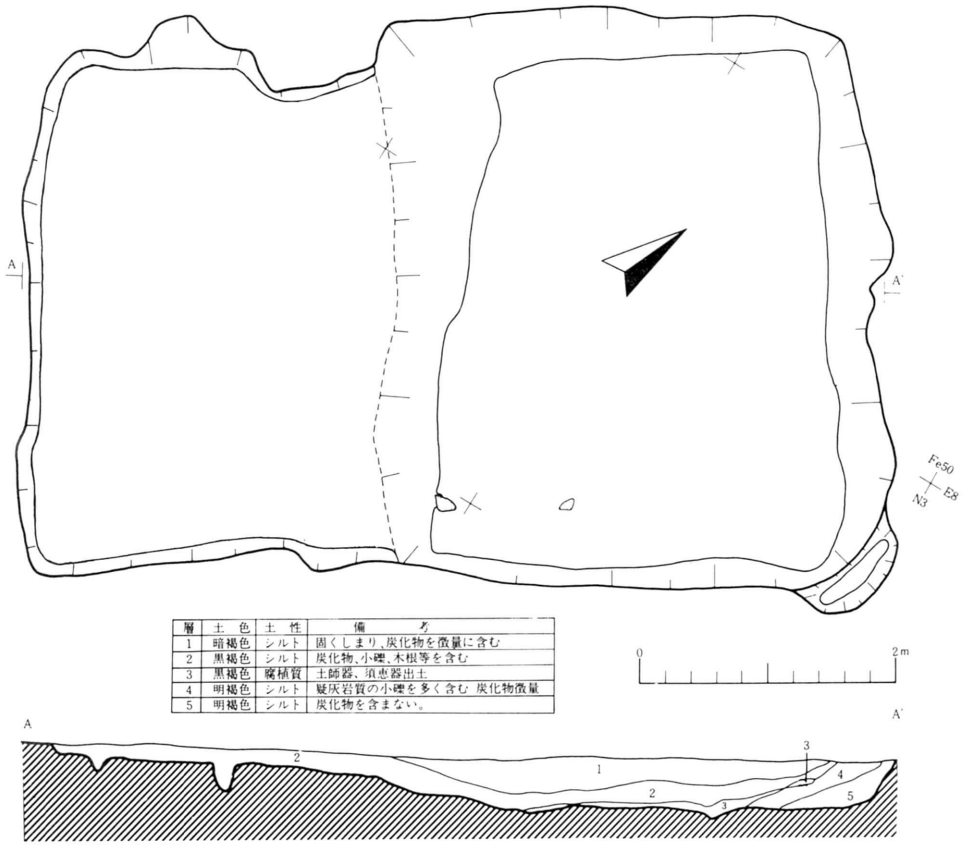
〔堆積土〕　5 層に大別される。1 層は、暗褐色のシルトでほぼ中央附近に皿状に堆積し床面までは達していない。2 層は黒褐色のシルトで南側の浅い部分から北側の深い部分にかけて堆積し南半では床面に達し北半では床面に達していない。3 層は黒褐色の腐植質土で北半の深い部分の床面にのみ堆積している。4.5層は明褐色のシルトで北半の壁沿いに堆積している。

〔壁〕　地山をそのまま壁としており、前述したように北半では約40～30cmと壁高が高く、立ち上りも比較的急であるのに対して南半は約 5 cmと緩やかな立ち上りである。

〔床〕　床面は地山をそのまま床とし固くしまっており比較的平坦である。

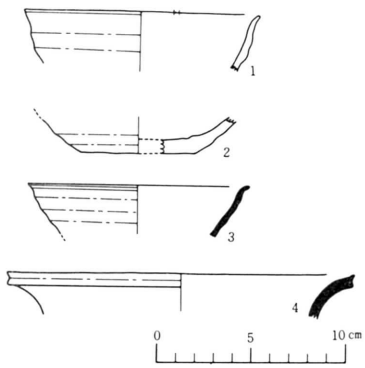
〔カマド・その他の施設〕　床面、その他に焼土・pit・カマド・柱穴は認められない。

〔出土遺物〕　堆積土の第 3 層より土師器の坏、須恵器の坏、甕の破片が少量出土している。いずれも破片であるが実測したものは土師器坏 2 点、須恵器坏 1 点、甕 1 点である。いずれも製作に際してロクロを使用しているものである。



層	土 色	土 性	備 考
1	暗褐色	シルト	固くしまり、炭化物を微量に含む
2	黒褐色	シルト	炭化物、小礫、木根等を含む
3	黒褐色	腐植質	土師器、須恵器出土
4	明褐色	シルト	疑灰岩質の小礫を多く含む 炭化物微量
5	明褐色	シルト	炭化物を含まない。

第 5 図　竪穴状遺構



第 6 図　竪穴状遺構堆積土出土遺物

土師器

坏（第 6 図 1 、 2 ）　体部から内彎気味に外傾する器形で口縁部でわずかに外反するものと推定される。(2)の底部切り離し技法は回転糸切り無調整である。

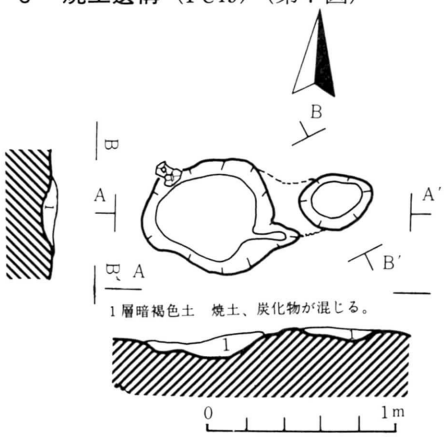
須恵器

坏（第 6 図 3 ）　体部から外傾気味に立ち上り口唇部がわずかに外反するものと推定される。

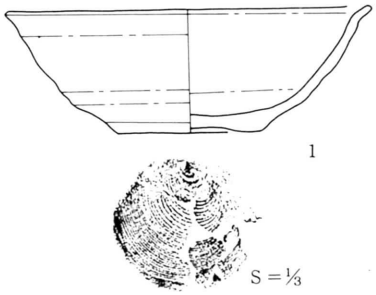
甕（第 6 図 4 ）　口縁部が外反し、口唇部分がわずかに引き出されている口縁部の破片である。

〔その他〕　調査区の西側地域、1 号溝の西約 6 m、堀状遺構との間の地山で楕円状の落ち込み(長径約5.5m×短径約 4 m) が検出されている。(第 1 図) 北壁は竪穴状に鋭く立ち上っているが他の壁面は緩かであり、深皿状を呈している。西側が浅く軽い段がつき形態的には当竪穴状遺構と類似しているともいえる。しかし出土遺物、床面における諸施設等も認められず、性格的には不明である。

3　焼土遺構（Fe49）（第７図）



第７図　焼土遺構



第８図　焼土遺構出土遺物

〔遺構の確認〕　調査区の西側、第１号住居跡の南東約６m、第４号土壙との中間にあたる地点の地山で確認したものである。

〔平面形・断面形〕　平面形は大小二つのほぼ円形の pit が東西に並び「８」の字状である。断面形はいずれも皿状で、大きい方に比べ小さい方は約15cmの段差があり高くなっている。

〔堆積土〕　焼土、炭化物の混じった暗褐色のシルト一層である。底面近くには焼土が多い。

〔規　模〕　西側の円形 pit は径70cm×60cm、深さ約10cm、東側 pit は、径約40cm×約30cm、深さ約５cmである。全体の長径は約125cmである。

〔壁面・底面〕　いずれも熱を受けてわずかに赤変している。底面はかなり凹凸がある。

〔年代決定資料〕　この遺構の年代を決定する資料としては、東側 pit の壁面より出土した土師器がある。実測はその坏１点のみである。

土師器

坏（第８図１）　製作に際しロクロを使用しているもので、体部から口縁部にかけて内彎気味に外傾し、口縁部が外反するものである。底部は回転糸切り技法により切り離され、内外面ともに無調整である。なお、内面のほぼ全体にカーボンが付着している。

〔性格等〕　この遺構は、二つの小ピットが独立した遺構ともみれるが、本来は、達磨状の平面形を有していたものが上部を削平され底部が残存したものとも推定される。底面に火を受けた痕跡のあること、堆積土中に炭化物、焼土等が含まれていること等から、一定期間火を使用した跡と考えられる。又、壁面より出土した坏が少ないながら一応構築した時期を推定する資料にはなるだろう。しかし、明確には時期、性格とも不明といわざるを得ない。類似の遺構としては、規模の大小の違いはあるが柳田館[註(1)]、栗田II遺跡[註(2)]の焼土遺構がある。

註(1)　柳田遺跡　岩手県文化財調査報告書第53集、東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書IV　昭55．3　岩手県教育委員会・日本道路公団

(2)　栗田Ｉ・II遺跡　第１回現地説明会資料　昭55．6　岩手県教育委員会

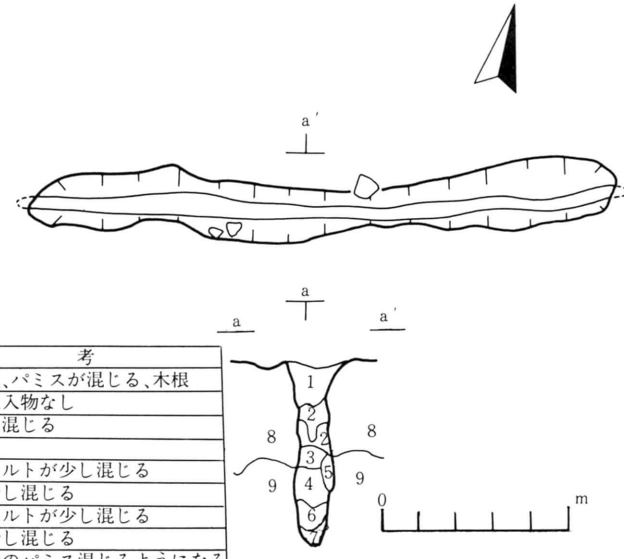
4　土　壙

第 1 号溝状土壙（Fc50）（第 9 図）

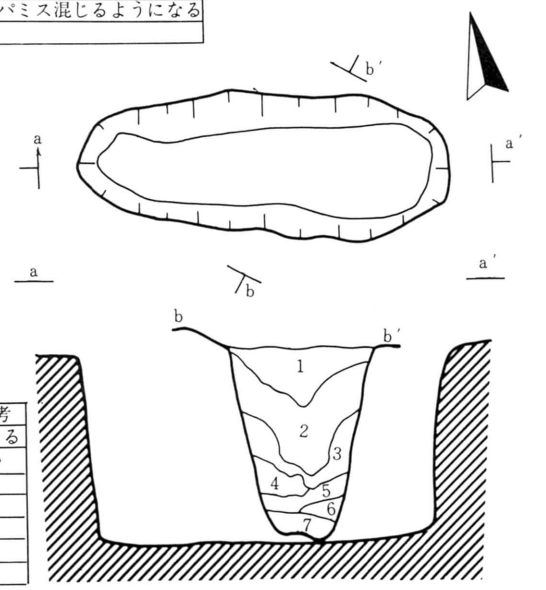
〔遺構の確認〕　調査区の南、2 号溝の北約 5 mの地山面で確認したものである。

〔平面形〕　開口部及び底部の平面形ともに東西に長い溝状を呈している。

〔断面形〕　長軸断面の両壁は底部においてそれぞれわずかに抉り込みがみられるが、ほぼ



層	土　色	土　性	備　　考
1	暗褐色	シルト	炭化物微量、パミスが混じる、木根
2	暗褐色	シルト	木根の他混入物なし
2′	黄褐色	シルト	腐植土少し混じる
3	黒　色	腐植質	
4	明褐色	シルト	黒褐色のシルトが少し混じる
5	黄褐色	シルト	パミスが少し混じる
6	黒褐色	シルト	暗褐色のシルトが少し混じる
7	黄褐色	シルト	パミスが少し混じる
8	黄褐色	シルト	下方に多量のパミス混じるようになる
9	黄橙色	パミス	礫が混じる



層	土　色	土　性	備　　考
1	暗褐色	シルト	腐植土や、パミス混じる
2	黒褐色	シルト	1 層より汚れが強い
3	褐　色	シルト	
4	明黄褐色	シルト	
5	黄褐色	シルト	
6	黄褐色	シルト	
7	明黄褐色	シルト	

第 9 図　第1･2号溝状土壙　0　1 m

真直に開口部へ向う。短軸断面は、底部より多少屈折しながら開口部に向い、開口部近くでわずかに開く。いずれも柱状に近い形態を呈している。

〔規　模〕　開口部は長軸約3.2m、短軸約0.4m、底部長軸約3.2m、短軸約0.1m、深さ0.95mである。

〔堆積土〕　8層に認められた。いずれも自然崩落や上部からの流入による自然堆積の様相を呈している。

〔年代決定資料〕　なし

〔性格等〕　陥し穴の機能をもつ陥し穴状遺構[註(1)]といわれているものと類似のものであろう。

第2号溝状土壙（Ed53）（第9図）

〔遺構の確認〕　調査区の北側、第1号溝の西約15m地点の地山面で確認したものである。

〔平面形〕　開口部及び底部の平面形は東西に長い幅広の溝状を呈している。

〔断面形〕　長軸断面形は、両壁は開口部に向ってほぼ垂直に向う柱状を呈しており、短軸断面形は上部がやや開き気味のU字状を呈している。

〔規　模〕　開口部は長軸約2m、短軸約0.75m、底部長軸約1.75m、短軸約0.4m、深さ約1mである。

〔堆積土〕　7層認められたが6層に大別される。いずれも両壁の崩落や上部からの流入による自然堆積の様相を呈している。

〔年代決定資料〕　なし

〔性格等〕　陥し穴の機能をもつ陥し穴状遺構[註(2)]といわれているものと類似のものであろう。

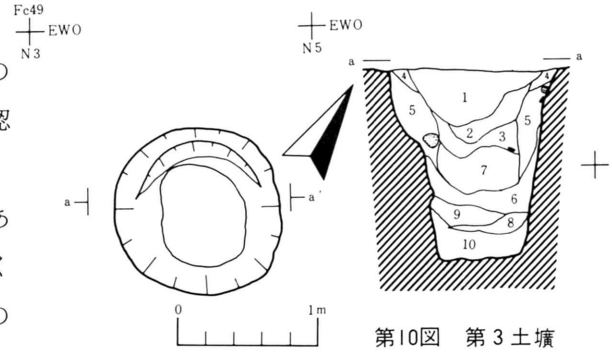
註(1)　湯沢遺跡　岩手県埋蔵文化財センター調査報告書第2集昭和53年　岩手県埋蔵文化センター
　　大緩遺跡　岩手県文化財調査報告書第31集　東北自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ　昭和54年　岩手県教育委員会、日本道路公団

(2)　同上

第3号土壙（Fc49）（第10図）

〔遺構の確認〕　調査区の南、1号溝の約9m南東、2号溝との間の地山面で確認したものである。

〔平面形・断面形〕　平面形は円形である。又、断面形は、開口部近くで少し広くなっているがほぼ円筒形といってよいものであろう。



第10図　第3土壙

〔規　模〕　開口部は直径約1.2m、底径約0.6m、深さ1.35mである。

〔堆積土〕　10層認められたが6層に大別することができる。1層は黒褐色の腐植質土、2

層は、黒褐色土混じりの明黄褐土シルト、3層は、黄褐色シルト、4層は腐植質土と明褐色シルトの混じったシルト、5層は褐色シルト、6層は黒色の腐植土である。

〔出土遺物〕　なし

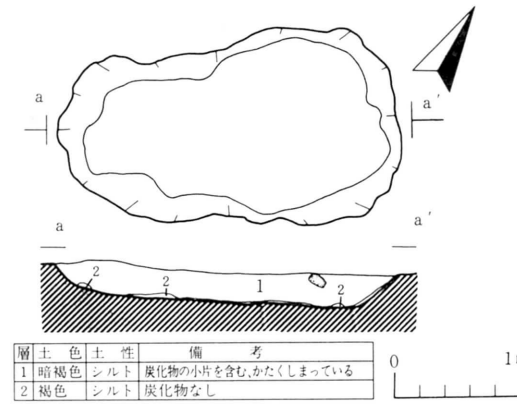
表3．第3号土壙堆積土

大別	層	土　色	土　性	備　　考
I	1	黒 褐 色	腐 植 質	焼土微量、草木根を含む
II	2	明 褐 色	シ ル ト	1層の黒褐色、腐植土が混じる
	3	明黄褐色	シ ル ト	ほとんど混じらない
III	4	黄 褐 色	シ ル ト	地山のシルトと類似、小石、腐植土混じる
	5	明黄褐色	シ ル ト	地山のシルトと類似、汚れが少い、しまりがわるい
	6	明黄褐色	シ ル ト	地山のシルトと類似、5層より、よりやわらかい
IV	7	黒黄褐色	シ ル ト	腐植土が多く混じる
V	8	暗 黄 色	シ ル ト	地山のシルトと類似
	9	明 黄 色	シ ル ト	地山のシルトと類似
VI	10	黒　　色	シ ル ト	腐植質、グライ化している

第4号土壙（Fe49）（第11図）

〔遺構の確認〕　調査区の西側、Ee49焼土遺構の南約4m、第1号溝との間の地山面で確認したものである。

〔平面形・断面形〕　平面形の開口部は幅の広い楕円状であるが底面形は中央部が少しくびれてダルマ状を呈している。断面形は立ち上りの比較的緩かな深皿状である。



層	土　色	土　性	備　　考
1	暗褐色	シルト	炭化物の小片を含む,かたくしまっている
2	褐色	シルト	炭化物なし

第11図　第4土壙

〔規　模〕　長径約2.7m、短径約1.6m

〔堆積土〕　2層認められた。1層は暗褐色のシルトで底面を除くほぼ全体に堆積し、2層は褐色のシルトで底面にわずかに堆積している。

〔出土遺物〕　なし

5　溝

第1号溝（第1図、第12、13図）

〔遺構の確認〕　この溝の一部分は前年度調査（第III地区）していたものであり、ひきつづき調査した結果第VI調査区のほぼ中央附近の地山で確認したものである。

〔重複等〕　南端近くでは第3号溝によって東西に切られ、北端の縁辺近くでは、第2号溝の支溝によってほぼ南北に切られている。

〔形状・方向〕　溝の断面形は、南端部分では幅広のU字状、或いは逆台形状を呈し底面もほぼ平坦である。北側に移行するにつれ、断面形は床面が抉れてV字に近い形状を呈しており

特に、東より支溝が合流している地点附近がその傾向が強い。更に北端近くは抉れが激しくなり断面形はロート状になっている。溝は、調査区の中央附近を南西より北東に走っており堀跡へと流れ出している。又、南側約10m及び約34m地点にはそれぞれ東より西流して小支溝が合流している。又、約20m地点では第３号溝が、北端では第２号溝の支溝が１号溝を切っている。

〔規　模〕　残存長は約64mで前年度調査分もあわせると総延長約83mの溝である。上幅は約50～80cm、底面幅約10～50cm、深さは約50～70cmで北側ほど深くなっている。なお西流して合流する小支溝１、２は断面形がU字状及び逆台形状で、残存長は約15m、18m、幅約30cm、20cm、深さは約25cm及び10cm前後である。

〔堆積土〕　場所によって違いが認められ、７層にも細別されたところもあるが全体としてはおよそ２層～３層に大別することができる。即ち南側部分においては、暗褐色土、黄褐色粘土暗褐色土に大別され、北に移行するにつれ黄褐色の粘土が認められず黒褐色土と黄褐色の粘土混じりの暗褐色土の２層のみになる。

〔出土遺物〕　堆積土及び底面より土師器片８、須恵器片27、陶器片１、縄文土器片８と、古銭２枚、鉛玉５個、鉄製品等が出土している。

土師器　いずれも製作に際してロクロを使用しているものとみられる坏、甕の破片であるが実測できるものはない。

須恵器（第14図１～５）　外面に平行叩き目文、内面に当て具痕の認められるものや、内外面ともにナデだけのもの等大部分は甕の破片である。(1)は推定口径38.3cmの大甕の破片である。(2)は底部切り離し技法が回転糸切り無調整の坏の底部（推定5.4cm）である。

陶器（第14図６）　低い高台（推定底径51.1cm）の碗形のものの底部と推定されるもので内面と外面の底部近くに灰オリーブ色の釉のかかっているものである。

縄文土器（第14図７～11）　弧状沈線の認められるものや縄文だけの施文している甕の体部破片である。

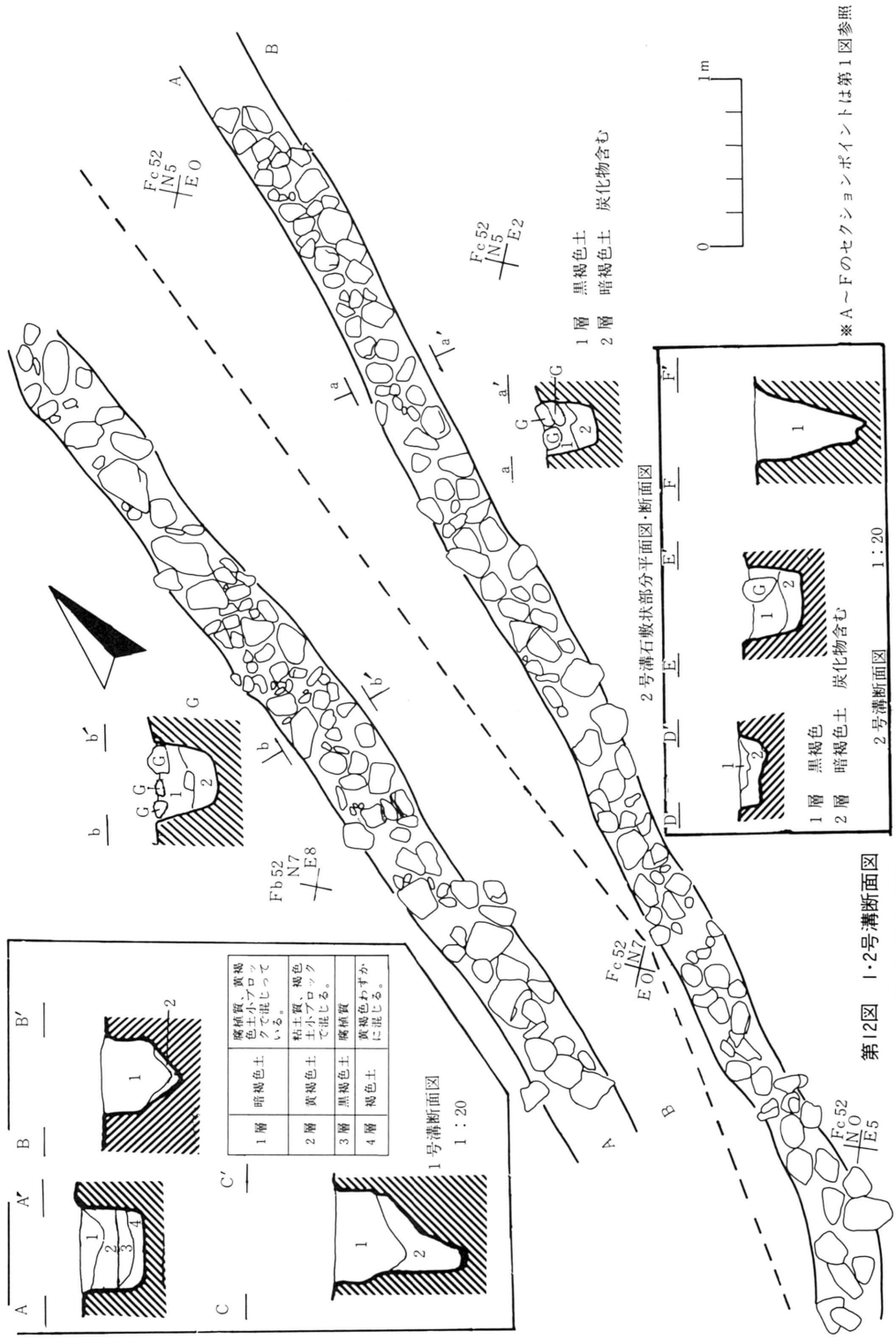
鉛玉　長径1.13cm～1.28cm、短径1.05cm～1.16cmのほぼ球に近いもので表面に白色の「サビ」が付着している。重量は4.9ｇ～7.7ｇである（第４表）。

古銭　「宣徳通宝」と「永」と読める破片である。「永楽通宝」の破片と推定される。

鉄製品（第15図１～４）　銹化が進んでおり明確ではないが、いずれも鉄釘と推定されるもので、頭部の存在するものはL字状に曲っている。現存長は（3.0cm、3.3cm、5.4cm、3.5cm）である。なお、断面は方形を呈しているものが多い。

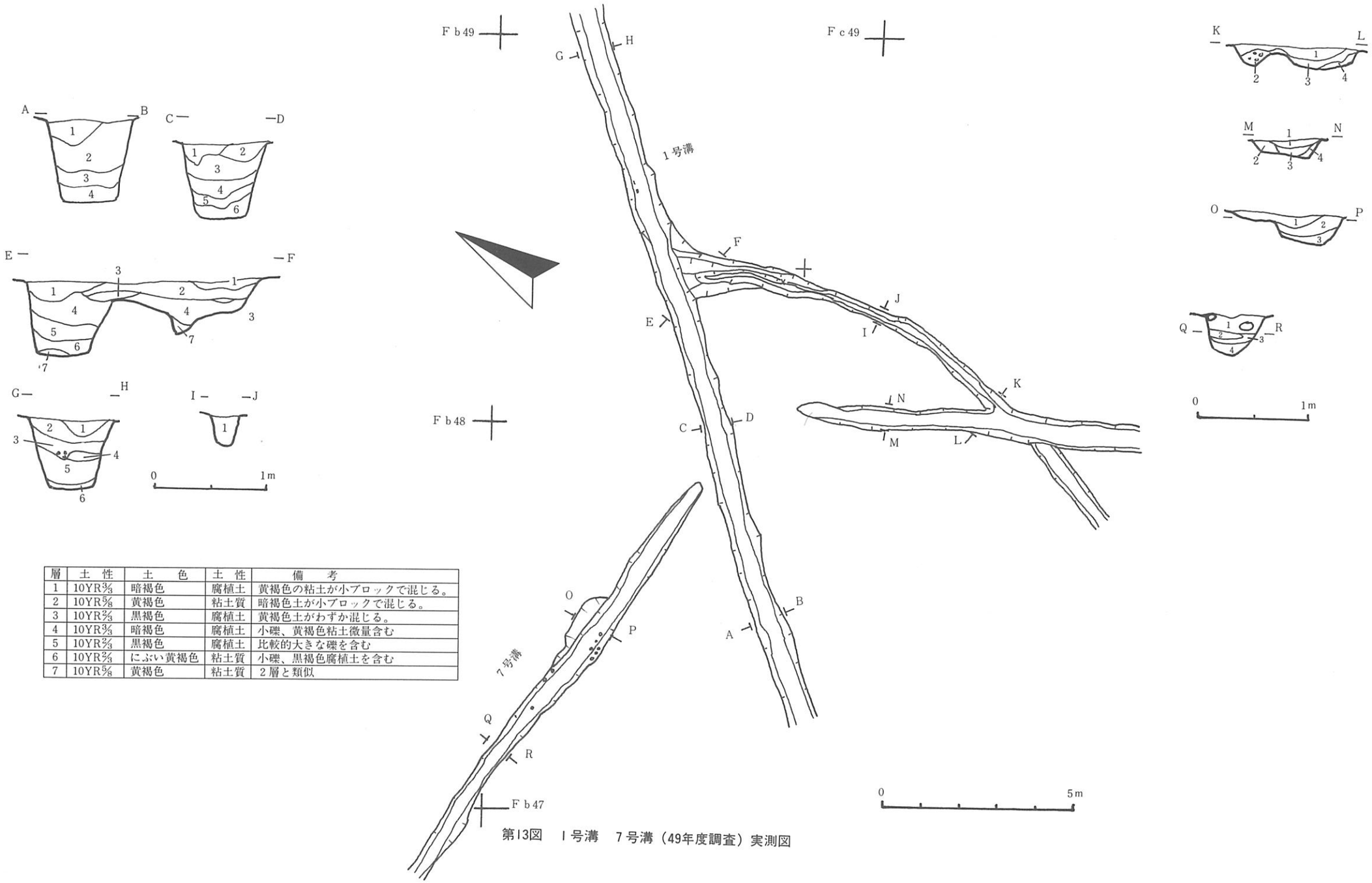
第２号溝（Fe49）（第１図、第12図）

〔遺構の確認〕　調査区の南東端、第１号竪穴状遺構の西約2.5mの地点から北端にかけての地山面で確認したものである。



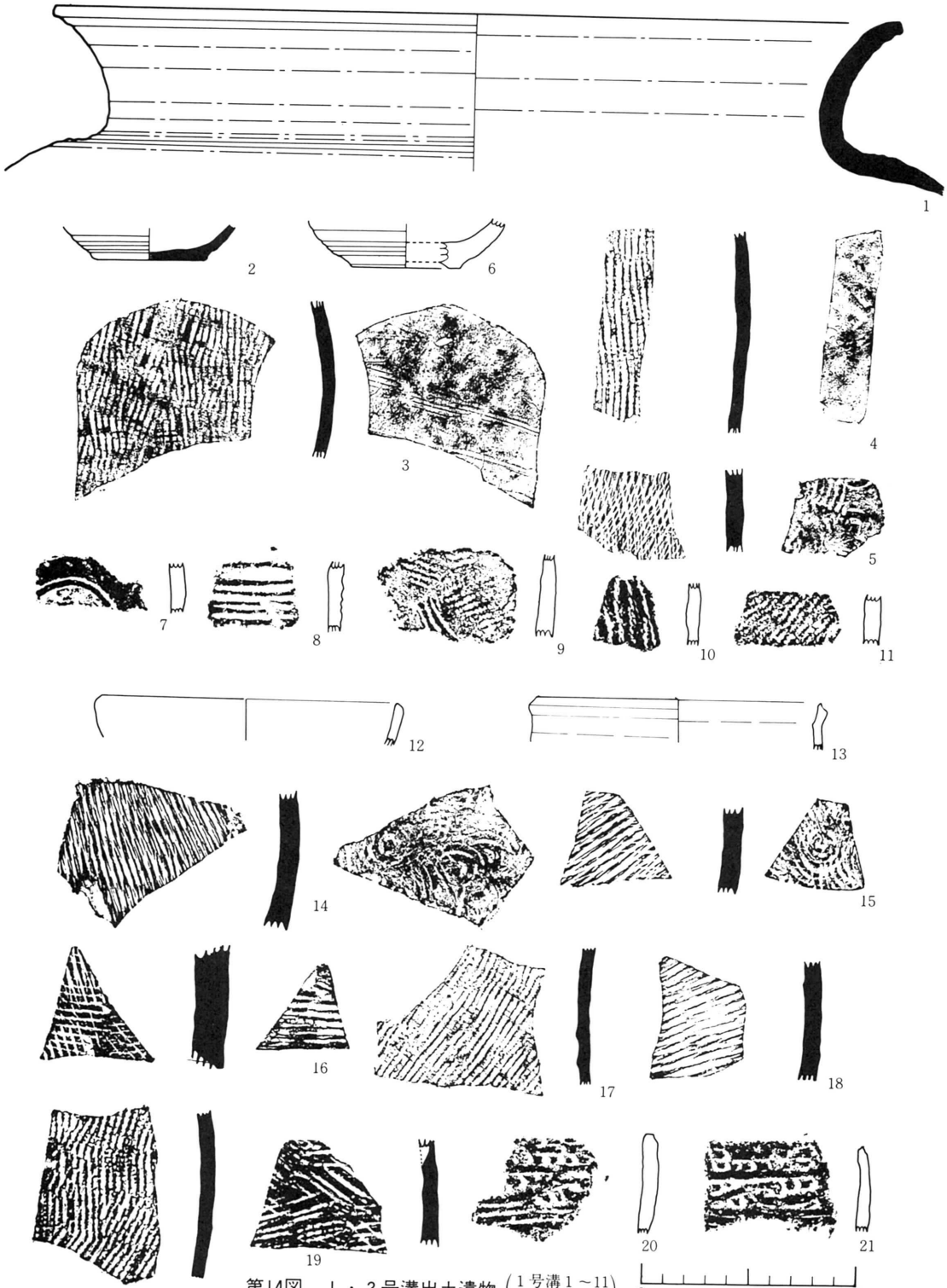
第12図　1・2号溝断面図

2号溝石敷状部分平面・断面図



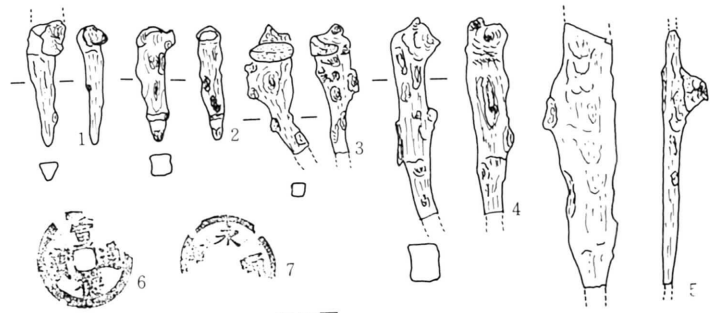
層	土 性	土 色	土 性	備 考
1	10YR3/3	暗褐色	腐植土	黄褐色の粘土が小ブロックで混じる。
2	10YR5/8	黄褐色	粘土質	暗褐色土が小ブロックで混じる。
3	10YR2/3	黒褐色	腐植土	黄褐色土がわずか混じる。
4	10YR3/3	暗褐色	腐植土	小礫、黄褐色粘土微量含む
5	10YR2/3	黒褐色	腐植土	比較的大きな礫を含む
6	10YR2/3	にぶい黄褐色	粘土質	小礫、黒褐色腐植土を含む
7	10YR5/8	黄褐色	粘土質	2層と類似

第13図　1号溝　7号溝（49年度調査）実測図



第14図　1・2号溝出土遺物（1号溝1～11 / 2号溝12～21）

〔重複等〕　北端近くで縁辺沿いに南流して２号溝と合流する支溝が、第１号溝を切っている。



第15図
鉄製品　（１～４）1 号溝　（５）2 号溝　古銭（１号溝）

〔形状・方向〕　溝の断面形は、南側は逆台形状であり、北へ移行するにつれて深いＵ字状を呈する。この溝も、ほぼ南から北へ走っているもので北端で堀跡へ流れ落ちている。落ち口の南方約７ｍの地点には、西より縁辺沿いに流れて支溝が合流している。断面形は逆台形状である。

〔規　模〕　残存長は約71ｍ、支溝は約21ｍである。上幅はいずれも約40～60cm、底面は30～40cmで北端にいくほど深くなっている。

〔堆積土〕　場所によって部分的な相違が多少あるが、ほぼ２層に大別される。１層は黒褐色のシルトで主に溝の上部に堆積し、２層は明褐色パミス混じりの暗褐色シルトで底部近くに堆積し、いずれも自然堆積の様相を呈している。なお溝の南端より北へ約30ｍの地点附近から縁辺部にかけては溝の上面まで人頭大からこぶし大の円礫がびっしりと敷石状に入っていた（第12図）。

〔出土遺物〕　堆積土及び石敷状の石の間や底面より、土師器20、須恵器117、縄文土器片４、鉛玉17個、鉄玉５個、鉄製品等が出土している。この中で土器片、鉄玉・鉛玉ともに石敷状の石の間より出土しているものが比較的多い。

土師器　いずれも製作に際してロクロを使用しているものと推定されるものの破片である。（第14図12）は内面ミガキ、内黒処理されている坏。⒀は口唇部が上方に引き出されて最大径が口縁にある長胴の甕と推定されるものである。その他甕の口縁はいずれも「く」の字に外反し、口唇部が上方に引き出されている形のもので、坏の底部は回転糸切りのものの破片である。

須恵器（第14図14～19）　外面に平行叩き目文、内面に当て具痕のみられるもの、内外ともにナデだけのもの等があり、いずれも甕の破片とみられるものである。

縄文土器（第14図20、21）　体部外面に羊歯状文の文様がみられるものである。

鉛玉　長径1.09cm～1.28cm、短径0.72cm～1.21cmの球状のもので一部つぶれた形のものや欠損したものもみられる。表面には白色の「サビ」が付着している。重量は3.02ｇ～7.9ｇである（表４）。

鉄玉　長径1.50cm～2.0cm、短径1.18cm～1.55cmでほぼ球状のものである。表面には「サビ」

が付着している。重量は3.2ｇ～7.95ｇである（表４）。

鉄製品（第15図５）　現存長約6.2cm、最大径幅1.5cm、厚さ約0.4cmの先端がせまくなっている板状のものである。

第３号溝（第１図）

〔遺構の確認〕　調査区の南側、第４号土壙の東約４ｍ附近の地山面で確認したものである。

〔重複等〕　１号溝の南端近くで１号溝を東西に切っている。

〔形状・方向〕　断面形は、逆台形状を呈し、西から東へ走っているものである。

〔規　模〕　残存長は約9.5m、上幅約25cm、底面幅約10cm、深さは約10cm前後である。

〔堆積土〕　黒褐色のシルト一層のみである。

〔出土遺物〕　なし

〔その他の溝〕　以上の溝の他に第４土壙の南側地点の地山面に、東西に走り東端が北に曲り自然消滅する形になっている４号溝、及びそれにほぼ平行して走る５号溝、その溝の一辺が重複する６号溝がある。更には南端で西から東へ走り１号溝へ注いでいたと思われる７号溝等がある。これらはいずれも断面が深皿状でその先端が削平のためかいずれも自然消滅しているものである。なお堆積土はほとんどのものが黒褐色シルト一層のみで、特に遺物は出土していない。

表４　鉛・鉄玉計測表

No.	材質	出土地	層位	長径	短径	重量	備　考	No.	材質	出土地	層位	長径	短径	重量	備　考
1	鉛	１号溝	埋土	1.22	1.16	4.9ｇ	ほぼ球	16	鉛	２号溝状	埋土	1.13	1.10	7.18ｇ	
2	〃	〃	〃	1.13	1.10	5.0ｇ	〃	17	〃	〃	〃	1.20	1.19	7.20ｇ	一部平担
3	〃	〃	〃	1.14	1.08	7.3ｇ	〃	18	〃	石敷溝	〃	1.12	1.12	5.9 ｇ	
4	〃	〃	〃	1.24	1.05	7.7ｇ	〃	19	〃	〃	〃	1.18	1.10	5.3 ｇ	
5	〃	〃	〃	1.28	1.18	5.5ｇ	一部平担	20	〃	〃	〃	1.09	1.02	5.2 ｇ	
6	〃	２号溝	〃	1.23	1.18	6.3ｇ	ほぼ球	21	〃	〃	〃	1.05	1.10	4.7 ｇ	
7	〃	〃	〃	1.20	1.10	7.0ｇ	〃	22	〃	〃	〃	1.21	1.15	3.5 ｇ	一部欠損
8	〃	〃	〃	1.05	1.03	6.0ｇ	〃	23	〃	表　採	〃	1.18	1.1.	5.2 ｇ	
9	〃	〃	〃	1.20	0.72	6.0ｇ	一部平担	1	鉄	石敷溝	〃	1.50	1.40	6.5 ｇ	
10	〃	〃	〃	1.05	0.98	3.02ｇ		2	〃	〃	〃	1.28	1.10	5.7 ｇ	一部欠損
11	〃	２号溝状	〃	1.25	1.03	8.75ｇ		3	〃	〃	〃	1.60	1.52	6.7 ｇ	
12	〃	〃	〃	1.28	0.93	8.2ｇ		4	〃	〃	〃	1.65	1.55	(3.2ｇ)	約½欠損
13	〃	〃	〃	1.20	1.07	7.9ｇ		5	〃	〃	〃	2.0	1.42	7.95ｇ	(楕円状)
14	〃	〃	〃	1.15	1.04	6.5ｇ									
15	〃	〃	〃	1.18	1.01	7.6ｇ	一部平担								

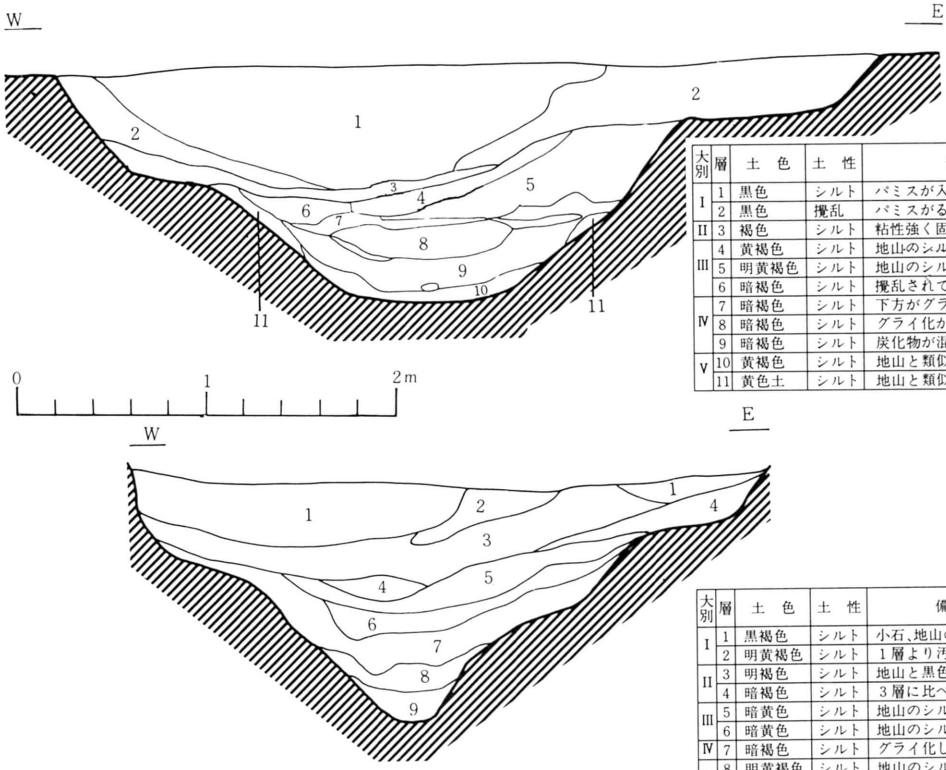
６　堀（第１図、第16図）

〔遺構の確認〕　第IV地区の西端地域の地山面で確認したものである。

〔重複等〕　認められない。

〔形状・方向〕　堀の断面形は箱薬研状を呈しており、底面はほぼ平坦である。なお、南側部分の底面には人頭大からこぶし大の礫石の散在が認められたが、北側においては認められない。堀は調査区の西端をほぼ南から北へ走っている。

〔規　模〕　残存長は、途中の未調査部分も含めて約50mである。上幅は3.5m～５m、底面幅は0.5m～１mであり、深さは検出面より1.2m～1.25mである。南端と北端の比高差は約1.08mであり、ほとんど勾配はないといってよい。又、堀の東西法面は、それぞれ約45°～50°、約40°～54°であり、北側ほど法面の勾配が急になっている。



大別	層	土　色	土　性	備　　考
I	1	黒色	シルト	パミスが入り、炭化物が粉末状で混じる。
	2	黒色	攪乱	パミスがるが、炭化物が少ない。
II	3	褐色	シルト	粘性強く固くしまっている。
III	4	黄褐色	シルト	地山のシルトがわずかに混じる。
	5	明黄褐色	シルト	地山のシルトがわずかに混じる。
	6	暗褐色	シルト	攪乱されている。
IV	7	暗褐色	シルト	下方がグライ化し、酸化鉄が入る。
	8	暗褐色	シルト	グライ化が少ない。
	9	暗褐色	シルト	炭化物が混じり、グライ化し、酸化鉄が入る
V	10	黄褐色	シルト	地山と類似、褐色土混じる。
	11	黄色土	シルト	地山と類似

大別	層	土　色	土　性	備　　考
I	1	黒褐色	シルト	小石、地山のシルトが混じっている
	2	明黄褐色	シルト	１層より汚れが少ない
II	3	明褐色	シルト	地山と黒色シルトの混じったもの
	4	暗褐色	シルト	３層に比べて汚れが強い
III	5	暗黄色	シルト	地山のシルトと類似、小石含む
	6	暗黄色	シルト	地山のシルトと類似、礫が多い
IV	7	暗褐色	シルト	グライ化し、酸化鉄の沈殿がある。
V	8	明黄褐色	シルト	地山のシルトの汚れたもの
	9	黄褐色	シルト	地山のシルトの汚れがつよい。

第16図　堀状遺構断面図

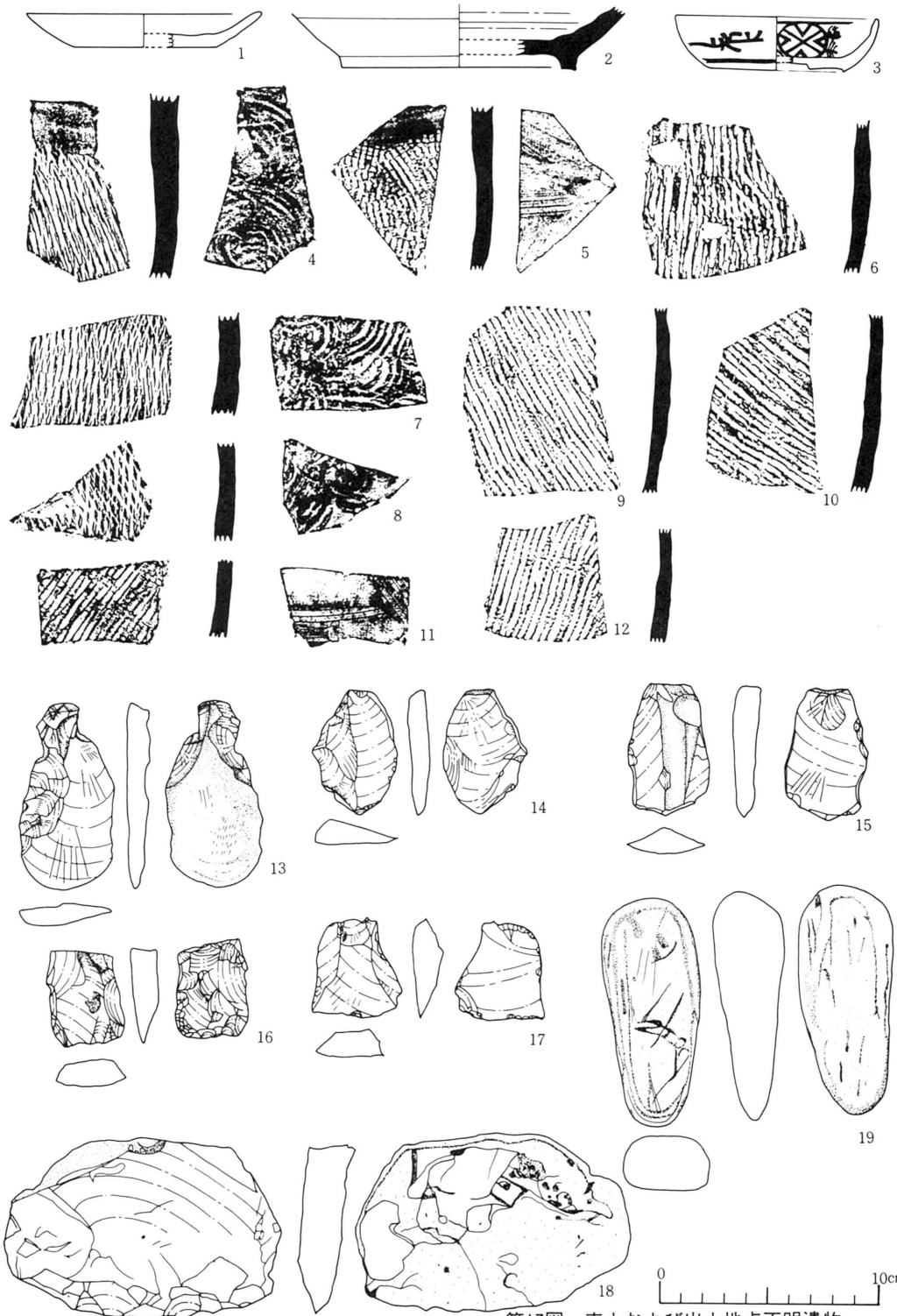
〔堆積土〕　地点により若干の相違があるが、堆積土は９～11層認められた。これらは、５層に大別することができる。Ｉ層は黒色、褐色のシルトで攪乱層であり、主に堀の中半より上部に堆積している。II、III層は主として暗褐色のシルトで中半附近に堆積している。IV層は暗褐色のシルトでグライ化し酸化鉄の沈澱がみられるもので主に底部よりやや上部に堆積している。Ｖ層は黄褐色、明黄褐色のシルトで主に底部に堆積しているものである。

〔出土遺物〕　底面のやや上部より馬の歯とみられるものが出土したが他は特に出土していない。

7　表土および出土地点不明遺物

ここでとりあげる遺物は、表土および出土地点不明の遺物である。遺物には土師器６、須恵器66、磁器１、石器５、鉛玉１、縄文土器３等がある。

土師器　いずれも製作に際しロクロを使用したとみられるものの破片である。(第17図１)は、



第17図　表土および出土地点不明遺物

底部から口縁にかけて外傾する浅い灯明皿風の坏である。

須恵器

（第17図２）は壺形、あるいは碗形土器と推定されるものの高台部の破片である。（第16図４～12）は外面に平行叩き目文、内面に当て具痕、横ナデ等の認められる壺あるいは甕の破片の一部である。

磁器（第17図３）　染付による文様の認められる内彎気味の口縁を有する浅皿状のものの破片である。

石器（第17図13～17）　⒀は片面のみに刃部加工の認められる縦形石匙（硬質泥岩）である。（14～16）は片面あるいは両面に刃部加工の認められる不定形石器（凝灰質珪質泥岩、珪質泥岩、硬質泥岩）である。⒄は表面が研磨され削痕の認められる砥石状の石器（粘板岩ホルンヘルス）である。

鉛玉　１個出土している。表面に白色の銹の付着しているもので長径1.18cm、短径1.10cm、重さ5.2ｇである（表４）。

その他、鉄製品として釘、鍬あるいは鋤の一部と推定されるものが出土しているが、いずれも銹化がすすみ実測できるものはない。

II　遺物、遺構の考察とまとめ

竪穴状遺構、焼土遺構、土壙等については前項で一応性格的なもの、時期的なものについて記述しているのでここでは竪穴住居跡、溝、堀について述べる。

1　土器の組み合せと遺構の年代

⑴　住居跡

住居跡から出土した遺物は、土師器、須恵器である。これらについて数量的に少ないながらも図示遺物を対象として器種の特徴や製作に際しての技法によって分けると次のようになる。

土師器

坏　いずれも製作に際してロクロを使用しているもので、底部の切り離し技法は回転糸切りで再調整のないものである。これらは器面調整の違いから二つに分けられる。

１類―内面がヘラミガキされ黒色処理されているもの

２類―内外面ともに再調整の施されていないもの

甕　いずれも最大径が口縁部にあると推定されるもの

須恵器

坏　底部の切り離し技法は回転糸切り無調整のもの

甕　叩き目が表面に施されているもの

以上のような組み合せを有する住居について、出土点数が少ないので問題もあろうが、坏を中心として編年上の検討をしてみることとする。この住居跡の土器の組み合せは、２類を中心

として構成され[註(1)]、それに1類及び須恵器が共伴しているものである[註(2)]。

県内において類似の資料が出土する遺跡として報告されている中で主なものは、宮地遺跡[註(3)]、力石II、兎II遺跡[註(4)]、下羽場遺跡[註(5)]等をあげることができる。これらの遺跡における土器の組み合せをみると、宮地遺跡においては「土師器坏で内面黒色処理、ヘラミガキし、糸切り無調整のものを主体とし、赤焼き土器坏がかなりの割合で共伴し、再調整を施す土師器坏もわずかに含まれる。又、須恵器も完形品はないが、わずかにみられる」(第III群土器、第III期)力石II、兎II遺跡においては「酸化炎焼成、内面黒色処理されていない糸切り無調整の坏を主体とし、内面黒色処理されヘラミガキされた糸切り無調整のものや同じ（回転糸切り後再調整の加えられているもの等が共伴するもの）須恵器は全く認められない」(III期ａ)、下羽場遺跡においては出土比率に多少の異りが認められるが「回転糸切り無調整の土師器を主体とし、それに内面黒色処理された無調整の土師器や須恵器が共伴する」(Ｉ－ｂ群)等のあることが報告されている。以上の結果をみると土器の組み合せはほぼ同じであるが、中心となる土器については微妙な相違点が認められる。しかし、大筋としては、回転糸切り無調整の土器が「増加しつつある」或は、「その構成の中心になっている」ということはいえるであろう。その中でも下羽場遺跡におけるＩ－ｂ群の構成と非常に類似した構成を示しているといってよいものである。

次に、年代についてみると、宮地遺跡の「第III群、第III期」は「およそ9世紀後葉から10世紀中葉」に、力石II、兎II遺跡では、「およそ10世紀後葉から11世紀」に、下羽場遺跡においては「およそ10世紀代」にというように主体となる土器構成や前後する共伴する土器構成の相異等から、それぞれの年代観を提示している。さて、土器の成形技法が「ロクロ未使用のもの」から「ロクロ使用へ」、底部の切り離し技法は「ヘラ切りから回転糸切りへ」と移行し、調整は「再調整のもの」から「無調整のもの」へと変化していくことが大勢として「旧→新」という時間的過程としてとられることが許されるならば、更には、須恵器においては、「徐々に須恵器生産が衰退し、最終的には全く須恵器がみられなくなり、須恵系土器生産の隆盛期をむかえる」という観点で土器生産の過程をとらえるならば、当住居内におけるその組み合せというものは「内黒土器が漸減し須恵系土器の隆盛期をむかえ、須恵器生産が衰退していく、その過渡期的要素をもったもの」と解釈することが可能であろう。以上のような事実をもとにその年代を推定するならば、10世紀代という年代を考えても大過のないところであろう。

註(1) 須恵系土器、土師系土器といわれるものと類似のものと考えている。

(2) 第IV区における住居跡の土器構成も同じような構成を呈している。

(3) 「宮地遺跡」 岩手県文化財調査報告書第48集 東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書IV 昭和55年 岩手県教育委員会、日本国有鉄道盛岡工事局

(4) 主要地方道一ノ関、北上線関連遺跡発掘調査報告書「岩手県江刺市、力石II、兎II、落合III、朴ノ木遺跡」岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書第８集 昭和54年 岩手県埋蔵文化財センター

(5) 「下羽場遺跡」 岩手県文化財調査報告書第３２集 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書II

昭和54年　岩手県教育委員会、日本道路公団

(2) 溝

溝は合計10条（支溝も含む）検出されている。2、3号溝を除いてその首尾は明かになっておらずこれらの溝の性格、機能等について究明することは多少無理があると思われるが若干説明を加えることにする。

性格と遺物

規模、形態については既述の通りであるが、その走行軸をみると南―北のもの(2号溝)、西―西のもの（7号溝)、南西―北東のもの（1号溝）等その方向はまちまちであり規則性は認められない。他の溝についても同じようなことがいえる。

次に、性格についてみると1号溝及びその支溝1と2号溝は底面の状態や堆積土の観察から水の流れていたことが予想され排水機能をもっていたものと考えられる。又、4、7号溝は先端が削平され不明になっているが、その傾斜からみて1号溝に入りこんでいた支溝と思まわれるものであり、これらも排水的機能を有していたものと思われるものである。3、5、6号溝については堆積土や底部の様子から特に排水的機能を有していたということは認められない。又、全ての溝について、これらが何等かの区画、地境的機能を有していたかどうかについては周辺の状況から積極的にそれを説明するものはなく、その点については特に認められないといってよい。

最後に1号溝の南側部分（Fe51附近より南）は、埋土状況を観察すると地山の粘土質の黄褐色土が互層のような形で入りこんでおり、又2号溝の北側部分（Fe52附近より北）の敷石状の部分はある程度溝が埋まった段階で山石、川原石等が投げ入れられたものとみられ、これらの溝はいずれも何等かの人為的な手が加えられ埋められ整地されたことが考えられる。[註(1)]

遺物は、須恵器の破片が大部分であり、それに土師器、縄文土器、古銭、鉛玉、鉄玉、釘等が若干出土し、しかも、1、2号溝からの出土がほとんどであることは既述の通りである。

この中で古銭は永楽通宝（1411年)、宣徳通宝（1433年）の明銭であり、その他に不明銭が2枚出土しておりいずれも1号溝からの出土である。次に1号溝より鉛玉5個、2号溝より鉛玉17個、鉄玉5個が出土しているが、特に、石敷状の部分から多く出土しているのが特徴である。[註(2)]これらは、材質形状等から岩崎城本丸跡といわれる場所より出土した火縄銃の弾丸[註(3)]と同類のものと思われるものである。径1.0～1.3cm、重さ3.0～8.8gと多少のばらつきが目立つが、平均の重さが鉛玉約6.3g、鉄玉7.1gであり、これは柳田館遺跡[註(4)]、山中城跡III[註(5)]等で出土している弾丸と近似の数値を示しているものである。

以上のような事柄から溝は排水的機能以外に明確な性格づけをすることが出来ないが、石敷状の溝の存在やその石の間から比較的多量の弾丸が出たことは東側に存在する岩崎城跡との関

連を考える上での資料になるだろう。

(3) 堀

ほぼ南北に走る本遺構は堆積土の様子より底部には、わずかに水がたまっていた事が観察されるが、空堀的要素の強いものであったと思われるものである。又、この堀は自然流入や自然崩壊によって埋没したものではなく、その時期は不明であるが人為的に埋め戻された可能性の強いものであることが堆積土より観察される。従って、前述した溝も含めてこの地域は何等かの形で整地が行われた地域であることが推測される。

次に、その規模は首尾が判明しなかったため不明であるが、走行性から次のようなことが想定される。即ち、本地域の東側にはほぼ南北に走る堀跡が現存し、本丸の西側にある郭と本地域を区画しているが、今回調査した堀は、これとほぼ平行した形で南北に走っているものであり、首尾は不明ながらも、この地域を区画する性格をもったものであろうことが予想される。あるいは、現存する東側の堀の存在する以前は、西の部分は本地域の堀の部分まであり、ある時期に縮少して新しく東側の現在の堀を構築したということも考える。いずれにしても、この堀は、何等かの形で岩崎城跡といわれるものと関連のあったものと考えられそれと共に、本地域は広く、岩崎城跡と関連の深い地域であったと推定される。

註(1) 岩崎城跡発掘調査略報　板橋源　昭和47年　和賀町教育委員会
昭和46年の調査で同じような不規則に走る溝が数条検出されている。

(2) 「慶長５年（1600）和賀氏最後の城主義忠の弟忠親を擁して、旧家臣が岩崎城に立て籠って一揆を起した。……しかし、翌６年に至り伊達勢の支援も思うにまかせず、一揆勢は岩崎城に孤立した。そこを南部勢は鉄砲隊をもって攻め入り、城に火を放った云々」（日本城郭大系２）の中に以上の記事があり、短絡的に考えればこれらに関連のある鉄砲玉とも推察できる。しかし、正確には不明である。

(3) 注(1)に同じ

(3) 柳田館遺跡　東北縦貫自動車道関係地埋蔵文化財調査報告書　昭和55年　岩手県教育委員会、日本道路公団

(4) 山中城跡III　昭和51年　三島市教育委員会

2　まとめ

1．第III、VI地区は、縄文時代～平安時代～中世にかけての複合遺跡であり、発見された遺構は、住居跡１、竪穴状遺構１、焼土遺構１、溝状土壙２、土壙２、溝７、堀１である。

2．出土遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭、鉄製品、弾丸、石器がある。縄文土器には縄文時代晩期に属するものがある。又、土師器、須恵器は平安時代に属するものとみられるものである。古銭のように鋳造年代が室町時代と判明するものもあるが、他は、時期的に不明である。

3．出土遺物の年代から住居跡は平安時代に属するものと考えられるが、他の遺構は、時期的に不明である。

4．第III、VI地区は、他地域と共に主に平安時代～中世にかけての生活の場であったと考え

られるが特に岩崎城跡と関係の深い地域であったと思われる。

〔参考文献〕

和賀町史　昭和52年　和賀町教育委員会
鹿島館遺跡調査報告書 I　昭和50年　北上市教育委員会
日本城郭大系 2　青森岩手秋田　昭和55年　新人物往来社
南部諸城の研究（草稿）　沼館愛三　昭和52年　青森県文化財保護協会
「胆沢城出土の糸切轆轤土師器とその編年的考察」沼山源喜治　北奥古代文化 2 号
考古風土記　第 2 号　昭和52年
尻引遺跡調査報告書　昭和52年　北上市教育委員会
「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」　岡田茂弘、桑原滋郎　昭和49年　宮城県多賀城跡調査研究所研究紀要 1
「奈良、平安期土器の型式学的分析」　佐々間豊　昭和53年　考古学研究98　第25巻第 2 号

第 Ⅶ 地 区

第 VII 地 区

I　検出された遺構と遺物

第VII地区は梅ノ木遺跡の北西隅にあり、夏油川によって形成された扇状台地の北端に位置している。調査地は南北約90m、東西約100mの9,100m²であるが、土取り作業が進行しており南北約80m、東西約50mの逆三日月形に残された約2,000m²の部分である。なお、北東部には中、近世と考えられる墳墓群が含まれていたが、昭和49年11月、50年6月の二次調査が本調査に先だって和賀町教育委員会によって行なわれており、調査対象地から除外している。その調査報告は、「和賀町史」に掲載されており割愛している。ただし、縄文土器、石器等については当調査地との関連から本報告書で一括している。

なお、その遺物の取り扱いについては調査方法等が若干異なっているが、遺物包含層の遺物的な扱い方をしている。

当調査地から検出された遺構は竪穴住居跡3棟（うち1棟は一部分を残すのみである。）、炉跡1、焼土遺構3、埋設土器8、土壙6である。これらの遺構は調査区の北中央部にあり、ほぼ遺物包含層と重複し覆われている。竪穴住居跡はいずれも周溝の検証によって確認されたもので、保存状態はあまり良好とは言えない。従って、内部施設で把握されたものは炉跡、柱穴、周溝等の一部分であり、壁の確認されたものは1例のみである。

なお、炉跡、焼土遺構は竪穴住居跡の確認されなかったものであり、この中には住居跡に伴うものも含まれていると推測される。埋設土器は3例を除いて上半を欠損しており、住居跡同様に保存状態はあまり良くない。

遺構に伴う遺物の扱い方については、床面直上のものや埋設土器及びその埋土中のものを伴出遺物とし、住居跡、焼土遺構、土壙を覆う堆積土中のものは除外した。それは本遺跡の場合遺物の分布が調査区の北半分の全域に広がりを示しており、その遺構を覆う堆積土が遺構部分にそのまま関わっているとは言えないからである。

伴出した土器はすべて、広範囲の遺物包含層内のものと類似し、その分類の範疇に入り、ほとんど第II群土器（縄文中期前葉～中葉）である。完形品は埋設土器に使用されたもの3点、第3住居跡（Ba80）床面出土の1点、他はある程度復元可能なものもあるが破片である。また住居跡において、同時期内の土器組成を示す良好な出土は見られなかった。

石器は、第1住居跡炉跡（石篦状石器84）、第3住居跡床面（掻器99）、Bb77炉跡周辺の P_{14} 埋土（石匙15）、第1土壙埋土（石匙7）の4点である。尚、石器の説明及び実測図は数の少ないこともあって、包含層遺物と一括している。

住1	第1（Ah74－Ⅰ）竪穴住居跡
2	第2（Ah74－Ⅱ）竪穴住居跡
3	第3（Ba80）竪穴住居跡
炉	Bb77炉跡
A	Ai77炉跡　第1住居跡
焼1	第1（Ae80）焼土遺構
2	第2（Af80）焼土遺構
3	第3（Ag92）焼土遺構
埋1	第1（Ae77）埋設土器
2	第2（Ba74）埋設土器
3	第3（Ba77）埋設土器
4	第4（Ba80）埋設土器
5	第5（Ba83）埋設土器
6	第6（Bb74）埋設土器
7	第7（Bc77）埋設土器
A	Ai74埋設土器　第1住居跡
墳1	第1（Af71）土壙
2	第2（Ba56）土壙
3	第3（Bc74）土壙
4	第4（Bd3）土壙
A	Ai80土壙　第2住居跡？
B	Bb80土壙　第3住居跡
墳1	第1号墳墓
2	第2号墳墓

第Ⅰ図　第Ⅶ地区全体図

1 竪穴住居跡

第1（Ah74―Ⅰ）竪穴住居跡（第3図、図版1）

Ah74竪穴住居跡は炉跡及び周溝によって確認されたものであるが、周溝が切合関係にあり重複していると考えられる。切っているものを第1竪穴住居跡とし、他を第2竪穴住居跡として記述する。

第1住居跡は調査地のほぼ中央にあり、段丘崖の南約20mに位置している。

〔重複〕 前述の如く、第2住居跡と重複し切っている。当住居跡が同住居跡の建て替えの可能性がある。

〔平面形・規模〕 東辺が不明確であるが、南北約6.5m、東西約8.0mの長円形をなすと推測される。

〔床面・壁〕 地山を床面とし、北東に僅かに傾斜している。ほぼ平坦である。壁は確認されていない。

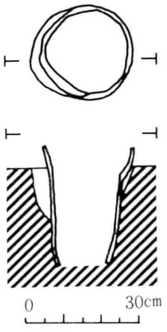
〔周溝〕 東辺を除いてほぼ全周する。幅は15～25cmで、深さが10cm内外である。

〔柱穴〕 住居跡内から検出された pit は22個である。この中には第2住居跡に伴うものも含まれていると考えられる。当住居跡に伴うとみられる柱穴は配置等から P3、P4、P8、P10、P16、P22の6柱穴である。柱配置は長軸を軸線とし、ほぼ対称形をなす。柱穴は直径20～30cmで、深さが44～57cmである。西端の2柱穴が近接してやや小さく、P8が18cmと極端に浅い。なお、P3、P4、P16、P22の4柱穴は外方に向って斜めに掘られている。P1とP12は幾分大きく周溝に接するか、近くにあり、貯蔵穴等が考えられる。

〔炉〕 炉跡は住居跡の中央やや東寄りにあり、南北約0.6m、東西約0.7mの扁平な川石を方形に並べた石囲い炉である。炉縁石は9個で、側縁を上にほとんど間隙なく設置されている。炉底下には直径0.9m、深さ15cmの掘り込みを有し、炭化物を含む暗褐色土を埋め戻して炉縁石を固定している。その上から縄文土器片84点が出土している。焼土は確認されていない。

しかし、炉跡に接して焼土混土の広がりが見られる。北のものは2.7×1.1mの不整長円形をなし、礫が散在する。南のものは2.4×0.8mで若干小さいが、ほぼ対称的な配置を示す。

〔その他の施設〕 住居跡西部に Ai74埋設土器がある。周溝の東約2.0m、炉跡の西方約3.5mである。土器より若干大き目の土壙に垂直（縦位）に設置されれたもので、暗褐色土で押さえられている。内部も同様の暗褐色土が充満している。土器は底部を欠損した深鉢形土器で、口縁端が床面から約7cm露出している。住居跡に伴うものと推察される。



Ａｉ74 埋設土器

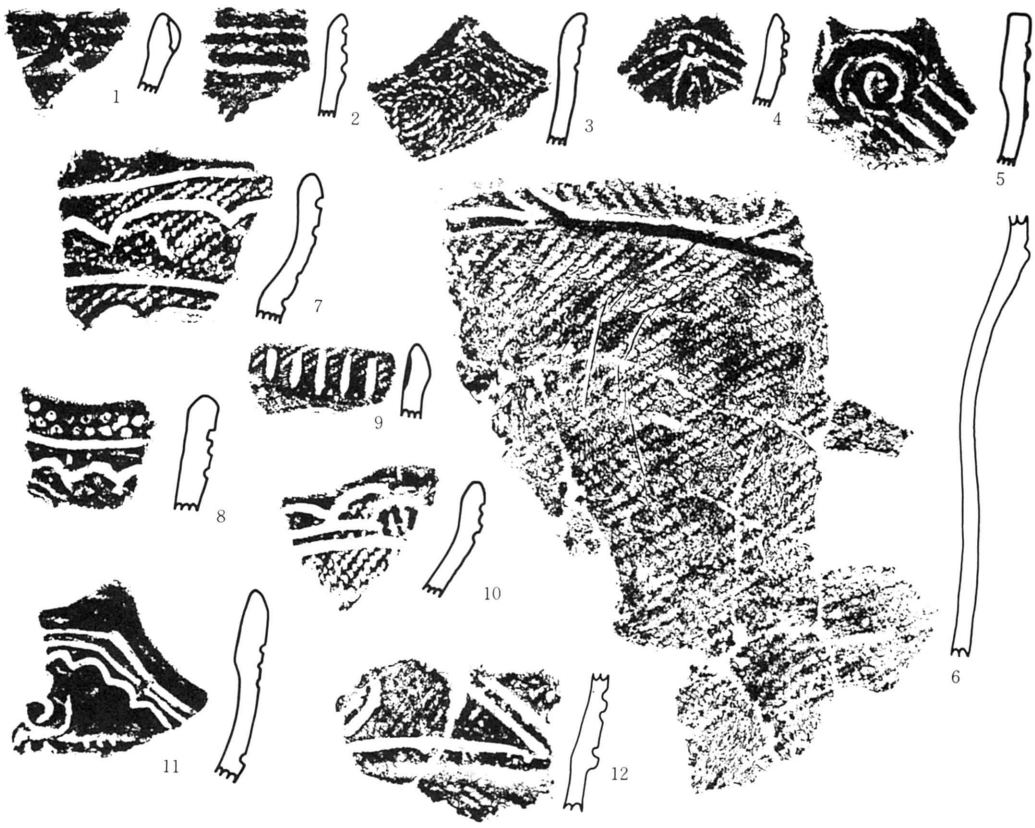
また、炉跡の東0.5mには Ai80土壙がある。焼土等が確認されていないが

炉跡の残存部と見られ、当住居跡に先行するものと考えられる。

〔出土遺物〕　埋設土器（第２図６）は、口縁を欠くが、口径約25cm、器厚６㎜の中型深鉢でキャリパー形であろう。隆起線の区画文に添って撚糸圧痕文が施され第II群５類ｃに分類できる。地文は単節斜縄文Ｒ－Ｌ横及び縦回転で、胎土はもろくにぶい褐色を呈する。胴部外面には煤が付着している。

床面から出土した遺物はいずれも破片で、口縁部４点(第２図、１、３、４、12)、胴部51点、底部６点である。分類上、II群１～５類のものが混入して見られる。縄文中期前葉の大木7b式期に比定できるものである。

炉跡からは第２図２、５、７～10など口縁部７点、胴部76点、いずれもII群土器片が出土している。また、石篦状石器（84）が発見されている。



第２図Ａｈ74住居跡出土土器　0　10cm

第２（Ah74－II）竪穴住居跡（第３図、図版１）

当遺構は周溝の一部から推定されるものである。

〔重複〕　第１竪穴住居跡とほぼ同位置にあり、大部分が同住居跡に破壊されている。